山東町埋蔵文化財調査報告書 Ⅳ

菅江遺跡発掘調査報告書

序

だいじに大事に使われていた窯

通称「横山」の北端近くから、東へ舌状に突き出た小高い丘。その南面の傾斜ぐあいが、いかにも「登り窯」の構築に適しているように見えました。杉・桧などが植林されていましたが「灰原」と思われる辺りには、無数の土器片が散乱していました。

この丘に接する集落の名は「菅江」(スエ) と呼ばれています。

ここは、須恵器を焼いた窯のあったところと伝えられる周知の遺跡でした。それが、土地開発事業（土砂採取）によって、平地化されることになりました。

また一つ、わたしたちのふる里から、祖先の〝なりわい〟を彷彿させる遺跡を失くしてしまうのです。残念です。惜しいと思います。申しわけないとさえ思えてなりません。

しかし、施工主の花沢工務店の理解と好意、区の人々の協力によって、事前に発掘し調査することができたことは、何より嬉しいことでした。

やはり、伝えられていたとおりでした。ここに、須恵器を焼いた窯の跡が眠っていました。ただ一基だけでしたが、何回も何回も修理した跡があり、わたしたちの祖先が、いかに大切に使ってきた窯であったかを、もの語っていました。

本報告書が、斯界の研究の進展に役立ってくれることは勿論、より多くの人々の埋蔵文化財の保全・保護の心を培ってくれることを祈ってやみません。

本調査に、本報告書の作成に、御協力くださった各位に、厚く御礼申し上げて序にかえます。

昭和62年３月

山東町教育委員会

教育長　西　秋　良　策

例　　言

1．本報告書は、山東町大字菅江地先に所在する菅江遺跡の埋蔵文化財についての発掘調査報告書である。

2．本調査は、花沢工務店（長浜市）の菅江土砂採取事業に伴うもので、滋賀県教育委員会事務局文化財保護課の指導・助言を得て、山東町教育委員会　社会教育課が実施した。

3．現地調査及び整理にあたっては、林　孝好・鵜野浩司・長野忠義・中嶋一人・田中養次・安田正浩・武立信明の諸君、中森清一・中森　進・中森よしの・高森ふさ子・中森清子・居林きよ・久保田みよゑの諸氏の参加と谷口千夏・谷沢稚香子の協力を得た。遺物写真については、寿福　滋氏（寿福写房）を煩わした。また、花沢工務店にも調査に際して御協力を得た。記して感謝の意を表したい。

4．調査及び本書の作製については、山東町教育委員会社会教育課主事、桂田峰男が担当した。

目　　次

序

例言

（目次・挿図目次・図版目次）

Ⅰ．はじめに（調査経過及び調査方法）…… 1

Ⅱ．位置と環境 …… 2

Ⅲ．検出遺構

1．窯跡 …… 4

2．灰原 …… 8

Ⅳ．出土遺物 …… 12

Ⅴ．おわりに …… 30

表1．出土遺物観察表 …… 32

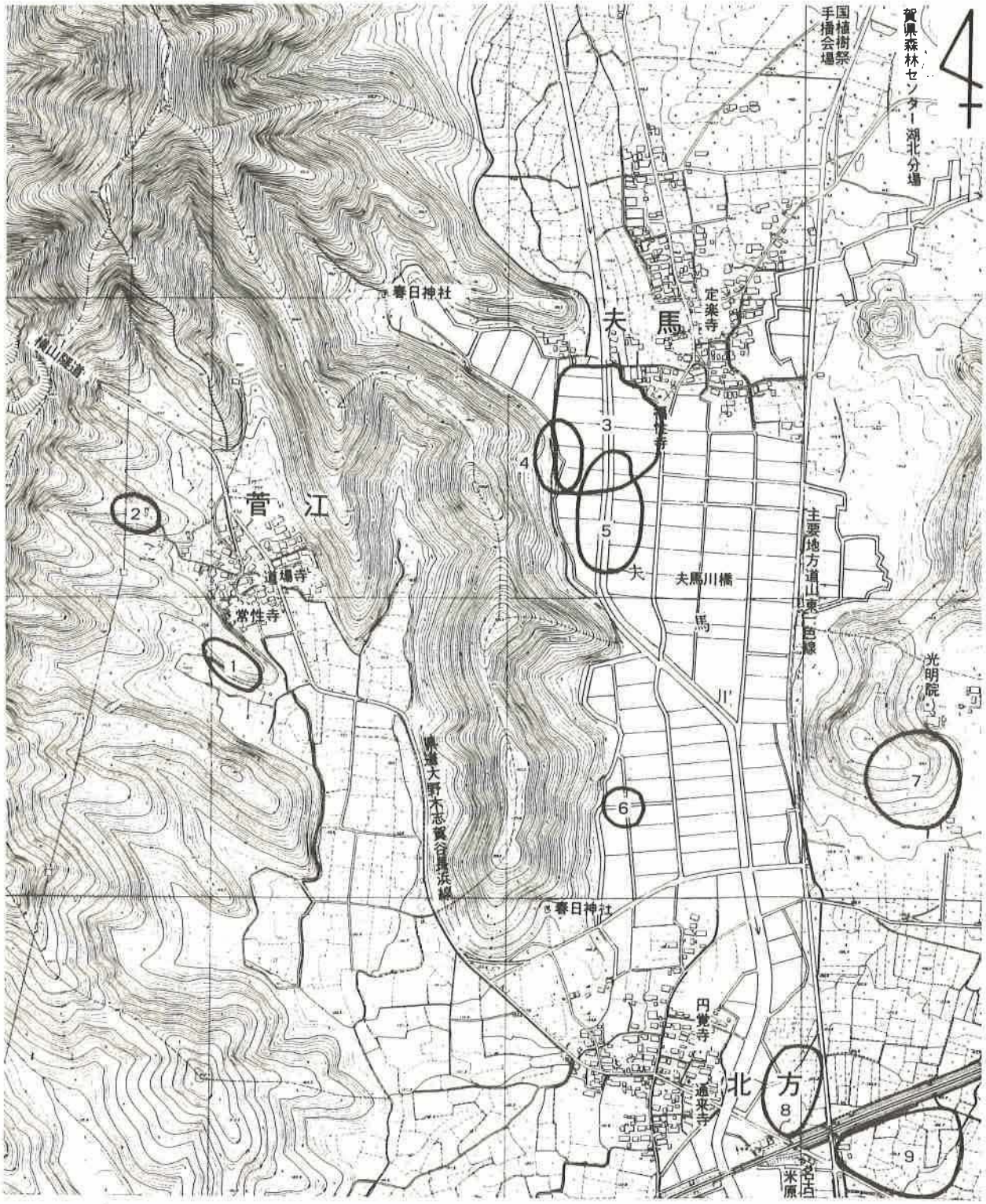
表2．菅江窯跡、西谷窯跡出土須恵器の蛍光X線分析試料の観察表とデータ …… 58

挿　図　目　次

図１．調査地周辺図
図２．地形図 …… 3
図３．一号窯遺構図（第２、３次層）…… 6
図４．一号窯遺構図（第１次層）及び断面図 …… 7
図５．第一灰原、第二灰原遺構図 …… 9
図６．第一灰原、第二灰原断面図 …… 10
図７．出土遺物実測図（一号窯、第一灰原）…… 18
図８．出土遺物実測図（第一灰原）…… 19
図９．出土遺物実測図（　〃　）…… 20
図10．出土遺物実測図（　〃　）…… 21
図11．出土遺物実測図（　〃　）…… 22
図12．出土遺物実測図（　〃　）…… 23
図13．出土遺物実測図（　〃　）…… 24
図14．出土遺物実測図（　〃　）…… 25
図15．出土遺物実測図（第二灰原）…… 26
図16．出土遺物実測図（　〃　）…… 27
図17．出土遺物実測図（　〃　）…… 28
図18．出土遺物実測図（第二灰原、試掘）…… 29

図　版　目　次

図版一	調査前風景（西から）
	調査前風景（東から）
図版二	１号窯露出部（調査前）
	１号窯断面（Ｂ－Ｂ′）
図版三	１号窯第３次層（上層）検出状況
	１号窯第２次層（中層）検出状況
図版四	１号窯第１次層（下層）検出状況
	１号窯遺物出土状況
図版五	第一灰原検出状況（北から）
	第二灰原全景（西から）
図版六	第二灰原検出状況
	第二灰原遺物出土状況
図版七	第一灰原出土遺物
図版八	第一灰原出土遺物
図版九	第一灰原出土遺物
図版十	第一灰原出土遺物
図版十一	第一灰原出土遺物
図版十二	第一灰原出土遺物
図版十三	第一灰原出土遺物
図版十四	第二灰原出土遺物
図版十五	第二灰原出土遺物
図版十六	第二灰原、試掘出土遺物
図版十七	１号窯、第一灰原出土遺物
図版十八	第一灰原出土遺物
図版十九	第一灰原出土遺物
図版二十	第二灰原出土遺物
図版二十一	第二灰原出土遺物



1．菅江遺跡　2．双林寺遺跡　3．上向川遺跡
4．弾正塚古墳群　5．出口遺跡　6．塚本古墳
7．池下城跡　8．東良遺跡　9．西代遺跡

0　500m

図1　調査地周辺図

Ⅰ．はじめに

菅江遺跡は、山東町北西部、山東町大字菅江（すえ）小字宮谷に所在し、現在の菅江集落と舌状丘陵をはさんだ南側谷奥部の丘陵斜面に立地する周知の遺跡である。従来より、須恵器碗・蓋・甕などが採集され、またスサ入り粘土塊が伴出していることから、小品を中心に生産した須恵器窯が存在すると知られていた。①

今回の調査は菅江地区南側の丘陵地帯において、花沢工務店による土砂採集事業が計画され、当該地が菅江遺跡にあたるため、工事と並行して発掘調査を実施した。

現地調査は昭和61年７月１日から10月６日までで、以後は出土資料の整理調査を実施した。

註
①田中勝弘「山東町菅江窯跡出土の須恵器」(『滋賀文化財だより』No.10.1978)
田中勝弘・奈良俊也『坂田郡山東町内遺跡詳細分布調査報告書』(財)滋賀県文化財保護協会・山東町教育委員会　1986

Ⅱ. 位置と環境

横山丘陵を境として長浜市・近江町と接している山東町は、北に伊吹山南麓、南に鈴鹿山系が連なり、大半を山丘部が占める盆地である。

菅江遺跡の立地する菅江地区は、横山丘陵を境にして長浜市鳥羽上町と対比し、横山丘陵から突き出す丘陵部のうち、通称“東山”と呼ばれる丘陵と大小からなる舌状丘陵にはさまれた谷段丘地域に形成される。現在の標高は135～145m付近である。この谷段丘地域から南東にかけて開析された地形には、北端を西流する姉川と山丘部の狭い谷部を西流する天の川の両河川によって形成されている肥沃な沖積平野がひろがる[①]。この平野部を南流する黒田川に沿って、現集落が形成されており、また多くの周知遺跡の存在が確認されている。

今回調査した菅江遺跡は、現菅江集落南に突き出た舌状丘陵の南側谷奥部の丘陵斜面に立地し、標高140～157m付近を計る。古くは、陶江・葛江又は簀江という文字を用い、従来から多くの須恵器片が採集されていることから、須恵器窯の存在が知られていた。

本遺跡が所在する横山丘陵上及び付近には、本遺跡をはじめ西谷遺跡・烏脇遺跡・深沢谷遺跡・今中遺跡など現在周知されている全ての窯跡が存在しており、特に、現在墓地となっている西谷遺跡では今でも多くの須恵器を採集できる。また、これ以外にもいくつかの窯跡がこの横山丘陵に存在する可能性は高いと思われる。

横山丘陵が菅江遺跡も含めて生産遺跡群として出現したことは、当然その生産物を供給する場が存在していた故であり、17棟以上の掘立柱建物跡、四脚門と呼ばれる門跡、溝状遺構、井戸跡など多数の遺構と木札や多くの土器が出土し、郷長クラスの遺跡とされた北方田中遺跡[③]をはじめとして、広範囲におよぶ集落において使用されたことは想像に難くない。

註
①桂田峰男『上向川遺跡発掘調査報告書』　山東町教育委員会　1987
②滋賀県坂田郡教育会編『改訂　近江國坂田郡志』　第1巻　1975
③田中勝弘・奈良俊也『坂田郡山東町内遺跡詳細分布調査報告書』(財)滋賀県文化財保護協会・山東町教育委員会　1986

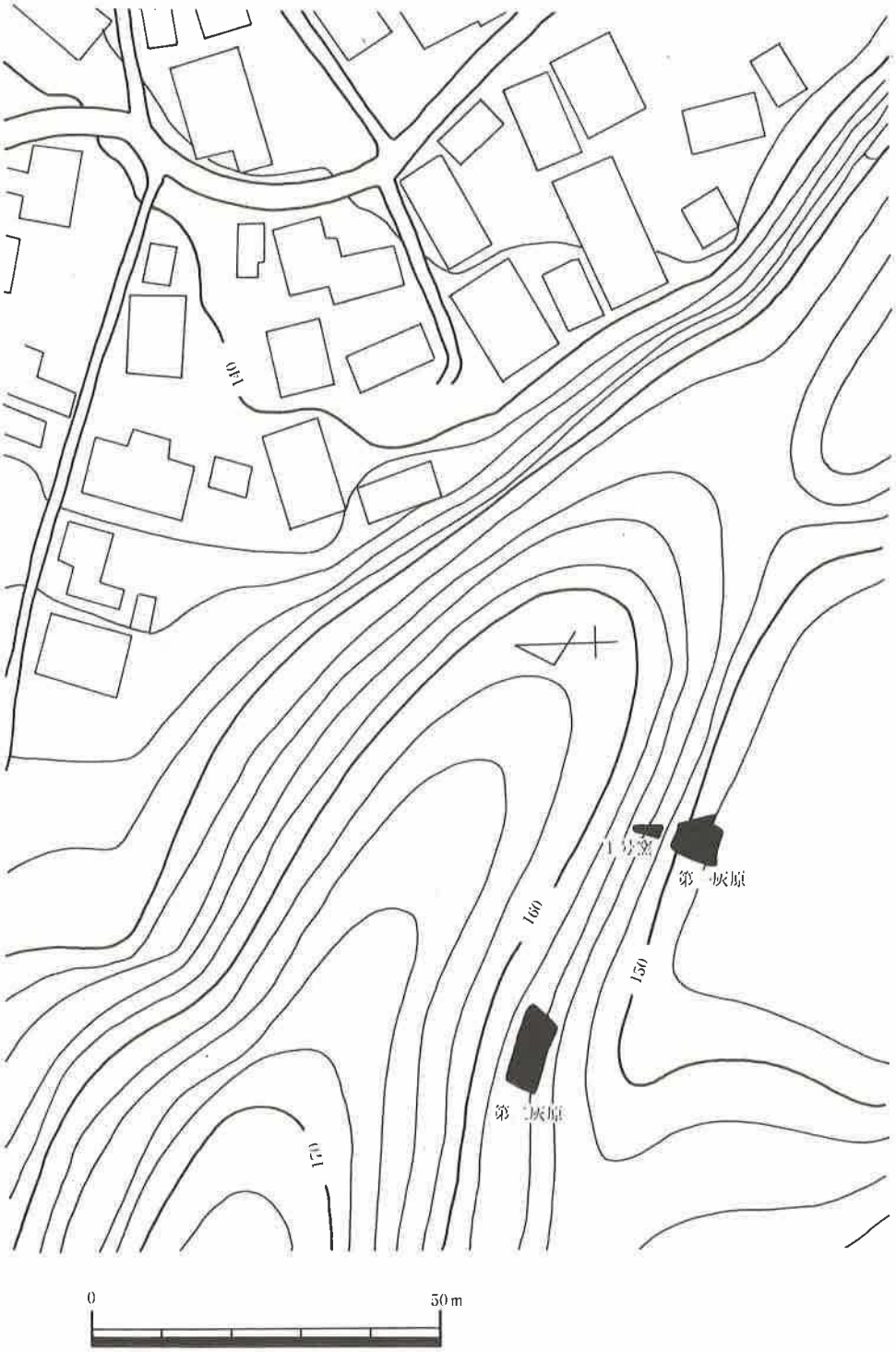


図2　地　形　図

Ⅲ．検　出　遺　構

今回の調査で判明した遺構としては、１号窯窯体と１号窯に伴う第一灰原全体と、灰原のみの第二灰原全体である。１号窯は前庭部・焚口が消失しており、また第一灰原と第二灰原も完全とはいえず、窯体・灰原の正確な全体像を把握することはできなかった。

なお窯の床面延長は水平位になおさず実長をそのまま用いており、また、表現上「右側」「左側」については焚口から奥に向かって見た方向で述べることにする。

１．窯　跡

〈１号窯〉

横山丘陵東側に派生する現菅江集落南の舌状丘陵南側斜面に１号窯の窯体はあり、地山を掘り下げた半地下式登窯である。現存する床面で標高152.4～155.3ｍに築かれている。斜面は比較的斜度が強く、窯体は等高線にほぼ直交しているので焼成部床面もまた急である。

窯体は焚口を失っているので全長は不明であるが、現存する焚口と思われる部分から煙道部にあたる部分まで実長4.4ｍを測り、窯体主軸の方向はＮ－18°－Ｗである。窯幅は燃焼部・焼成部ともに大きな差はないが、床幅については燃焼部がやや狭く、焼成部下半部で最大幅約1.5ｍを測る。天井部については確認するに至らなかった。

また、現存遺構全体の保存状態は比較的良好と思われるが、煙道部にあたると思われる部分は、単に窯体の輪郭が焼土のラインとなって、わずかに残るのみである。従って立ち上がりなど煙道部に関しての詳細な構造は不明である。

消失した際に露呈した断面(Ｂ-Ｂ′断面)観察から、２回の床面補修を認めた。また、主軸方向に平行な断面においても同様の結果を得ることができる。しかし、焼成部下半部に設けた窯体を横断する土層観察用の断面（Ａ－Ａ′断面)には補修の痕跡を認めないことから、焼成部下半部においてのみ補修が行なわれたものであると考えられる。これらの内、最初の床面を第１次窯体、最終の床面を第３次窯体とする。

〈第１次窯体〉

焚口及び燃焼部　焚口及び燃焼部は現存する窯体より傾斜変換部までの実長1.8ｍに充当し、床は奥へ向かってやや右に傾く。床面左右の側壁は比較的良く残っており、かな

り堅牢な淡灰色のガラス状を呈している。奥行き1.0m前後の地点で床幅は最も狭くなっており、1.0m を測る。またこの最小床幅地点より下半部へ大きくハの字形に拡がりを見せていることなどから、最も燃焼部に近い焚口部にあたるのではないかという可能性を示唆している。ただ、前庭部なども消失しているので速断するのは避けたい。

奥へ向かって1.0m のところで、床面に長径0.8m、短径0.4m 以上、深さ 0.1m 前後の広く浅いやや楕円形のくぼみを認めた。くぼみの底は淡灰色でガラス状の堅い面を呈しており、暗黄灰色粘土が充填されていた。この浅いくぼみは燃焼部にあたり、いわゆる船底状ピットであろうと思われる。また、このくぼみ内に淡赤褐色を呈した生焼けの甕の口縁部から体部にかけての破片が出土した。当初は、操業中または窯出しの際に破損しこのくぼみに落ちこんだものかと考えられたが、口縁及び体部外面に窯床と同色の淡灰色の傷が多く見られ、また、体部内面の同心円文が不定方向による多数の傷により消えていることなどから、製品置台ではないかと推察する。おそらく口縁部の反りのある部分を利用して、素形が安定するように一方が高く一方が低く、縦断面がほぼ三角形になるようにしたのではないだろうか。①

焼成部　焼成部は奥行き1.8m を測る燃焼部の船底状ピット上部傾斜変換部より20°～30°の斜度で立ち上がり、部分的にややなだらかな面をもつ。床面は焼成部下半部で最大幅1.5m を測り、奥に向かって次第に狭くなっている。

床面及び両側壁の保存状態は比較的良好で、燃焼部同様堅牢なガラス状を呈している。燃焼部においてさほど差違を認められなかった両側壁であるが、焼成部に設けた土層観察用断面では、左側壁が右側壁に対して大きく外方へ開く掘り方を呈している。

この焼成部のほぼ中央部でやや傾斜がゆるやかになる斜面上において、口縁を下にした形で杯身２点を検出した。特に高台を有した杯身については、欠損部が焚口の方向に位置しており、また底部外面に粘土ひも塊が残存している。このことから考えられるのは、急傾斜の床面に製品を水平に保つためにこの杯身の欠損部を利用したのではないかということ。また製品を固定するために粘土塊を利用したのではなかったかということである。つまり、この２点もまた前述の甕の口縁部同様、製品置台として使用された可能性が高いということである。

〈第２次窯体〉

第２次窯体は、第１次窯体床面（淡灰青色粘土）との間の暗黄灰色粘土、暗橙色粘土の間層上にあり、第１次窯体より約0.2m 上位に設けられている。第２次窯体は燃焼部に

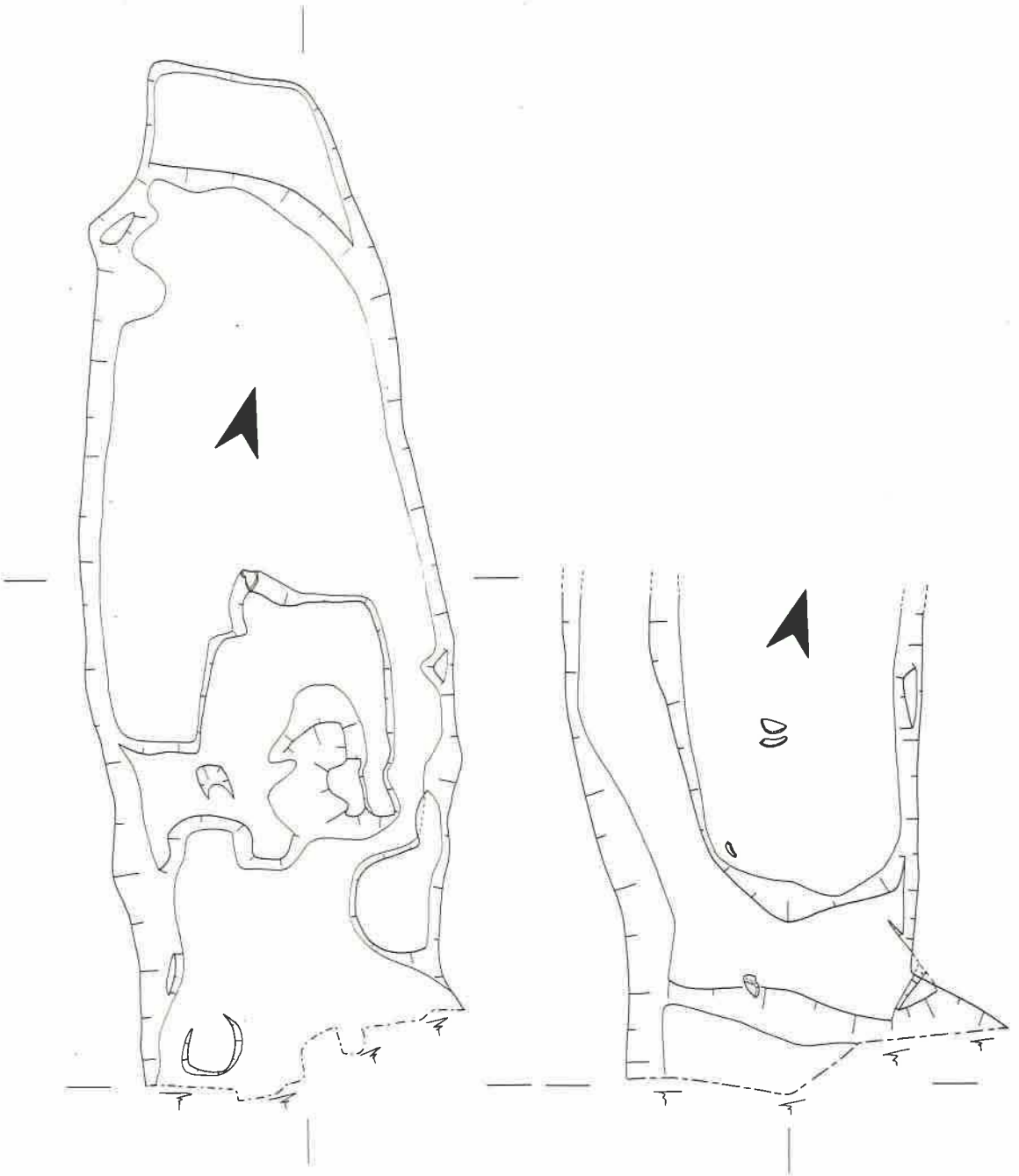


図３　１号窯遺構図（第２、３次層）

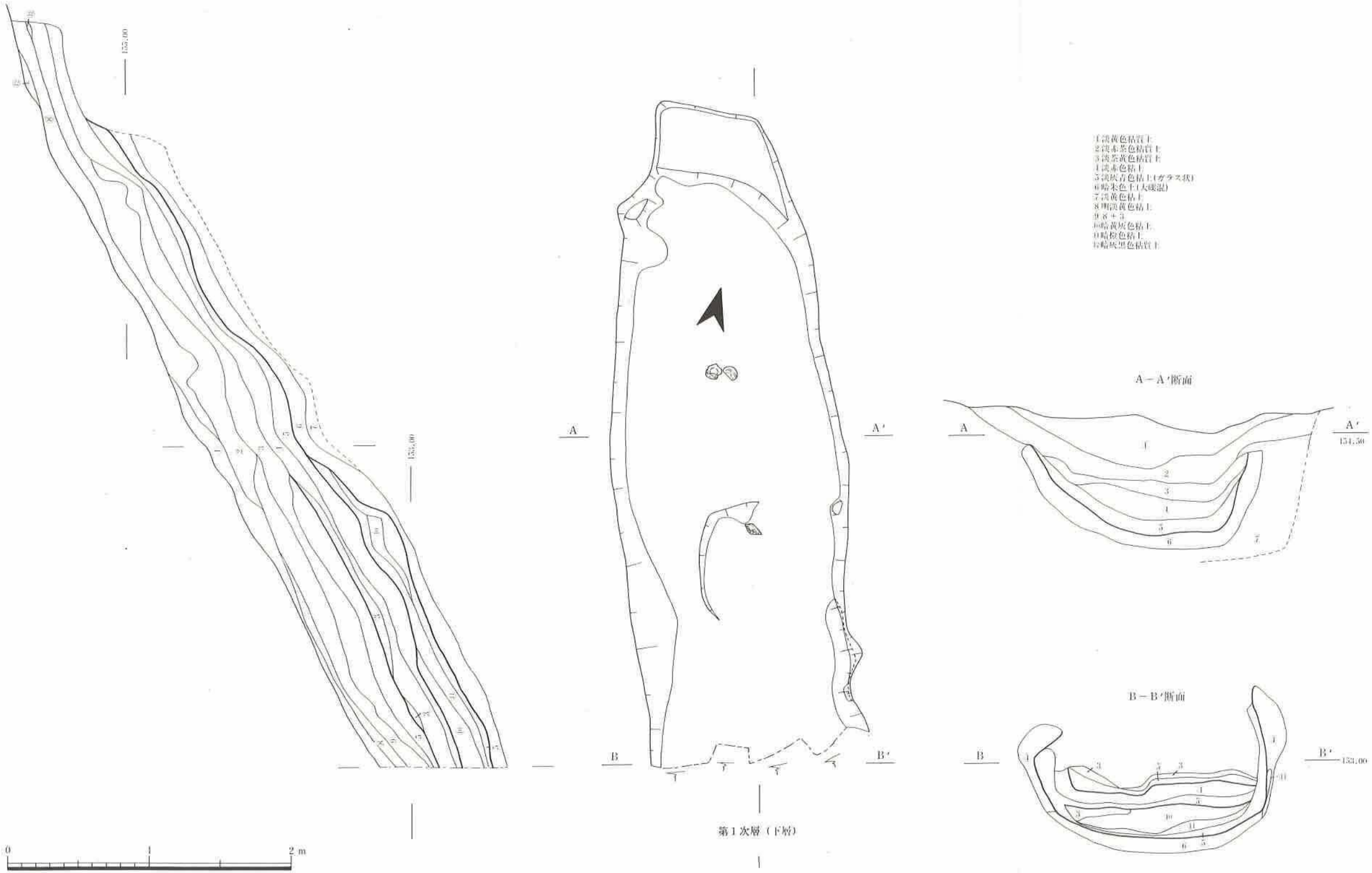


図4　1号窯遺構図（第1次層）及び断面実測図

あたる部分においてのみ床面補修が認められ、焼成部は第１次窯体をそのまま使用している。全体の床面及び側壁の保存状態も比較的良好で、床面・側壁は淡灰青色粘土でガラス状を呈している。

燃焼部　燃焼部は現存する窯体から奥へ向かって実長約2.2m を測る傾斜変換部までに充当する。奥行き0.75m で床面最小幅約1.0m を測り、奥へ向かって左側壁のみ広くなっている。床面は現存する窯体より30°の急勾配で立ち上がる。

奥へ向かって0.8m のところから、長径1.4m 、短径0.8m 、深さ0.15m 前後の長方形のくぼみ、或いは落ち込みを認めた。この落ち込みは第１次窯体のいわゆる船底状ピットのくぼみとは異なり、全体的に落ち込んでいるという表現の方が的確であろう。しかし、この落ち込みの意図するものは不明である。

〈第３次窯体〉

第３次窯体は、淡茶黄色粘質土及び淡赤色粘土を間層とし、第２次窯体の約0.15m 上位に設けられている。床面及び両側壁の保存状態は比較的良好であったが、床面は第１次・第２次窯体に比べてかなり複雑である。

この第３次窯体の床面は消失した際に露呈していた断面より検出していった訳であるが、奥に向かって実長2.3m の地点で床面である淡灰青色粘土層（ガラス状）がとぎれている。当初、天井部との関連が予想されたが、第１次・第２次窯体及び間層、そして上位より淡茶黄色粘質土･淡灰青色粘土･淡茶黄色粘質土･淡赤色粘土という層位などから、この関連は否定された。ということは、この層は床面ということが考えられ、第１次・第２次窯体のような焼成部へのつながり部分が剝離したものかは疑問を残すものの不詳と言わざるを得ない。

２．灰　原

灰原は１号窯に続く第一灰原と、窯体の検出はできなかったが、灰原のみの第二灰原とが確認された。この二つの灰原も全体を把握できなかったが、相当量の遺物を検出するに至った。

〈第一灰原〉

第一灰原は、１号窯の焚口・前庭部が消失しているため、焚口・前庭部から灰原へ続く個所は明瞭でないが、現存する１号窯最下部より下方へ実長4.0m の地点から確認さ

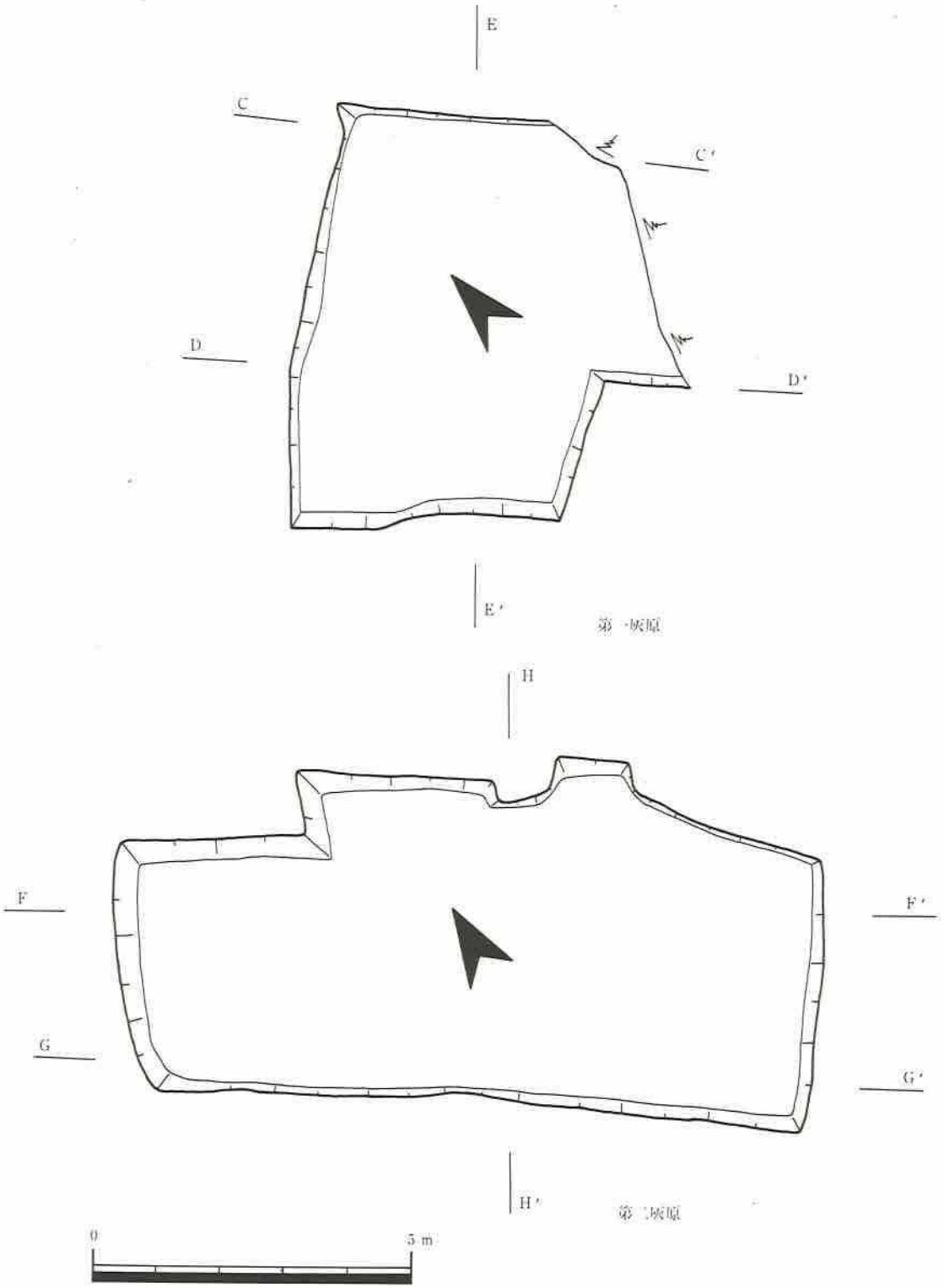


図5　第一灰原・第二灰原遺構図

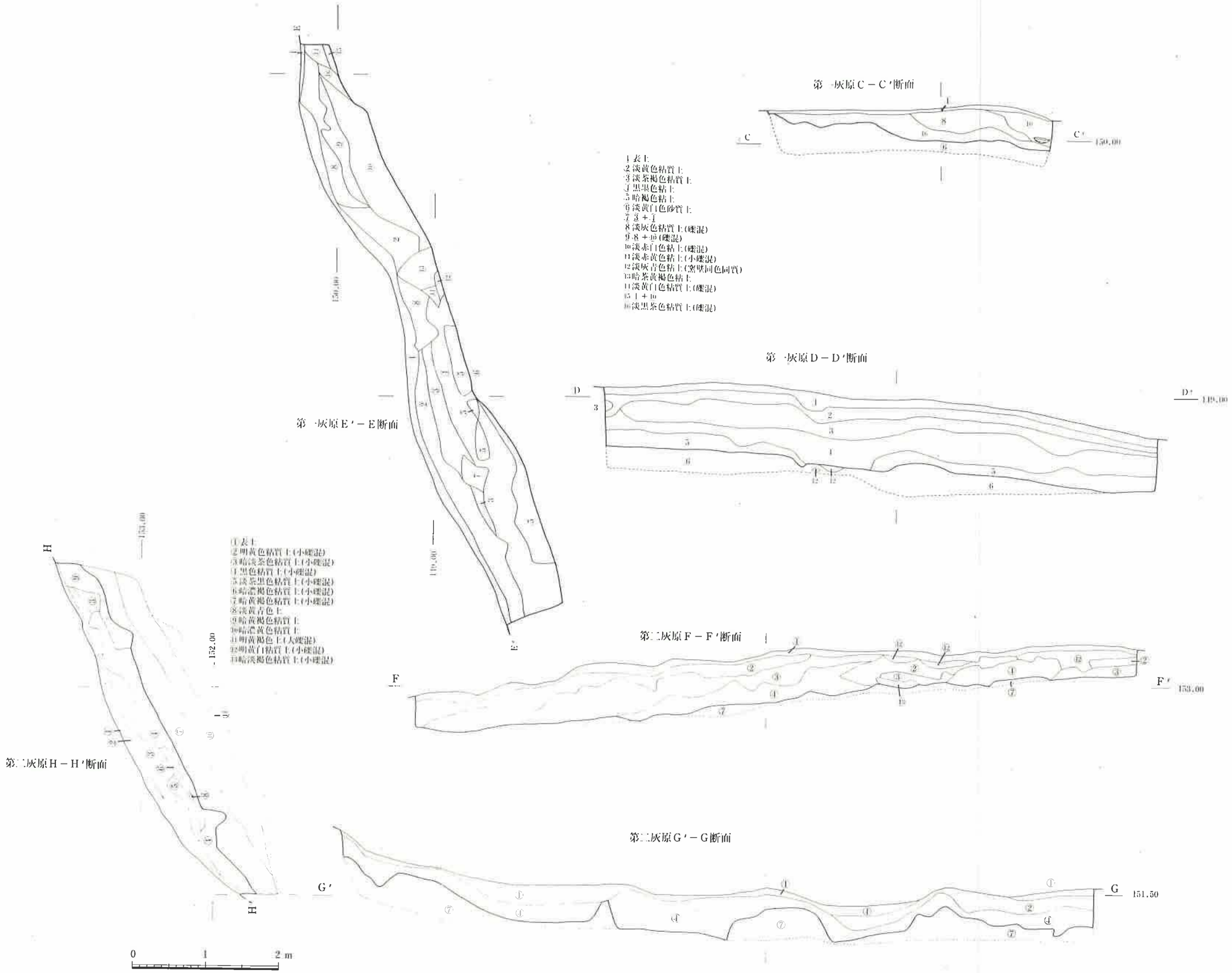


図6　第一灰原、第二灰原断面図

れた。この灰原を１号窯体主軸方向に上方から１～３区、これと直交する等高線方向に西よりＡ・Ｂ区とし、両者合わせて６区画に地区割を行った。これらの区画と遺物出土量との関係において１区ではほとんど出土せず、Ａ・Ｂ両区とも２・３区から多量の出土を認め、またＡ区とＢ区を比べた場合、Ｂ区の方が多量であるという結果が出た。

そして層位の状況では、遺物包含層は特に第４層（黒墨色粘土層）と下層である第５層（暗褐色粘土層＝レンガ色土）の２層に限られている。第４層は表土より0.2～0.4mで検出でき、厚さは最大で約0.4mを測り、東側（Ｂ区）部分の方が堆積層も厚い。第５層は第４層下方に堆積し、厚さは約0.1～0.3mを測り第４層よりも多量の遺物が出土した。また、これら２層はＡ・Ｂ両区にまたがっており、土層観察用断面（Ｅ－Ｅ′断面）を見る限り、上限は２区にまで及ぶ。

これらの結果から、第一灰原の全容は明らかではないが、その規模は東西約5.8m以上、南北約3.4m以上の規模をもつことが推察される。そしてＢ区の方が遺物包含層の堆積が厚く、出土量も多いことなどから、焚口・前庭部は消失しているけれども、前庭部がやや左に偏しており残灰や製品の投棄が比較的右下方に向かって行なわれていたのではないかと推量するものである。

〈第二灰原〉

２号窯については消失していたので第二灰原は灰原のみの調査となったため、全体を把握できなかった。従って窯全体の正確な位置については断言できないが、この第二灰原の検出状況などから推察して１号窯の左上方に位置し、１号窯とそう大差のない主軸を保っていたのではないかと考えられる。

層位において遺物包含層は第４層（黒色土層）に限られ、第二灰原出土遺物のほとんどがこの層から出土する。第４層は浅いところでは表面直下、深いところでも0.4mで検出でき厚さは最大で0.55mを測る。灰原上方においては、中央部及び東側よりにのみ部分的な堆積がみられるが、下方ではほぼ全域に認められ、中央部から西側にかけて厚く堆積している。しかし、出土量は厚い堆積層をみる西側よりも東側の方が比較的多い。

窯体も消失し、灰原も全域を調査できなかったが、第二灰原は東西約11.0m以上、南北約4.0m以上の規模を有していたと思われる。

註
①石川恒太郎「須恵器窯址考」（『考古学雑誌』第34巻第６号　1944）

Ⅳ. 出　土　遺　物

〈1号窯〉

1号窯の出土遺物については出土量が少なく、Ⅲ章の検出遺構の項で先述した4点が主なもので、いずれも置台の可能性が高いと考えられる遺物であった。

〈第一灰原〉

杯　蓋

A類　（A 1 ―図版10・11、A 2 ―図版5・12）

天井部が比較的丸味をもつもので、天井部高はつまみ高の3倍以上を計る。口縁部は内傾するもの（A 1）と凹状を成すもの（A 2）がみられる。つまみは偏平な擬宝珠様を呈し、天井部外面は$\frac{1}{2}$程度で回転ヘラ削り調整、内面も$\frac{1}{2}$程度の不定方向のナデ調整が施されている。

B類　（B 1 ―図版13・14・15、B 2 ―図版9・16）

天井部の上面が比較的平らで、天井部高はつまみ高の2倍前後を計る。口縁部はA類同様内傾するもの（B 1）と凹状を成すもの（B 2）に分かれる。つまみは比較的偏平な擬宝珠様を呈する。天井部外面は$\frac{1}{2}$～$\frac{2}{3}$程度の範囲で回転ヘラ削り調整で、内面も$\frac{1}{2}$～$\frac{2}{3}$程度の不定方向のナデ調整が施されている。

C類　（C 1 ―図版17、C 2 ―図版18）

天井部から上方へなだらかに立ち上がり、鈍く屈折・外反し口縁に至る。縁部は直下のもの（C 1）と凹状を成すもの（C 2）に分かれる。つまみは偏平な擬宝珠様を呈し、天井部外面の回転ヘラ削り調整は$\frac{2}{3}$前後の範囲に及ぶ。内面のナデ調整は$\frac{1}{2}$～$\frac{2}{3}$程度の範囲に施されている。

杯　身

A類　（図版19・20・21・37・38・39・40）

平坦な底部面から体部及び口縁部が内湾気味に外上方に立ち上がるもの。口縁端部は丸く収まる。底部外面はヘラ切り・回転ヘラ切りの未調整で、内面には一定方向のナデを施す。体部は内外面とも回転ナデを施している。

B類　（図版22）

平坦な底部面より二次底部面を介して体部へ至るもの。端部は丸く収める。底部外面は回転ヘラ削り調整が施され、内面には中央部に一条の一定方向のナデを残す。体部は内外面ともに回転ナデ調整を施す。

C類　（C 1 —図版23・24・41・42、C 2 —図版25～32、43～50）

平坦な底部面から体部・口縁部が外上方にのびるもの。底部からはっきりと屈折して体部に至るもの（C 1）と底部面から丸味をおびて体部に至るもの（C 2）に分かれる。底部外面は回転ヘラ切りで未調整のものが多く、回転ヘラ削り調整を施すものは少ない。内面中央に一条のナデを施す。底部・体部は内外面とも回転ナデが施されている。

D類　（図版33～36、51～62）

形態はC類に酷似しているが、口縁部が外反気味に外上方へのびるもの。底部外面は回転ヘラ切り未調整で内面中央に一条のナデを施す。底部内面及び体部内外面ともに回転ナデ調整を施す。

有台杯身

A類　（図版63～68、73～83）

高台が底部やや内側に貼付されているもの。平坦な底部面から丸味をおびて直接体部に至る。口縁端部は丸く収まるものとやや尖り気味に収まるものがある。高台は直立気味のものとハの字形に開くものがあり、接地面は平らか内端面で接地する。底部外面はほとんどが回転ヘラ削り調整が施され、内面は不定一定方向のナデが残る。体部は内外面ともに回転ナデ調整である。

B類　（図版69～72、84～91）

高台が底部端に貼付されているもの。平坦な底部面から直接体部に至り、口縁部はどちらかといえば内湾気味である。端部はやや尖り気味のものと丸く収まるものがある。高台はハの字形に開くものが多く、接地面は平らか内端面で接地する。底部外面はほとんど回転ヘラ削り調整で、内面は不定一定方向のナデを施す。体部は内外面ともに回転ナデ調整。

甕　口縁部が外上方へ直線的にのびるものと外反するものに大別できる。

A類　（図版92・93・95・97・101・103・104 ）

口縁部が外上方へ直線的にのびるもので、肩部・体部は比較的なだらかに下がる。また体部に把手を付すものもみられる（図版104）。調整は外面では平行叩きの後ほとんど

スリケシ・半スリケシ調整などの二次調整が施される。またカキ目を施すものも認められる。内面では同心円文痕が残る。

B類　(図版94・96・98・99・100・102)

口縁部が外反するもので形態はA類に類似する。調整は外面では平行叩きの後スリケシ・半スリケシ調整が施され、内面では同心円文又は円弧叩きの後に半スリケシ調整を施すものもある。

長頸壺　(図版105・106)

口頸基部は細く直立または内湾気味にのび、口縁部は大きく外上方へ開く。端部は丸く収まり、端部口径が口頸基部径より大きくなる。口頸部に2条の沈線を有するが、図版105の長頸壺は並列に、図版106の方は間隔をあけて施されている。また図版 105の長頸壺については肩部下方にも一条の沈線を有する。肩部はやや張り気味で、底部はハの字形に開き内端面で接地する。

体部及び底部外面は回転ヘラ削り調整が施され、口頸部・高台は回転ナデ調整である。

短頸壺　(図版107・108)

長頸壺同様にあまり検出されておらず、また完形ではないので不明な点が多いが、底部からなだらかに外上方にのび丸味をおびた屈折で肩部へと至る。肩部はやや張り気味である。口頸は短く外上方へのび、端部は丸く収まるものと尖り気味に収まるものがある。また図版108の短頸壺の体部内面には櫛描文が施されている。調整は全体的に回転ナデ調整を施す。

平瓶　(図版117)

ほぼ偏平な体部天井部の中心から大きく偏した一方に外湾気味に大きく開いた口頸部を付す。口縁端部は尖り気味に収まり、口頸部中央上方に一条の沈線を有する。肩部は張り気味で稜を成し、偏平な胴を呈する。底部及び体部外面の下方½は回転ヘラ削り調整が施され、体部天井内面の接合部にカキ目が残る。

環状瓶　(図版118)

口頸部が消失しているが、平坦な底部から環状を呈して口頸部に至る。肩部の耳は認められない。各面はほぼ平らで、4枚の板状粘土を接合したのではないかと考えられる。外面は回転ヘラ削り調整を施すが、部分的にハケ目・ナデを施す。内面は接合部分にカ

キ目調整を施す。

鉢　　（図版119・120）

摺鉢様の器形を有し、底部に肥厚な台状のようなものを伴うが、図版119の鉢の底部は不安定を呈している。器高は比較的高く外上方へ直線的に立ち上がり、口縁部付近でラッパ状に大きく開く。口縁端部は尖り気味に収まる。体部径より口径の方がはるかに大きくなる。２点の両鉢とも底部外面に何かで刺突したような小孔が多数認められる。ただし底部内面に貫通はしていない。

〈第二灰原〉

杯蓋

Ａ類　（図版128～132）

第一灰原の杯蓋Ａ類に類似し、天井部高はつまみ高の３倍以上を測るもの。口縁部は内傾するもの凹状をなすものに分かれるが、凹状をなすものには内傾する形態も兼ね備えるものもある。つまみは比較的偏平な擬宝珠様つまみを有する。天井部外面は$\frac{1}{2}$～$\frac{2}{3}$程度で回転ヘラ削り調整、内面も$\frac{1}{2}$～$\frac{2}{3}$程度のナデ調整を施す。

Ｂ類　（図版133～141）

第一灰原の杯蓋Ｂ類に類似し、天井部高はつまみ高の２倍前後を測るもの。口縁部は凹状をなして内傾するものがほとんどであるが、垂直におちるものもある。つまみは比較的偏平な擬宝珠様つまみを有する。天井部外面は$\frac{1}{2}$～$\frac{2}{3}$程度で回転ヘラ削り調整、内面も$\frac{1}{2}$～$\frac{2}{3}$程度のナデ調整を施す。

Ｃ類　（図版142）

第一灰原の杯蓋Ｃ類に類似するものである。口縁部はやや内傾する。不整形なつまみを有する。天井部外面$\frac{2}{3}$は回転ナデ調整で、内面は丁寧なナデが施されている。

杯身

Ａ類　（図版145～148）

第一灰原の杯身Ａ類に類似するもの。口縁端部はやや尖り気味に収まるものが多い。底部外面は回転ヘラ切り未調整で、内面中央に一条のナデが残る。体部は内外面ともに

回転ナデ調整を施している。

C類　（C 1 ―図版149～152、C 2 ―図版153～158）

第一灰原の杯身C類に類似し、第一灰原同様底部面からはっきりと屈折して体部に至るもの（C 1 ）と、丸味をおびて体部に至るもの（C 2 ）に大別できる。口縁端部は丸く収まるものとやや尖り気味に収まるものがある。底部外面は回転ヘラ切り未調整がほとんどであるが、ヘラ切りも数点認められ粘土紐痕を明瞭に残すものもある。底部内面ではほとんど中央に一条のナデが施されている。体部は内外面ともに回転ナデ調整を施している。

D類　（図版159～164）

第一灰原の杯身D類に類似するものである。口縁端部は丸く収まるものと尖り気味に収まるものに分かれる。底部外面はヘラ切り・回転ヘラ切りによりともに未調整である。底部内面では中央に一条のナデが施されている。体部は内外面ともに回転ナデ調整を施している。

有台杯身

A類　（図版169～172）

第一灰原有台杯身A類に類似するものである。平坦な底部面から直接体部に至り、口縁端部はやや尖り気味に収まる。高台はハの字形に開くものが多く、接地面は内外端及び平らに接地する。底部外面は回転ヘラ削り調整を施し、内面はナデを施す。体部は内外面ともに回転ナデ調整を施す。

B類　（図版173～180）

第一灰原有台杯身B類に類似するものである。平坦な底部面から丸味をおびて立ち上がる。口縁端部は尖り気味に収まる。高台はハの字形に開き、接地面は平らか内端面で接地する。底部外面は回転ヘラ削り調整、或いはヘラ切り未調整で粘土紐痕を明瞭に残すものもある。底部内面はほとんどがナデを施すが、わずかにみがきを施すものも認められる。体部は内外面ともに回転ナデ調整を施す。

甕　（図版181）

第一灰原の甕A類・B類とは違い、口縁部は内湾気味となる。肩部についてはなだらかに外下方に下がる。調整は第一灰原出土のものと同様、外面は平行叩きの後一部について半スリケシを施す。内面には同心円文痕が残る。

長頸壺　　(図版182)

第一灰原の長頸壺に類似し、口頸部に2条の沈線を有し、口縁端部径が頸基部径よりも大きくなる。口頸部内面及び外面の一部に自然釉が残る。調整は口頸部内外面ともに回転ナデ調整が施されている。

短頸壺　　(図版183～186)

第一灰原同様、口頸部は全体的に短く外上方へのびるものと、内傾気味のものがある。肩部はあまり張らないが、張り気味のものも僅かに認められる。また沈線が口頸部中央に認められるものと、肩部上方に認められるものがある。調整は内外面ともに回転ナデ調整を施す。

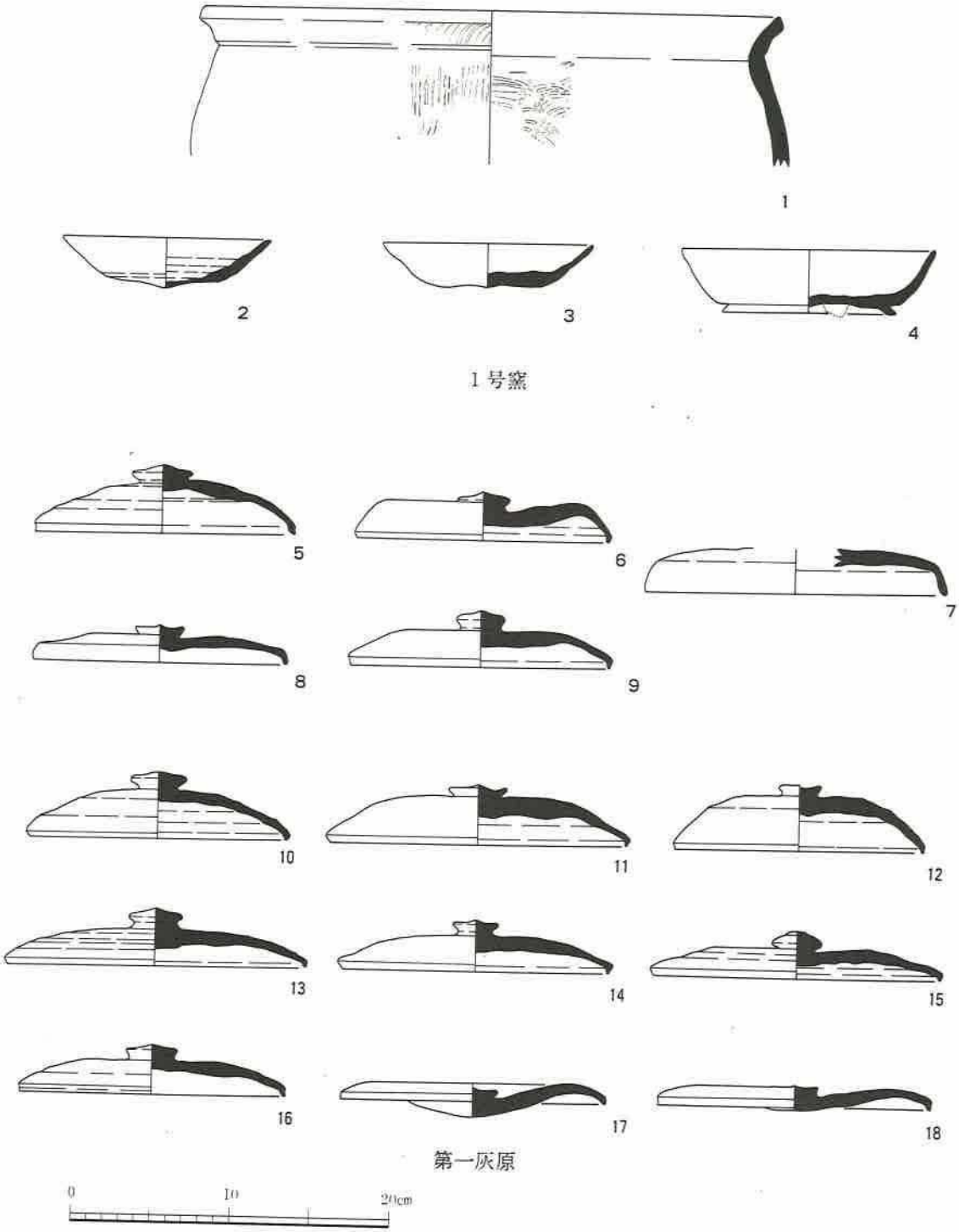


図7　1号窯・第一灰原出土遺物実測図

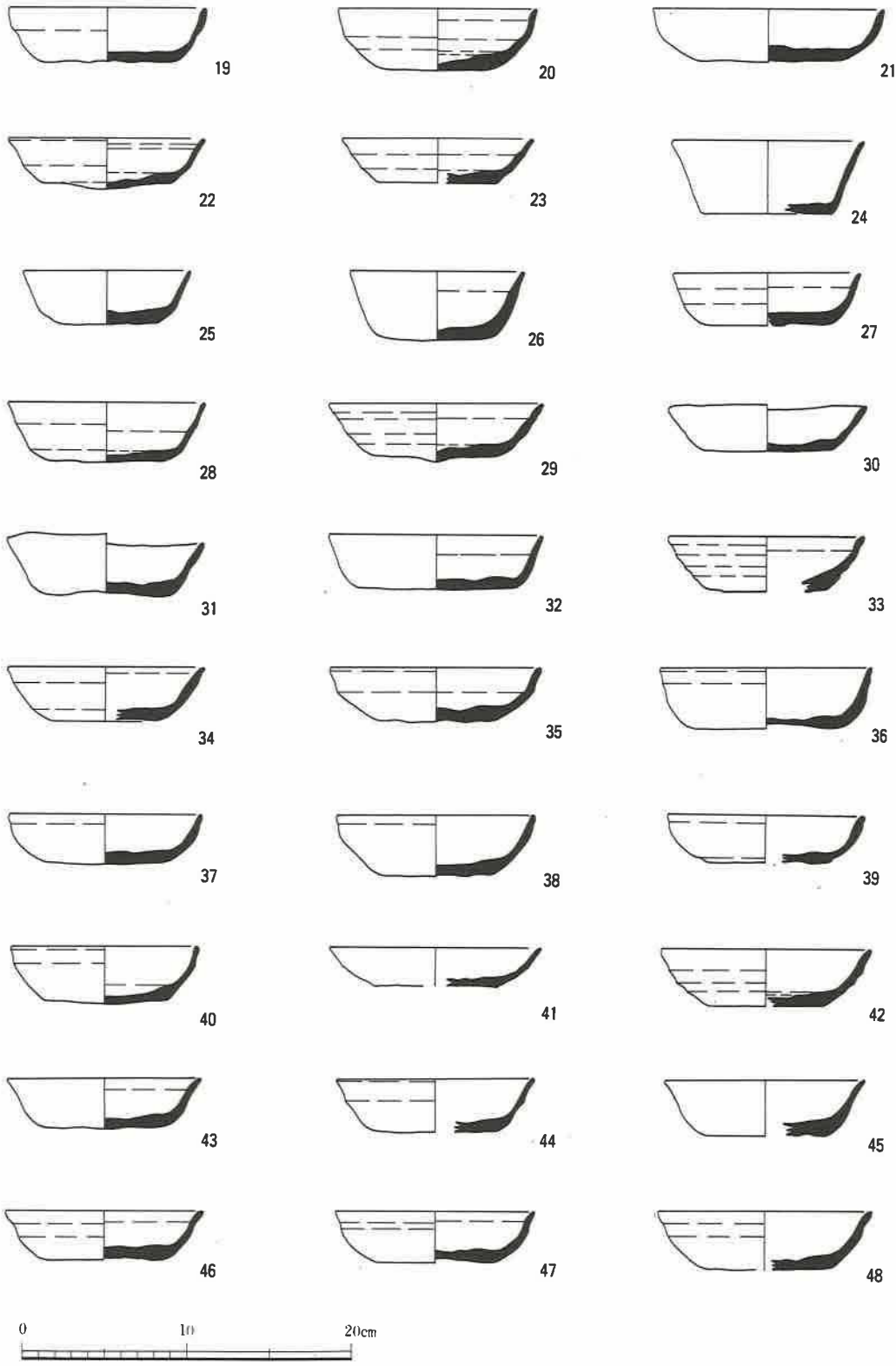


図８　第一灰原出土遺物実測図

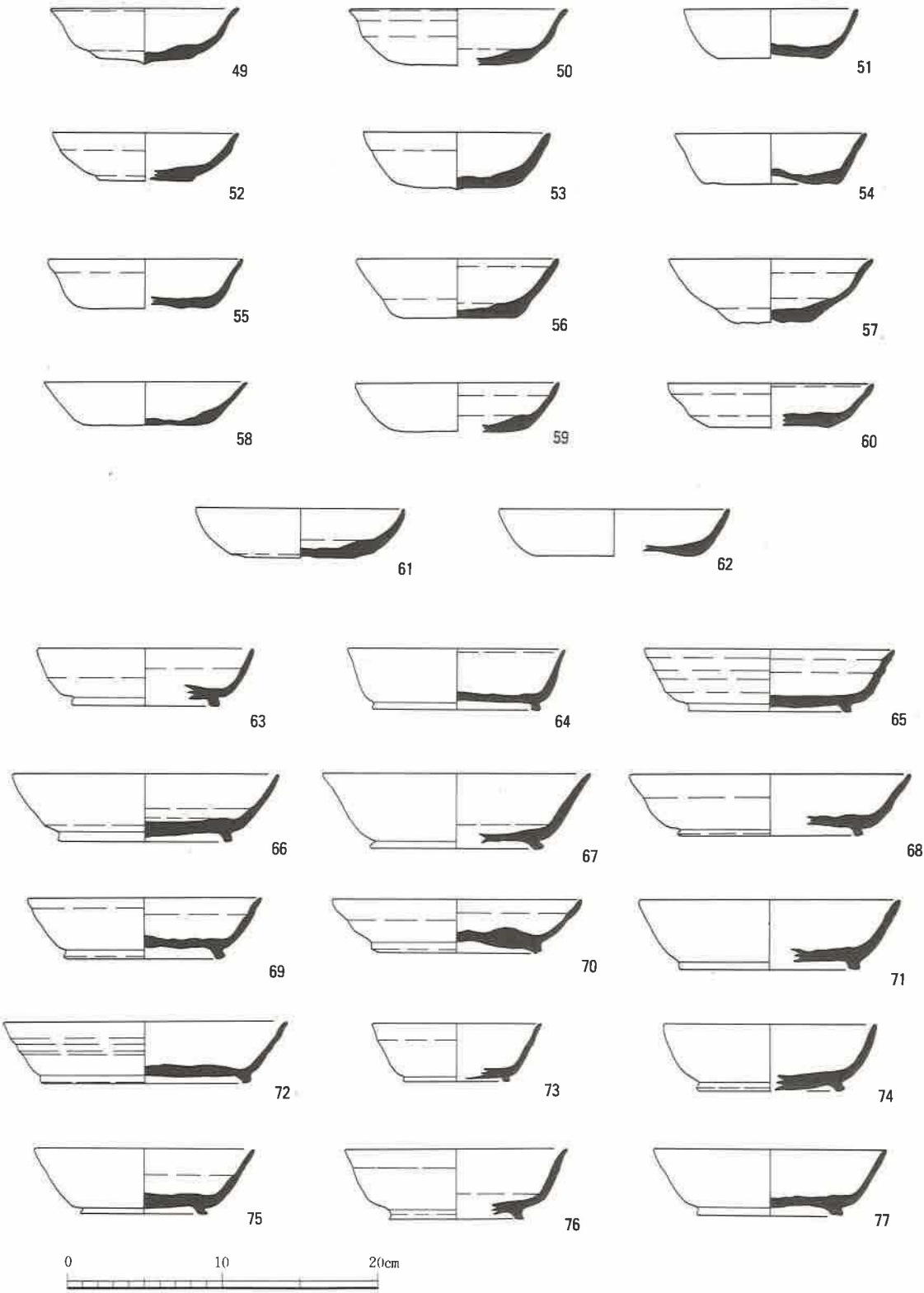


図９　第一灰原出土遺物実測図

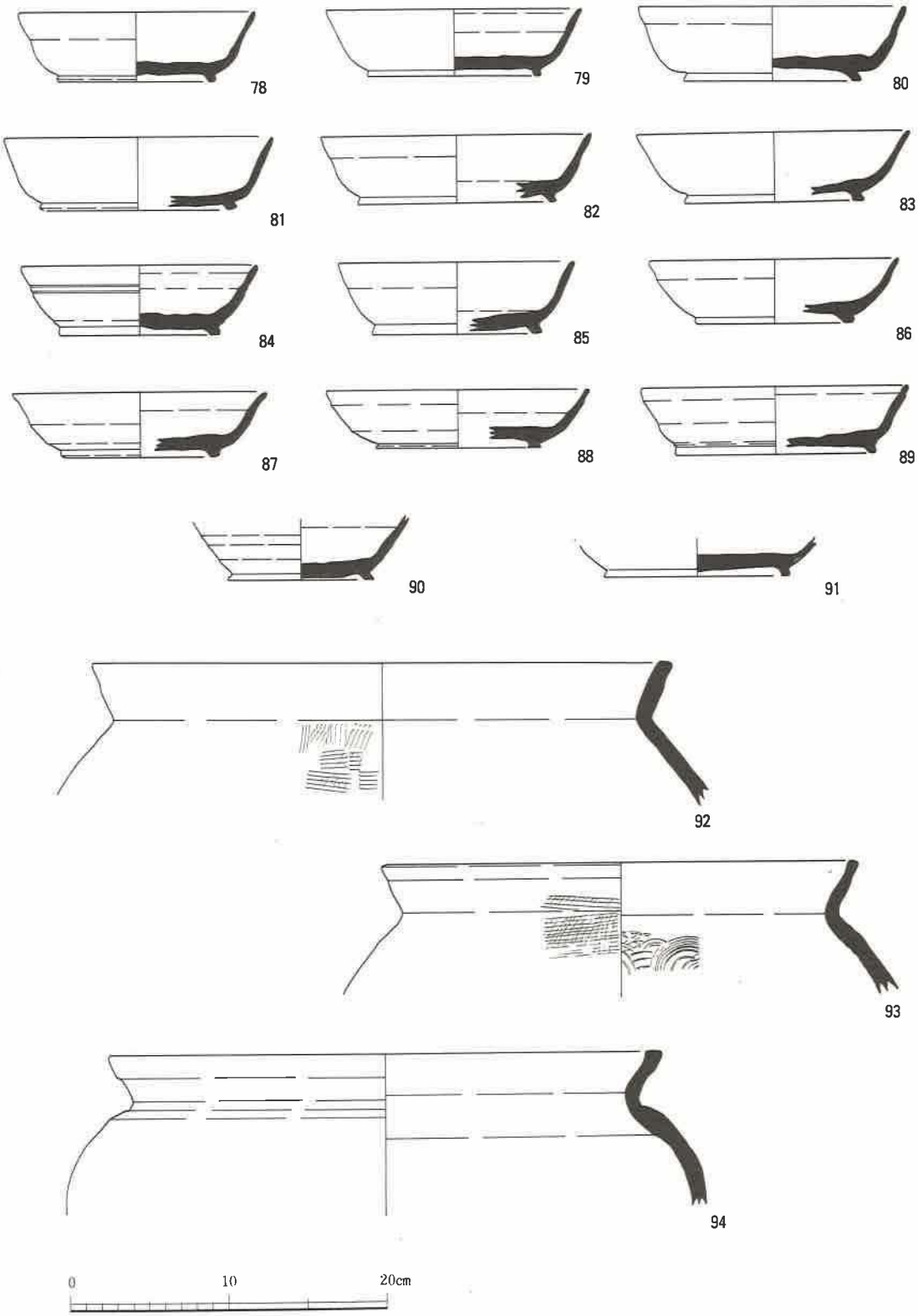


図10　第一灰原出土遺物実測図

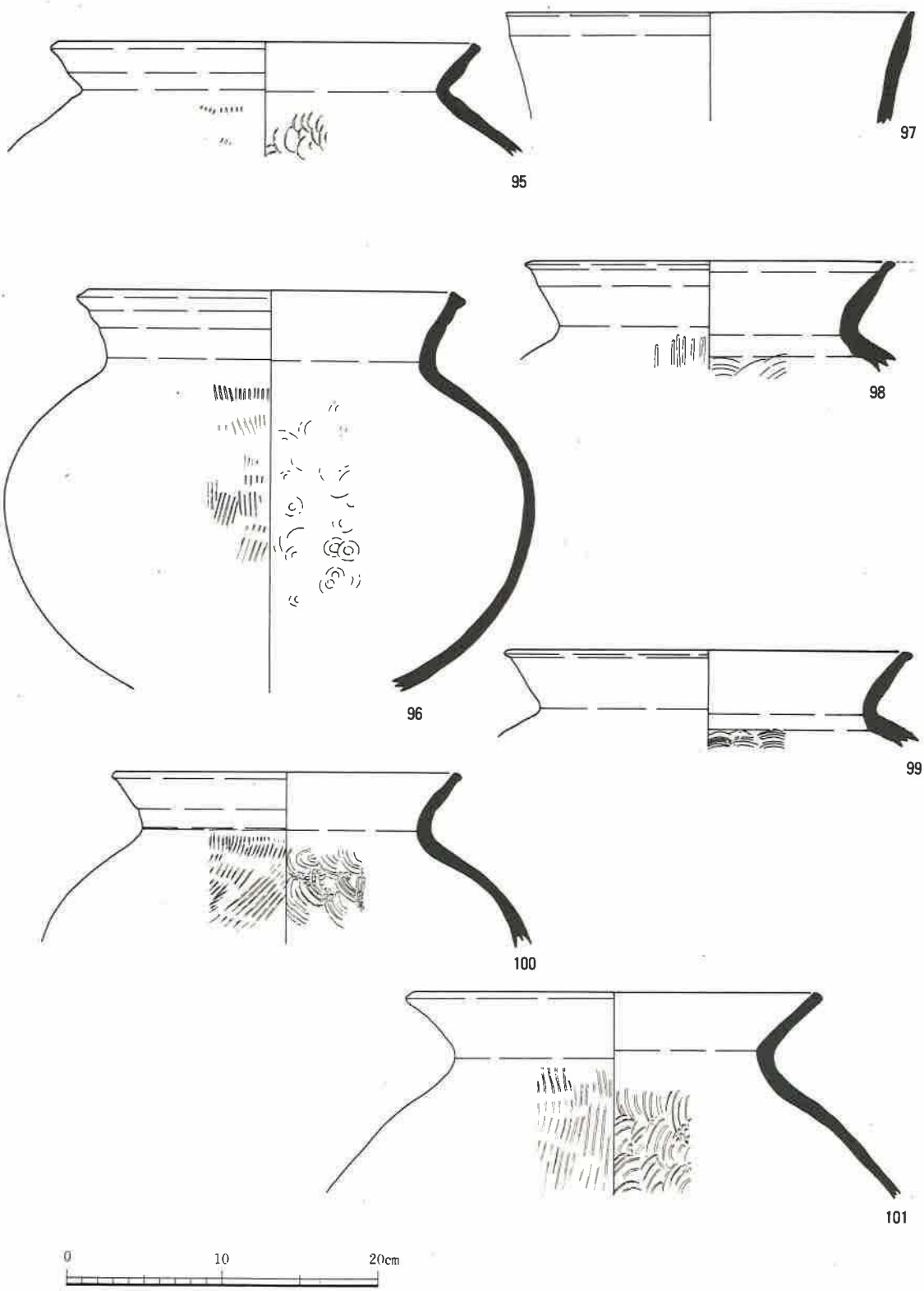


図11　第一灰原出土遺物実測図

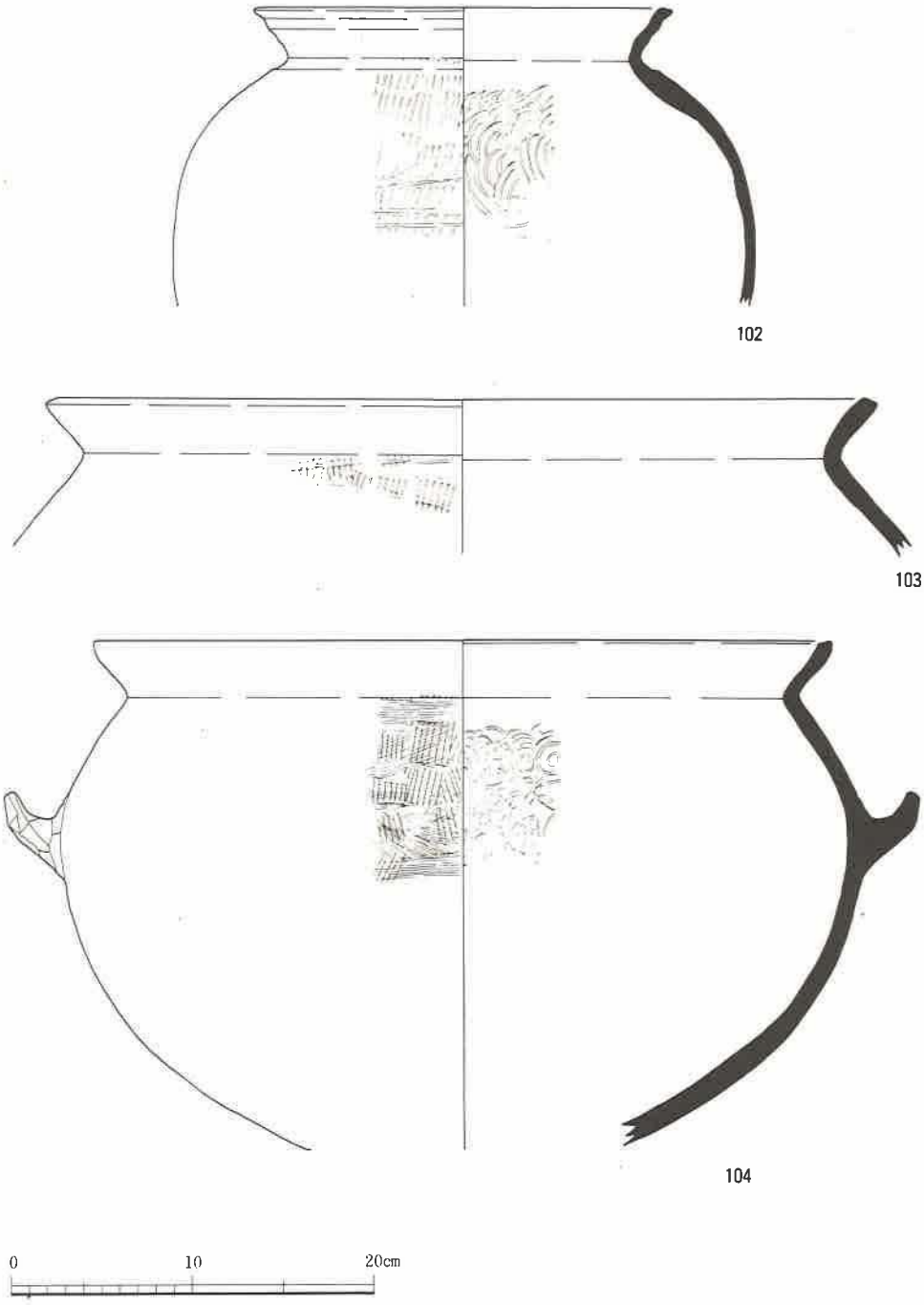


図12　第一灰原出土遺物実測図

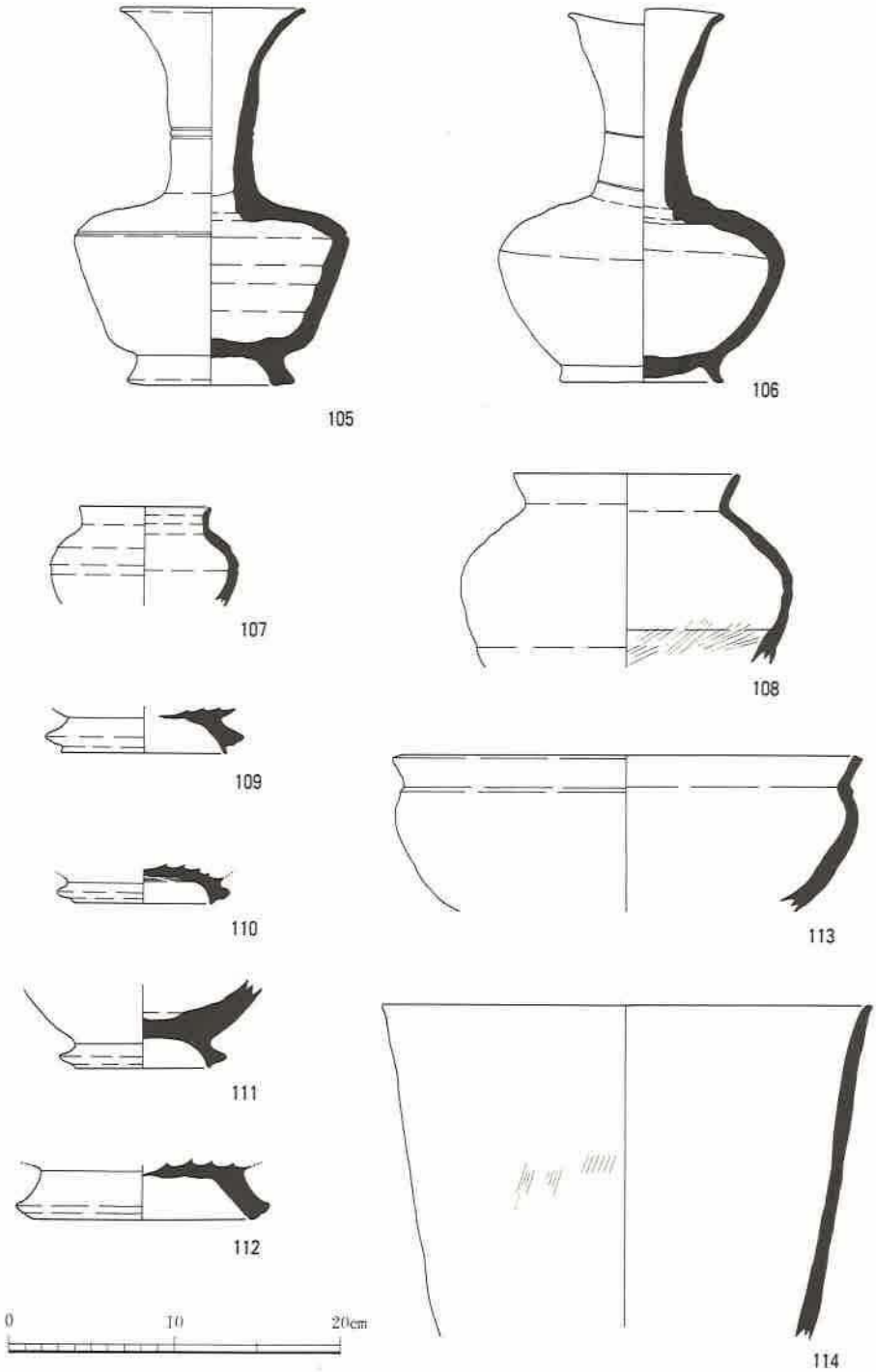


図13　第一灰原出土遺物実測図

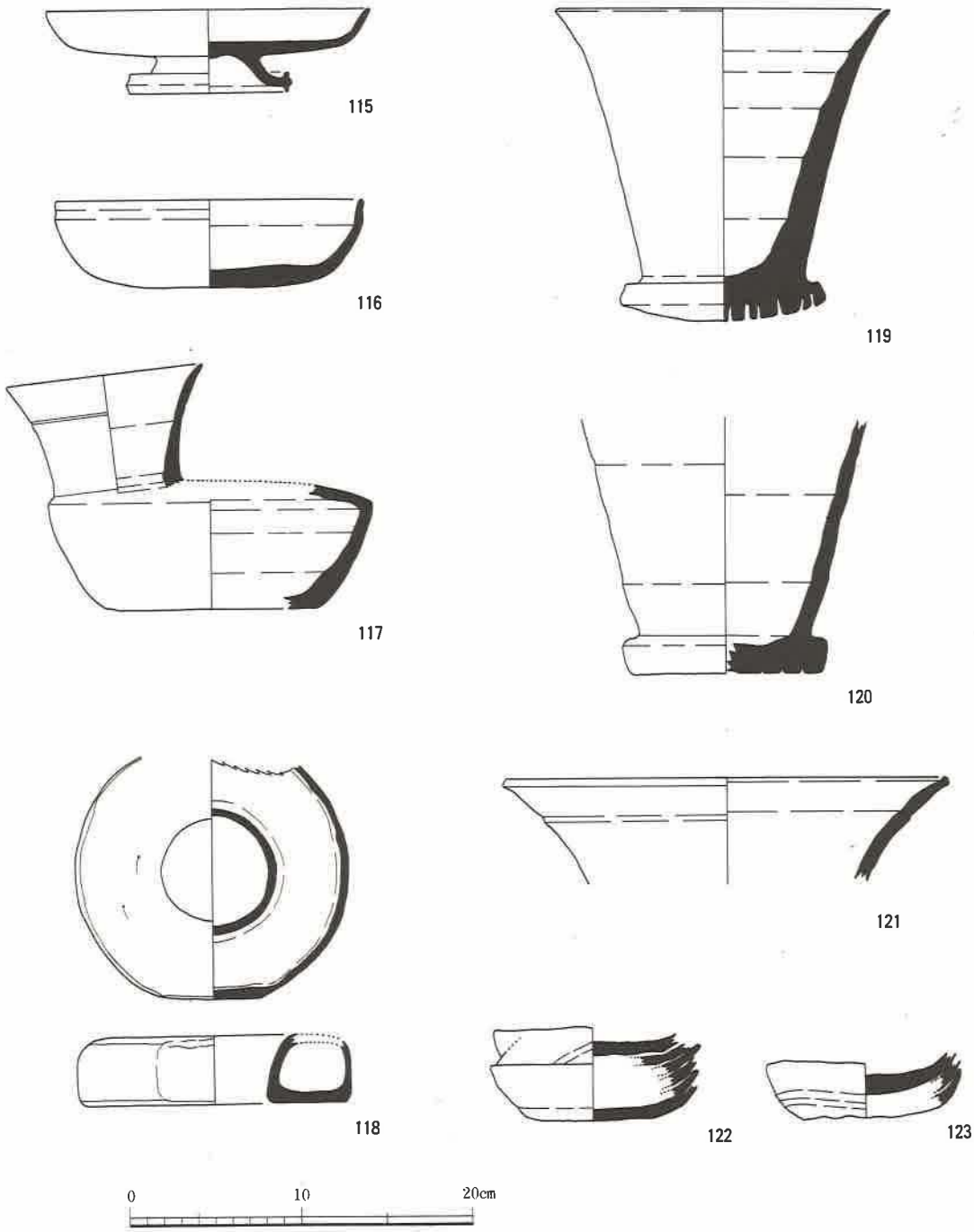


図14　第一灰原出土遺物実測図

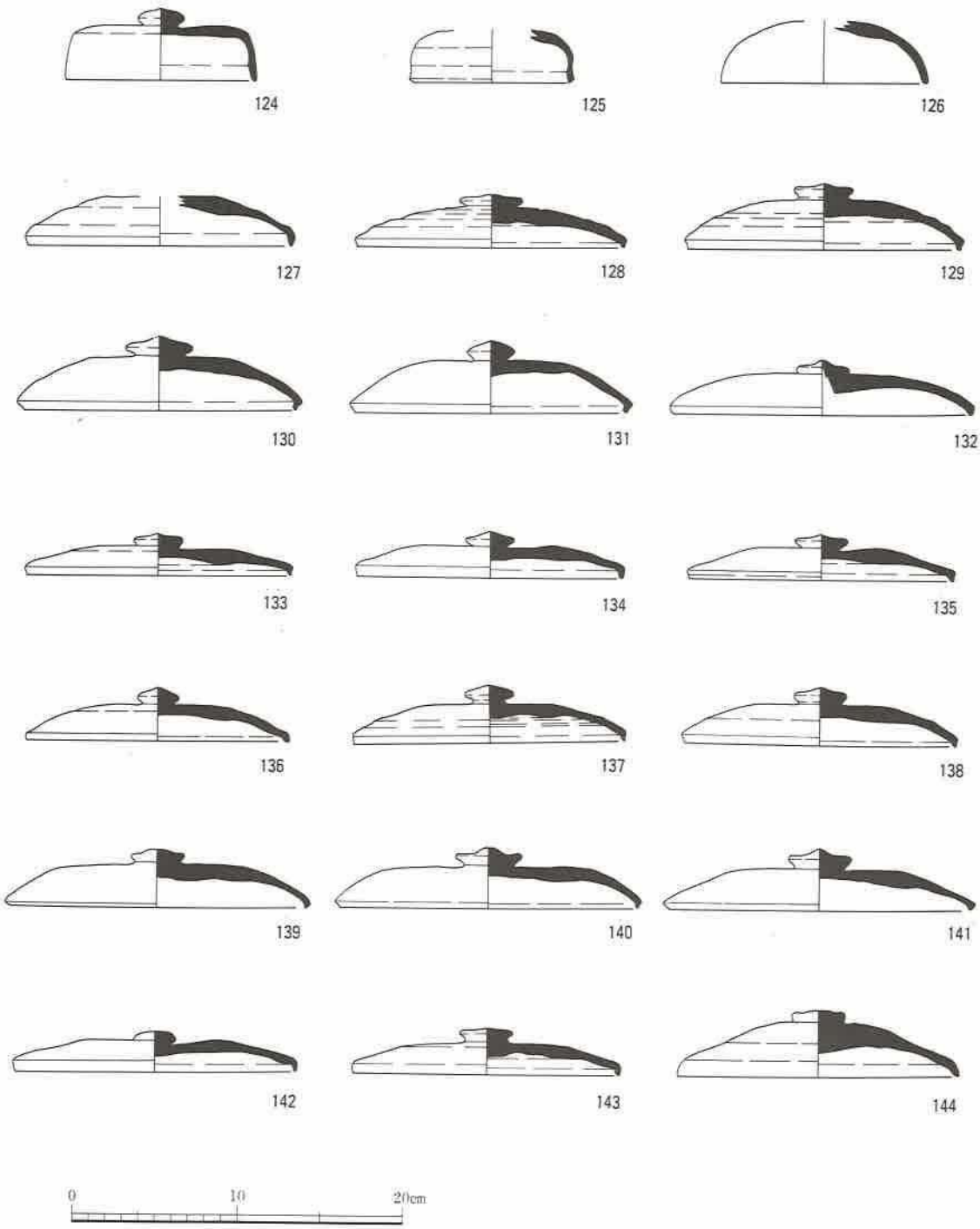


図15　第二灰原出土遺物実測図

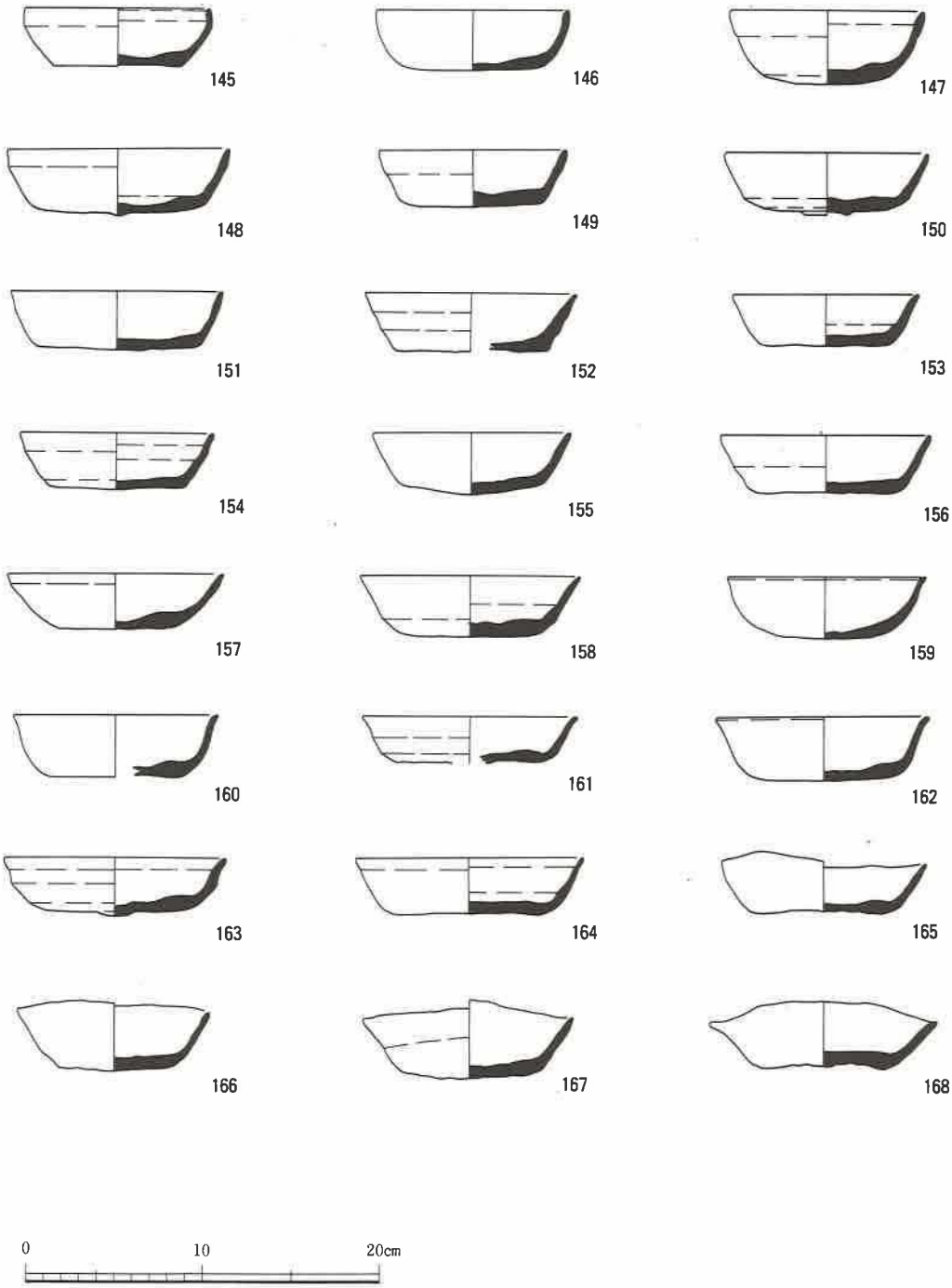


図16　第二灰原出土遺物実測図

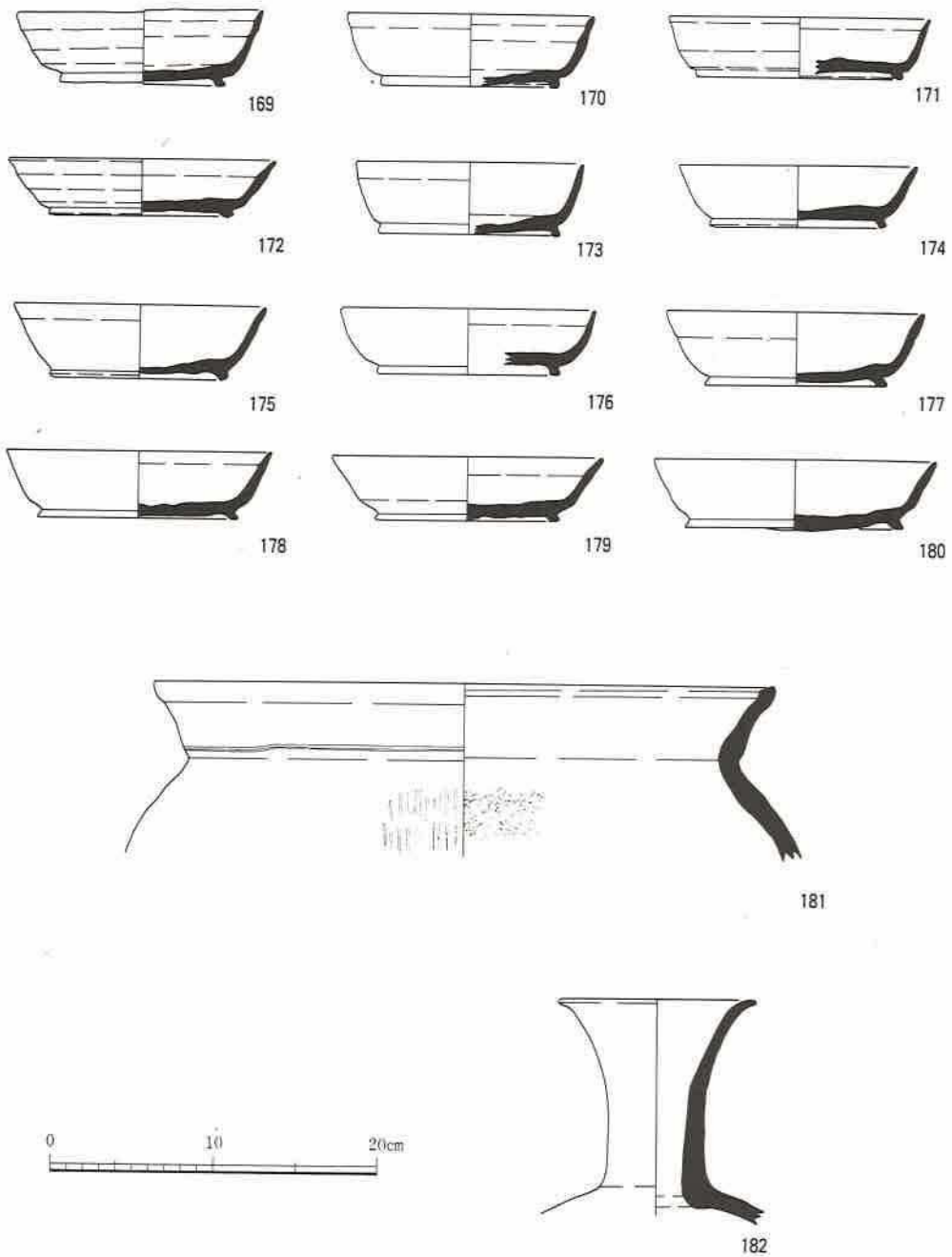


図17　第二灰原出土遺物実測図

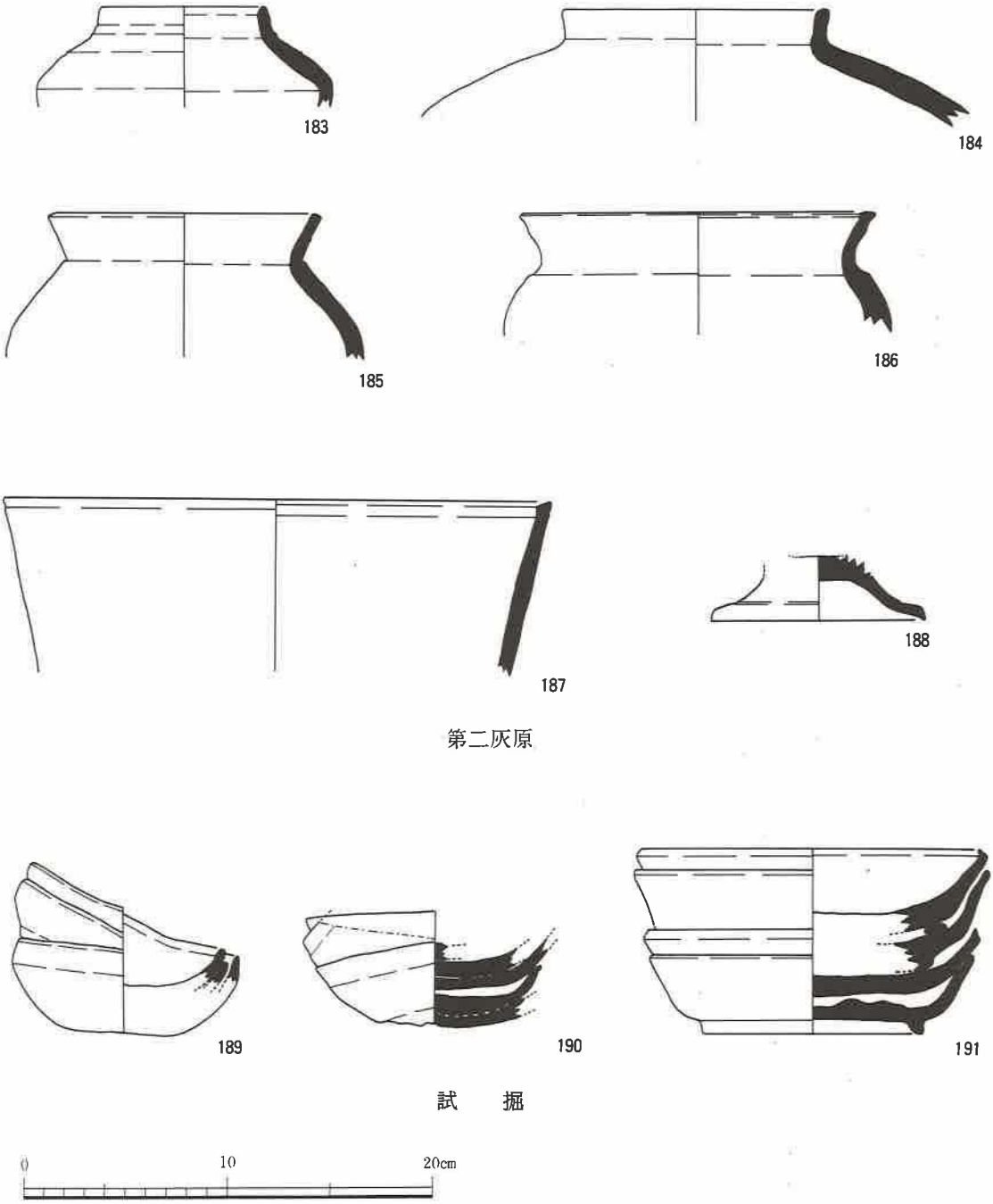


図18　第二灰原・試掘出土遺物実測図

V. おわりに

以上のように、今回の調査によって検出された遺構は、須恵器窯跡１ヶ所（１号窯）及び灰原（第一灰原・第二灰原）である。この章では、菅江窯跡の時期・規模などをもってまとめにかえたい。

今回の調査では、上に記したわずかな遺構検出にとどまったが、窯体が検出された同丘陵斜面には第二灰原からもう一つの窯体が存在していたと考えられ、少なからず２つの窯体の存在は確実視できる。また、今回の調査地の南に位置する舌状丘陵地北斜面にも、少量の須恵器片の散布をみることから、この地にも窯が存在していたのではないだろうか。つまり、北東を口とした三方丘陵地斜面において窯が構築されていた可能性は高いと思われる。そして、それら丘陵地に狭まれたテラス状台地には、横山丘陵から２本の支流が流れ込み、また多量の須恵器片を採集できるなど、工房跡の可能性を秘めているようにも推測できる。しかしながら、調査地も狭く、消失した部分があった今回の調査では、これら規模の全容についてはあくまでも推察の域を脱し得ないことは言うまでもない。

では、これら検出された遺構の時期について考えていくこととする。

まず生産遺跡関係との対比においては、『陶邑古窯址』を参考にすると１号窯・第一・第二灰原から出土した蓋は、内面のかえり消失以後のものであるから、田辺氏のⅣ期、中村氏のⅣ型式に該当し[①]、８世紀前半から８世紀後半に比定できる。

一方、消費地関係との対比については、『平城宮跡』などを参考に考えてみる。本窯跡の出土遺物は、杯身（埦）・蓋・鉢・提瓶・平瓶などバラエティに富む器種構成であるが数量的には杯身（埦）・蓋が多数を占めている。蓋については、そのほとんどが擬宝珠つまみを有し、つまみに対する器高は低く、外面の屈曲部・端部の稜はあまり鋭くない。また、杯身（埦）については有台・無台の別があるが、有台杯身（埦）の高台は、短く底端部から外方への踏んばりはさほど強くない。これらの遺物とよく似ているものが、平城宮跡６ＡＢＯ区土壙ＳＫ 219から出土している。ＳＫ 219は「平城宮Ⅳ」に属するとされており、その年代は天平宝字６年（762）銘の木簡から、天平宝字末年（763）頃と考えられている[②]。

これらのことから、本窯跡は奈良時代前半から後期前半にかけての時期に等置し得るのではないかと考える。

また、町内には本窯跡をはじめとして、西谷遺跡・烏脇遺跡・深沢谷遺跡・今中遺跡などの窯跡が周知されている。これらの中には所在不詳な遺跡もあるが、これらの遺跡のほとんどが本遺跡と同じ横山丘陵沿いに点在するのである。そして、西谷遺跡については本遺跡の下限頃から以降の須恵器片が採集されている。

つまり、奈良時代から平安時代にかけて、菅江遺跡を中心とした横山丘陵一帯が須恵器の一大生産地である様相を呈していたのではないだろうか。

以上で本報告書のまとめとするが、遺構・遺物の検証にも深慮を欠いた感があり、また推論が多く、今後の調査・研究に期すところは大きい。先学諸氏の御批判を御願いしてまとめにかえたい。

註

①田辺昭三「陶邑古窯址群Ⅰ」　平安考古学クラブ　1966
　中村　浩「陶邑Ⅰ」　大阪府文化財調査報告書
②奈良国立文化財研究所編「平城宮発掘調査報告書Ⅱ」

表1　出土遺物観察表

調査区	器形	図版番号	法量（cm）	形態の特徴	成形の特徴	備考
一号窯	甕	1	口径：36.0	○口縁部から肩部にかけて現存する。 ○製品置台と思われる。 ○体部及び肩部はなだらかな線を呈し、口頸部は短く、肩部から大きく外反する口縁を有する。 ○口縁端部は外面がややふくらみ厚みをもっている。 ○体部及び肩部外面に平行叩き目、内面に同心円文痕。 ○外面口縁部に櫛描文が残る。	○口縁部内外面とも横ナデ調整。	胎土：良好 焼成：生焼 色調：淡赤褐色 ロクロ：右方向
	杯身	2	口径：13.0 器高：3.2	○ややふくらみをもった底部から段をなし、大きく外上方へ立ち上がる。 ○口縁端部は丸く収める。 ○底部内面は粘土紐巻き上げにより段を有する。	○体部は内外面ともに横ナデ調整。	胎土：良好 焼成：不良（変形） 色調：淡黒灰色
		3	口径：13.1 器高：2.8	○比較的平坦な底部よりゆるやかに外上方へ立ち上がる。 ○口縁部はやや内湾し、端部は丸く収める。 ○底部内面は粘土紐痕により段を有し、底部と体部の接合部分に僅かな亀裂が残る。 ○体部から口縁にかけての一部分は窯床と同色を呈している。	○体部は内外面とも横ナデ調整。 ○底部外面はヘラ削り調整、内面は一定方向へのナデ調整。	胎土：良好 焼成：良好（変形） 色調：灰白色 ロクロ：右方向
	有台杯身	4	口径：15.8 高台径：10.8 器高：4.0	○やや内傾しながら立ち上がり、口縁端部は丸く収める。 ○高台は底部より少し内に入り、外方へ八の字形に踏んばる。接着面は平坦であったが、置台に使用されたとみえて、かなり不定形である。 ○底部外面に粘土紐の原型を残す。	○体部、口縁部は横ナデ調整。 ○底部内面は不定方向不連続のナデをおこなっている。	胎土：良好 焼成：良好 色調：黒灰色
第一灰原	杯蓋（第2層）	5	口径：16.3 器高：4.2	○天井部中央にやや平担な擬宝珠様つまみを貼付する。 ○丸味をおびた天井部で、口縁端部は下方へ内傾したのち小さく外反し、はっきりとした稜をなす。 ○天井部端部にロクロ回転に垂直に引いたヘラの痕を残す	○天井部外面が2分の1回転ヘラ削り調整で、残りは回転ナデ調整。 ○天井部内面3分の2不定方向のナデ調整。	胎土：やや不良 焼成：やや不良（変形） 色調：淡黒灰色 ロクロ：左方向
		6	口径：15.6 器高：3.0	○やや中央部が突出した偏平な擬宝珠様つまみを有し、天井部中央より上方へ強く屈折、外反したのち、なだらかに下方へおちる。 ○口縁端部は内傾する。 ○天井部外面の強く屈折する部分に2個の粘土塊が残る。	○天井部外面が3分の2回転ヘラ削り調整で、残りは回転ナデ調整。 ○内面は3分の2ナデ調整。	胎土：やや不良 焼成：良好 色調：黒灰色

調査区	器形	図版番号	法量（cm）	形態の特徴	成形の特徴	備考
第一灰原	杯蓋 （第4層）	7	口径：18.8 残存高：(2.9)	○平坦な頂上部より鈍角に下方におちる。 ○断面の色調は天井部2分の1から口縁部までが暗あずき色を呈している。	○天井部外面の3分の2は回転ヘラ削り調整。 ○内面は不定方向のナデ調整。	胎土：やや不良 焼成：不良 色調：淡黒灰色
		8	口径：15.8 器高：2.3	○天井部中央のつまみは偏平というより、縁部が高く、内におちこんでいる。 ○天井部中央より上方へゆるやかに上がり、ゆるやかに外反して、端部で短く下方へ屈曲する。稜は比較的鈍い。 ○天井部外面にヘラ記号のような痕跡を残し、特に、外面端部には刺突文を残す。また断面は天井部2分の1から、口縁部まで暗あずき色を呈している。	○天井部外面の3分の2以上は回転ヘラ削り調整で、内面2分の1は不定方向のナデ調整。残りは回転横ナデ調整。	胎土：良好 焼成：良好 色調：淡黒灰色
		9	口径：16.2 器高：3.6	○擬宝珠様つまみを有し、やや平坦な天井部より下方へなだらかな線をもつ。 ○口縁端部はやや内方へ屈曲する。	○天井部外面2分の1は回転ヘラ削り調整し、残りは回転ナデ調整。 ○天井部内面2分の1は丁寧なみがき調整がされており、残りは回転ナデ調整である。	胎土：やや不良 焼成：良好 色調：淡黒灰色
	（第5層）	10	口径：16.2 器高：4.1	○ほぼ平坦な擬宝珠様つまみをもち比較的丸味を呈する。 ○天井中央部の平坦面からなだらかに屈折しており、その地点でやや鈍い稜をもつ。 ○口縁部は短く、やや内傾している。 ○天井部内面にヘラ記号のような2条平行のヘラ痕が残る	○天井部外面2分の1は回転ヘラ削り調整し、残りの3分の2はナデ調整、残りは回転ナデ調整である。 ○内面の2分の1は不定方向のナデ調整、残りの3分の2を回転ヘラ削り調整、残りは回転ナデ調整を施す。	胎土：やや不良 焼成：良好 色調：淡黄灰色
		11	口径：18.5 器高：3.7	○中央部及び縁部の高い擬宝珠様つまみが貼付され、天井部平坦面から下方へなだらかな線をもつ。 ○口縁部は短く、内傾している。 ○天井部外面の平坦部下方に2つの指圧痕を残す。	○天井部外面2分の1は回転ヘラ削り調整で、残りは回転ナデ調整。 ○内面2分の1は不定方向のナデ調整。	胎土：良好 焼成：良好 色調：明黒灰色 ロクロ：右方向
		12	口径：15.5 器高：4.1	○縁部の高い擬宝珠様つまみを貼付し、全体に丸味をおびている。 ○口縁部は短く、内傾したのち、端部を小さくつまむ。 ○内外面ともに部分的にかなり黒色を呈する。	○天井部外面2分の1は回転ヘラ削り調整で、残りは回転ナデ調整。	胎土：やや不良 焼成：やや不良 色調：黒灰色
		13	口径：16.7 器高：3.2	○偏平な擬宝珠様つまみをもち、器高はあまり高くない。 ○天井部外面に重ね焼きをした跡があり、その外方にのみ自然釉が残る。 ○口縁部はやや内傾している。	○天井部外面3分の2は回転ヘラ削り調整し、残りは回転ナデ調整。 ○内面3分の2は不定方向のナデ調整。	胎土：不良 焼成：良好 色調：黒灰色 ロクロ：右方向

調査区	器形	図版番号	法量（cm）	形態の特徴	成形の特徴	備考
第一灰原	杯蓋 （第5層）	14	口径：19.0 器高： 3.7	○天井部中央に擬宝珠様つまみを貼付し、器高は低い。 ○口縁部は短く、かすかに内傾する。 ○天井部外面平坦部端に2条の沈線がある。	○天井部外面2分の1は丁寧な回転ヘラ削り調整。 ○内面2分の1はみがき調整で、残りは回転ナデ調整。	胎土：やや不良 焼成：良好 色調：淡黒灰色 ロクロ：左方向
		15	口径：17.9 器高： 3.0	○中央がふくらみ丸味をおびた擬宝珠様つまみを有する。天井部中央はやや上からおしつぶされた感がある。 ○天井部中央から上方へゆるやかに屈折し、下方へやや外反し段をなして、なだらかにおちる。 ○口縁部は短く、内傾する。	○天井部外面3分の2回転ヘラ削り調整。 ○内面3分の2不定方向ナデ調整。	胎土：不良 焼成：良好 色調：淡黄灰色 ロクロ：右方向
		16	口径：16.8 器高： 3.1	○偏平な擬宝珠様つまみを貼付し、器高は比較的低い。 ○口縁は短く、少し内傾し端部を外方へつまむ。 ○天井部外面にはっきりとした稜をもつ。 ○天井部外面の平坦面からなだらかに下方向へ向かう境に数点の指圧痕と思われる跡を残す。	○天井部外面2分の1は回転ヘラ削り調整。 ○内面2分の1は丁寧なナデ調整が施こされ、残りは回転ナデ調整である。	胎土：不良 焼成：良好（変形） 色調：淡黒灰色 ロクロ：左方向
		17	口径：16.5 器高： 2.2	○全体的にかなり変形しており、上から押しつぶされた感がある。 ○天井部外面で色調がはっきり分かれており、二次焼成の跡などが認められる。（置台の可能性大）	○天井部外面3分の2で不十分な回転ヘラ削り調整。 ○内面2分の1ナデ調整で、残りは回転ナデ調整。	胎土：やや不良 焼成：不良（変形） 色調：黄灰色 ロクロ：左方向
		18	口径：17.0 器高： 1.6	○偏平というより縁が高いつまみを有する。 ○天井部中央から上方へゆるやかに屈折し、なだらかに外反する。 ○口縁はほぼ垂直に下る。	○天井部外面3分の2は回転ヘラ削り調整し、残りは回転ナデ調整。 ○内面3分の2はナデ調整を施す。	胎土：やや不良 焼成：良好 色調：淡黒灰色
	杯身 （第4層）	19	口径：12.0 器高： 3.2	○平坦な底部面からやや丸味をもって立ち上がり、一度内湾したのち外反し、口縁部でまっすぐたち上がる。口縁部下方で鈍い稜をなす。 ○端部は丸く収める。	○底部外面は回転ヘラ切り未調整。 ○底部内面中央部に一定方向のナデを施す。	胎土：やや不良 焼成：やや不良 色調：暗黄灰色 ロクロ：右方向
		20	口径：12.1 器高： 3.7	○ほぼ平坦な底部面より外上方になだらかに立ちあがり、体部中央で屈折し、上方へ向かう。屈折するところで稜をなす。口縁端部は丸味をおびている。	○底部外面はヘラ切り未調整で粘土紐が明瞭に残る ○体部外面下方2分の1は粗雑なナデを施す。 ○底部外面は丁寧なナデが施されている。他は回転ナデ調整。	胎土：やや不良 焼成：不良 色調：灰黄白色 ロクロ：左方向

調査区	器形	図版番号	法量（cm）	形態の特徴	成形の特徴	備考
第一灰原	杯身 （第4層）	21	口径：14.0 器高：3.2	○平坦な底部面より外上方に大きく立ち上がり、体部上方でふくらみをみせる。口縁部は小さく外反する。端部は尖り気味で収まる。	○底部外面は回転ヘラ切り後、一部でナデ調整されている。 ○底部内面中央部に一定方向のナデが残る。	胎土：良好 焼成：やや不良 色調：暗黄灰色 ロクロ：左方向
		22	口径：12.0 器高：3.1	○基本的な底部面から二次底部面を介して体部へと至る。体部では斜上方にふくらんだ後、口縁で小さく外反する。端部は丸く収められている。	○底部外面は回転ヘラ削り調整の後、端部の一部でナデが施されている。 ○底部内面中央部に一定方向のナデが残る。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：良好 色調：黒灰色 ロクロ：右方向
		23	口径：11.8 器高：2.7	○平坦な底部面から外上方へのびる体部を有し、口縁部はわずかに外反気味である。端部はやや丸味をおびている	○底部外面は回転ヘラ削り調整で、他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：良好 色調：黄灰色 ロクロ：右方向
		24	口径：11.6 器高：4.4	○底部面はほぼ平ら（ややふくらみ気味）で斜上方へ立ち上がる。口縁部は小さく外反し、端部は少し尖り気味である。 ○底部中央は意図的なものかは不明だが、孔を穿った様な割れ口を有する。（器体全体に小さなくぼみが多数存在する。置台の可能性大）	○底部外面は比較的丁寧な回転ヘラ削り調整。 ○底部内面中央部に一定方向のナデを施す。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：やや不良 色調：茶灰色 ロクロ：右方向
		25	口径：10.2 器高：3.3	○平らな底部より外上方へまっすぐに立ち上がる。口縁端部は丸く収める。 ○底部外面には部分的に粘土小塊が付着している。	○底部外面は回転ヘラ切り。底部外面端部に不定方向のナデを施す。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：やや不良 焼成：やや不良（変形） 色調：暗黄灰色 ロクロ：右方向
		26	口径：10.6 器高：4.2	○平坦な底部面より直接的に体部へ至るもので、底部よりほぼ直線的に外上方へ立ちあがる。口縁部で小さく外反し、端部は比較的丸味をおびている。	○底部外面は粗雑な回転ヘラ切りで、一部の底部と体部の接点部に段を有する。 ○底部内面中央部に一定方向のナデを施す。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：やや不良 焼成：やや不良（変形） 色調：灰黄白色 ロクロ：右方向
		27	口径：11.4 器高：3.2	○平らな底部より、外上方へやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸く収まる。	○底部外面は回転ヘラ切り未調整。 ○他は回転ナデ調整。底部内面の一部、ナデ調整。	胎土：やや不良 焼成：良好 色調：黄灰色 ロクロ：右方向

調査区	器形	図版番号	法量（cm）	形態の特徴	成形の特徴	備考
第一灰原	杯身 （第4層）	28	口径：12.0 器高：3.7	○平坦な底部面を有し、ややふくらみをもって立ち上がるこの地点で鈍い稜をもつ。口縁端部は丸く収められている。 ○底部外面端と体部との境に多少の段を有する。	○底部外面はかなり丁寧なヘラ削り調整であるが、左記の段をなすところは一部粗雑なナデが認められる。 ○底部内面中央の一部に一定方向へのナデが残る ○他は回転ナデ調整が施されている。	胎土：良好 焼成：不良（変形） 色調：黒灰色 ロクロ：右方向
		29	口径：13.0 器高：3.6	○底部中央がやや突出した深みのある底部面から、丸味をおびて立ちあがる。 ○口縁部はほぼ直線的で端部は丸味をおびて収まる。	○底部外面は粗い回転ヘラ切りで、底部と体部境界部分は口縁方向へのナデが施されている ○底部内面中央部には一定方向のナデが残る。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：やや不良 色調：黄灰色 ロクロ：右方向
		30	口径：12.2 器高：2.8	○平らな底部面から、ゆるやかな角度で外上方に立ちあがり、口縁に至る。 ○口縁部はやや内湾気味で端部は丸く収める。 ○かなり大きく変形している。	○底部外面は丁寧なヘラ切りがされており、底部端は部分的にナデを施す。 ○底部内面中央部に一定方向のナデを施す。	胎土：やや不良 焼成：やや不良（変形） 色調：黒灰色 ロクロ：右方向
		31	口径：12.0 器高：3.6	○上記30の杯身に近似しているが、30より丸味をおびて立ち上がり、口縁部はやや外反する。	○底部外面は回転ヘラ削り調整であるが、底部端の体部との境にナデを施す。 ○底部内面中央部に一定方向のナデを施す。	胎土：良好 焼成：やや不良（変形） 色調：暗灰黄色 ロクロ：右方向
		32	口径：13.0 器高：3.3	○平坦な底部面より、丸味をおびて、外上方に立ちあがる。口縁端部は丸く収める。	○底部外面は比較的丁寧なヘラ切りがされており、端部の一部で口縁に向かってのナデが残る。 ○底部内面中央部に一定方向のナデが残る。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：不良（変形） 色調：外、暗黄灰色 内、黒灰色 ロクロ：右方向
		33	口径：12.0 器高：3.1	○やや丸味をもった底部からなだらかに立ち上がり、わずかに内湾したのち、口縁部で小さく外反する。口縁端部は丸く収める。 ○底部と体部の境にはっきりとした稜をもつ。	○底部外面は、回転ヘラ削り調整。 ○他は回転ナデ調整が施されているが、体部外面は粗雑で粘土紐の境界線をはっきり残す。	胎土：やや不良 焼成：良好 色調：黄灰色 ロクロ：右方向
		34	口径：12.0 器高：3.3	○平らな底部より直接的に体部に至り、かすかに内湾したのち、小さく外反する。 ○口縁部は比較的丸く収められている。	○底部外面は回転ヘラ切りで未調整。 ○他は回転ナデ調整であるが、外面底部端から体部の2分の1程度に及び範囲に不定方向のナデ跡が残る。	胎土：良好 焼成：良好 色調：淡黒灰色 ロクロ：右方向

調査区	器形	図版番号	法量（cm）	形態の特徴	成形の特徴	備考
第一灰原	杯身 （第4層）	35	口径：12.9 器高：3.4	○平坦な底部面からゆるやかに外上方へ立ちあがり、一度内傾したのち外反する。口縁端部は丸く収められている	○底部外面は不定方向のナデ調整。 ○体部外面3分の2下方は不定方向のナデ調整が施されている。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：生焼 色調：淡茶灰色 ロクロ：右方向
		36	口径：13.0 器高：3.7	○平坦な底部面から丸味をもって体部に至るもので、一度内湾したのち、口縁部で小さく外反する。内湾する部分で稜を呈する。	○底部外面は粗雑な回転ヘラ切りで、一部の底部と体部の接点部に段を有する。 ○底部内面中央部に一定方向のナデを施す。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：やや不良 焼成：不良（変形） 色調：黒灰色 ロクロ：右方向
	（第5層）	37	口径：11.6 器高：2.9	○平坦な底部面から丸味をおびながら体部に至る。体部より口縁部にかけてやや内湾気味に立ちあがる。口縁端部は丸く収まる。	○底部外面は回転ヘラ削り未調整。 ○底部外面端から体部にかけて、部分的にナデを施している。他は回転ナデ調整。 ○底部外面にヘラ痕が残る。底部内面中央に一定方向のナデを施す。	胎土：良好 焼成：良好 色調：淡黒灰色 ロクロ：左方向
		38	口径：12.0 器高：3.7	○平坦な底部面からやや丸味をおびながら、なだらかに立ちあがる。体部上方でややふくらみを有する。口縁部は小さく外反し、端部はやや丸味をおびている。	○底部外面はヘラ切り未調整。 ○底部内面中央に一定方向のナデを残す。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：やや不良 焼成：良好 色調：黄灰色 ロクロ：左方向
		39	口径：12.0 器高：2.9	○わずかに内側にくぼんだ底部面から小さい段をなして体部に至る。体部、口縁部は内湾気味である。端部は丸く収められている。	○底部外面はヘラ切り未調整。 ○底部内面は丁寧なナデを施す。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：不良 焼成：良好 色調：黒灰色
		40	口径：11.4 器高：3.5	○平坦な底部面から直接的に体部に至り、口縁部はやや内湾気味に収まる。端部は丸く収まる。	○底部外面は回転ヘラ切り未調整。 ○底部内面中央に一定方向のナデを施す。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：やや不良 色調：黒灰色 ロクロ：右方向
		41	口径：12.8 器高：2.3	○全体的にやや内側にくぼんだ底部面から直接的に体部へと至る。	○底部外面は回転ヘラ削り調整。 ○底部内面中央に一定方向のナデを残す。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：良好 色調：暗黄灰色 ロクロ：右方向

調査区	器形	図版番号	法量（cm）	形態の特徴	成形の特徴	備考
第一灰原	杯身 （第5層）	42	口径：12.8 器高：3.5	○平らな底部面より直接体部へ至り、やや内傾したのち外上方へのびる。口縁端部は丸く収める。	○底部外面は回転ヘラ切り未調整。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：良好 色調：黄灰白色 ロクロ：右方向
		43	口径：11.8 器高：3.1	○平らな底部面から丸味をもって立ち上がり、一度内湾したのち外反する。口縁端部はやや尖り気味である。	○底部外面はヘラ切り未調整。 ○底部内面中央部にナデを施す。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：やや不良 焼成：不良（変形） 色調：黒黄灰色 ロクロ：左方向
		44	口径：12.0 器高：3.2	○平坦な底部面からならだかに立ち上がり、二度の内湾の後、外反する。二度の内湾の間に鈍い稜をなす。口縁端部は比較的丸く収まる。	○底部外面は回転ヘラ削り調整。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：やや不良 焼成：良好 色調：黒黄灰色 ロクロ：左方向
		45	口径：12.2 器高：3.3	○平らな底部より丸味をおびて体部に至り、ゆるやかに外反する。	○底部外面はヘラ切り未調整。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：良好 色調：淡黄灰色 ロクロ：左方向
		46	口径：12.0 器高：3.0	○平坦な底部面より丸味をおびて、なだらかに立ち上がり口縁部で外反する。口縁端部は丸く収まる。	○底部外面は回転ヘラ切り未調整。 ○底部内面中央に一定方向のナデが残るが、他の面は丁寧なナデ仕上げが施されている。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良始 焼成：良好 色調：淡黄灰色 ロクロ：右方向
		47	口径：12.2 器高：3.1	○わずかに底部外面が内側へ突出気味ではあるが、丸味をおびてやや開き気味で体部に至る。口縁部は小さく外反し、端部は尖り気味である。	○底部外面は回転ヘラ削り未調整。 ○底部内面中央に一定方向のナデを施す。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：良好 色調：黄灰色 ロクロ：右方向
		48	口径：13.0 器高：3.5	○平らな底部面からなだらかに立ち上がり、内傾したのち口縁部で外上方へのびる。	○底部外面は回転ヘラ削り調整。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：生焼 色調：淡黄白色 ロクロ：右方向

調査区	器形	図版番号	法量（cm）	形態の特徴	成形の特徴	備考
第一灰原	杯身 （第5層）	49	口径：12.0 器高： 4.0	○比較的平らな底部面から小さな段を有して、内湾気味に体部に至る。口縁部はゆるやかに外反し、端部は丸く収められている。	○底部外面は回転ヘラ切り未調整。 ○底部内面中央に一定方向のナデを残す。 ○他はやや雑な回転ナデ調整を施す。	胎土：良好 焼成：不良 色調：淡茶灰色 ロクロ：右方向
		50	口径：14.0 器高： 3.6	○平坦な底部面からなだらかに立ち上がり、体部で内傾したのち口縁部で外上方へのびる。口縁端部は丸く収まる。	○底部外面は回転ヘラ切り未調整。 ○底部内面中央に一定方向のナデを施す。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：やや不良 焼成：生焼 色調：淡茶灰色 ロクロ：右方向
		51	口径：11.2 器高： 3.2	○ややくぼみ気味ではあるが、全体的に平らな底部から外上方へゆるやかにのびる体部を有する。口縁端部は丸く収める。	○底部外面は明瞭ではないが、回転ヘラ削り調整。 ○底部内面及び体部内外面共に回転ナデ調整。（底部内面の一部でナデ調整）	胎土：やや不良 焼成：不良（変形） 色調：黒黄灰色 ロクロ：左方向
		52	口径：12.0 器高： 3.0	○ほぼ平らな底部面より段をなし、体部へと立ち上がる。口縁部はわずかに内湾気味で端部は少し丸味をおびている。	○底部外面はヘラ切り未調整。 ○底部内面中央は一定方向のナデが見られる。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：やや不良 色調：暗黄灰色 ロクロ：右方向
		53	口径：12.0 器高： 3.7	○平坦な底部面から丸味を有しながら、なだらかに体部に至る。口縁端部はやや尖り気味に収まる。	○底部外面は回転ヘラ切り未調整。 ○他は回転ナデ調整であるが、全体的にかなり丁寧に施こされている。 ○底部内面中央に一定方向のナデが残る。	胎土：不良 焼成：不良（変形） 色調：暗黒灰色 ロクロ：左方向
		54	口径：12.2 器高： 3.3	○底部中央が内側に突出しているが、他の底部面は平坦でわずかに丸味をもって体部に至る。口縁は小さく外反し端部は丸く収まる。	○底部外面は回転ヘラ削り未調整。 ○底部内面は回転ナデの後、ナデ仕上げを行っている。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：不良 色調：淡黒灰色 ロクロ：右方向
		55	口径：12.6 器高： 3.1	○底部中央がやや内側へ突出気味ではあるが、丸味をおびて体部に至る。体部で一度小さく外上方へのびるが、口縁部は内湾気味に収まる。口縁端部はやや尖り気味である。	○底部外面は回転ヘラ切り未調整。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：やや不良 焼成：やや不良 色調：淡黄灰色 ロクロ：左方向
		56	口径：12.9 器高： 3.8	○平坦な底部面から直接体部に至り、体部下方から大きく外上方にのびる。口縁端部は比較的丸く収まる。	○底部外面は回転ヘラ切り未調整で、粘土紐を明瞭に残す。 ○体部外面下方は部分的にナデが施されている。 ○他は回転ナデ調整である。	胎土：良好 焼成：良好 色調：淡黄灰色 ロクロ：左方向

調査区	器形	図版番号	法量（cm）	形態の特徴	成形の特徴	備考
第一灰原	杯身（第5層）	57	口径：13.0 器高： 4.1	○やや凸凹のある底部面から丸味をおびながら、外上方へ大きく開き気味で立ちあがる。口縁部でわずかに外方へのび、端部は丸く収められている。 ○底部面と体部の境で部分的に段をなす。	○底部外面はヘラ切り未調整。 ○底部内面中央部に一定方向のナデが残る。 ○他は回転ナデ調整であるが、体部外面下方3分の1は粗雑である。	胎土：やや不良 焼成：不良 色調：淡黒灰色 ロクロ：左方向
		58	口径：13.0 器高： 2.7	○平坦な底部面より大きく外上方へのび体部に至る。口縁端部はやや尖り気味に収まる。	○底部外面は回転ヘラ切り未調整。 ○体部内面に部分的にではあるが、不定方向のナデを残す。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：やや不良 色調：淡黒灰色 ロクロ：右方向
		59	口径：13.0 器高： 3.1	○平坦な底部面からやや丸味をおびながら、直接体部へ至る。口縁端部は少し尖り気味に収まる。	○底部外面は回転ヘラ切り未調整。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：良好 色調：淡黄灰色 ロクロ：右方向
		60	口径：13.3 器高： 2.8	○平坦な底部面から大きく外上方へ立ち上がり、口縁部はやや内湾気味になる。端部は比較的丸く収まる。	○底部外面は回転ヘラ切り未調整。 ○底部内面中央に一定方向のナデが残る。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：やや不良 焼成：不良（変形） 色調：暗黄灰色 ロクロ：左方向
		61	口径：13.4 器高： 3.1	○比較的平坦な底部面から小さな段を有して、なだらかに立ち上がる。口縁部は少し内湾気味で、端部は丸く収まる。	○底部外面はヘラ切りで、部分的にナデを施す ○底部内面は不定方向のナデ調整。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：生焼 色調：淡茶灰色 ロクロ：右方向
		62	口径：14.8 器高： 3.0	○内側にくぼんだ底部面から丸味をもって直接体部へ立ち上がる。口縁端部は丸く収まる。	○底部外面は回転ヘラ切りで、一部分的にナデを施す。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：不良（変形） 色調：黒灰色 ロクロ：右方向
	有台杯身（第4層）	63	口径：14.0 高台径： 9.4 器高： 3.7	○平坦な底部面から丸味をおびて外上方へと立ちあがる。口縁端部はやや尖り気味に収まる。高台は底部やや内側に貼付され、太短く直立気味だが、端部は内湾している ○接地面は外端面に接地している。 ○高台接地面に一条の沈線がみられる。	○底部外面は回転ヘラ削り調整。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：生焼 色調：黄灰色 ロクロ：左方向
		64	口径：14.0 高台径：10.8 器高： 3.9	○ほぼ平坦な底部面から直接体部に至り、口縁部でやや外反する。底部やや内側に直立気味な高台が貼付され、接地面は平らである。	○底部外面は回転ヘラ削り調整。 ○底部内面は不定方向のナデが残る。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：やや不良 焼成：やや不良（変形） 色調：黄灰色 ロクロ：左方向

調査区	器形	図版番号	法量（cm）	形態の特徴	成形の特徴	備考
第一灰原	有台杯身（第4層）	65	口径：16.0 高台径：10.4 器高：4.0	○平坦な底部面から丸味をもって直接体部に至る。口縁端部はやや尖り気味で収まる。底部やや内側に高台を貼付し、接地面は平らである。	○底部外面は回転ヘラ削り調整。 ○底部内面はナデ調整。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：良好 色調：暗黄灰色 ロクロ：左方向
		66	口径：17.2 高台径：11.2 器高：4.3	○平坦な底部面から直接体部に至り、口縁端部は丸く収まる。底部やや内側に、八の字形に開く高台を貼付し、接地面はほぼ平らである。	○底部外面は回転ヘラ削り調整。 ○底部内面3分の2は不定方向のナデを施す。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：やや不良 色調：黒黄灰色 ロクロ：右方向
		67	口径：17.3 高台径：11.2 器高：4.9	○平坦な底部面より丸味をもって立ち上がり、口縁部はやや外反気味である。端部はやや尖り気味に収まる。底部やや内側に八の字形に開く高台が貼付され内端面で接地する。	○底部外面は回転ヘラ切り未調整。 ○底部内面中央には一定方向のナデを施す。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：やや不良 焼成：やや不良 色調：淡黄灰色 ロクロ：右方向
		68	口径：18.0 高台径：11.9 器高：3.9	○平坦な底部面から丸味をおびて立ちあがり、一度内傾したのち外上方へのびる。端部は丸く収まる。底部やや内側にやや八の字形に開く高台を貼付し、内端面で接地する。	○底部外面は回転ヘラ削り調整。 ○底部内面中央部に不定方向のナデを施す。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：やや不良 焼成：良好 色調：淡黒灰色 ロクロ：右方向
		69	口径：15.0 高台径：10.5 器高：3.9	○平らな底部面から直接体部に至り、口縁端部は比較的丸く収める。底部端にやや八の字形に開く高台を貼付し、内端面で接地する。	○底部外面はヘラ切り未調整。 ○底部内面の大半は一定方向のナデを施す。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：やや不良 焼成：不良 色調：暗黄灰色 ロクロ：左方向
		70	口径：16.0 高台径：10.0 器高：3.4	○平坦な底部面から大きく外上方へ立ちあがり、口縁部でやや内湾する。端部はやや尖り気味に収まる。底部端に大きく八の字形に開く短い高台が貼付され、内端面で接地する。	○底部外面はヘラ削り調整。 ○底部内面は不定方向のナデを施す。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：やや不良 色調：淡黒灰色 ロクロ：左方向
		71	口径：16.8 高台径：11.6 器高：4.5	○平坦な底部面からやや丸味をおびて、直接体部へ至る。口縁端部はやや尖り気味に収まる。高台は底部端に貼付され、短く、端部は外反する。接地面は平らである。	○底部外面は回転ヘラ削り調整。 ○底部内面は一定方向のナデ調整。 ○高台外面は回転ナデ調整によって補足されている。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：やや不良 焼成：生焼 色調：灰褐色 ロクロ：右方向
		72	口径：18.4 高台径：13.7 器高：3.9	○平坦な底部面からほぼ直接体部に至る。体部で一度内傾するが、口縁部では小さく外反する。端部は尖り気味に収まる。底部端に八の字形気味の高台が貼付され、内端面で接地する。	○底部外面は回転ヘラ削り調整。 ○底部内面はみがき調整。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：良好（変形） 色調：黒灰色 ロクロ：右方向

調査区	器形	図版番号	法量（cm）	形態の特徴	成形の特徴	備考
第一灰原	有台杯身 （第5層）	73	口径：10.8 高台径：6.9 器高：3.7	○平坦な底部面から直接体部に至る。口縁部はわずかに外反し、端部はやや尖り気味に収まる。底部やや内側に直立気味の小さい高台が貼付され、接地面は平らである。 ○底部外面以外に、かなりのくぼみがある。（外面全体に二次焼成の跡があり、置台の可能性大）	○底部外面は回転ヘラ削り調整。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：やや不良 焼成：不良 色調：淡黄灰色 ロクロ：右方向
		74	口径：13.5 高台径：9.3 器高：4.3	○ほぼ平らな底部から丸味をおびて立ちあがり、体部・口縁部は内湾気味である。口縁端部は丸く収まる。底部やや内側に八の字形に開く高台が貼付され、内端で接地する。	○底部外面は回転ヘラ削り調整。 ○底部内面中央に一定方向のナデが残る。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：良好 色調：外、黒灰色 内、淡黄灰色 ロクロ：左方向
		75	口径：14.3 高台径：8.2 器高：4.1	○平坦な底部面からなだらかに体部に至る。口縁端部はやや尖り気味に収まる。底部やや内側に八の字形の高台を貼付し、どちらかといえば外端面で接地する。	○底部外面は回転ヘラ削り調整。 ○底部内面中央に一定方向のナデが残る。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：やや不良（変形） 色調：黒灰色 ロクロ：右方向
		76	口径：14.3 高台径：8.7 器高：4.5	○下方へややおちこみ気味の底部面から丸味をおびて体部へ立ち上がる。口縁部は小さく外上方へのび、端部は比較的丸く収まる。底部端やや内側に八の字形の高台を貼付し、接地面はほぼ平らである。	○底部外面は回転ヘラ削り調整。 ○底部内面はナデ調整。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：良好 色調：淡黒灰色 ロクロ：右方向
		77	口径：14.8 高台径：9.6 器高：4.3	○平坦な底部面から直接体部に至るもので、口縁端部は尖り気味に収まる。底部やや内側に直立気味の高台を貼付し、外端面で接地する。高台底部はやや凹状を成している。	○底部外面は回転ヘラ削り調整。 ○底部内面3分の2はナデ調整。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：やや不良 焼成：良好 色調：暗灰色 ロクロ：左方向
		78	口径：15.0 高台径：10.0 器高：4.4	○平坦な底部面からなだらかに立ち上がり、体部で一度内傾する。口縁部はわずかに内湾気味で端部はわずかに尖り気味に収まる。底部やや内側に直立気味の高台を貼付し、接地面は平らである。	○底部外面は回転ヘラ削り調整。 ○底部内面3分の2はナデ調整。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：やや不良 焼成：良好 色調：淡黒灰色 ロクロ：右方向
		79	口径：16.1 高台径：11.0 器高：4.2	○平らな底部面からなだらかに直接体部に至る。口縁端部はやや尖り気味に収まる。底部やや内側に直立気味の高台を貼付し、内端面で接地する。	○底部外面は回転ヘラ削り調整。 ○底部内面はナデを施す。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：やや不良 色調：黒灰色 ロクロ：右方向

調査区	器形	図版番号	法量（cm）	形態の特徴	成形の特徴	備考
第一灰原	有台杯身 （第５層）	80	口　径：17.0 高台径：11.3 器　高：4.8	○平坦な底部面から直接体部に立ち上がり、一度わずかに内傾気味となる。口縁部は比較的内湾気味で、端部は丸味をおびて収まる。底部やや内側に八の字形に開く高台を貼付し、接地面は平らである。	○底部外面は回転ヘラ削り調整。 ○底部内面３分の２は丁寧なナデ調整。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：やや不良 色調：外、黒灰色 内、淡黄灰色 ロクロ：右方向
		81	口　径：17.0 高台径：11.7 器　高：4.7	○平坦な底部面から直接体部に至り、口縁端部は尖り気味に収まる。底部やや内側に八の字形に開く高台を貼付し内端面で接地する。	○底部外面は回転ヘラ削り調整。 ○底部内面はナデ調整。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：やや不良 焼成：良好 色調：淡黒灰色 ロクロ：左方向
		82	口　径：17.0 高台径：12.5 器　高：4.4	○ほぼ平坦な底部面から丸味をおびて、直接体部に至る。口縁端部はわずかに尖り気味である。底部端やや内側に八の字形に開く高台を貼付し、内端で接地する。（底部中央部が意図的に孔を穿ったようになっており、また二次焼成されたような色調を呈していることから、置台に使用されたと考えられる。）	○底部外面は回転ヘラ削り調整。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：良好 色調：淡黒灰色 ロクロ：右方向
		83	口　径：17.4 高台径：11.4 器　高：4.5	○中央がややおちこむ底部面からなだらかに体部に至り、口縁端部は丸く収めわれている。底部やや内側にわずかに八の字形に開く高台を貼付し、接地面は平らである。	○底部外面は回転ヘラ削り調整。 ○底部内面中央部に一定方向のナデを施す。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：やや不良 焼成：良好 色調：黒灰色 ロクロ：右方向
		84	口　径：15.0 高台径：10.1 器　高：4.5	○平坦な底部面から直接体部へ至る。口縁部はわずかに外反し、端部は比較的丸く収まる。底部端にわずかに八の字形に開く高台を貼付し、接地面は平らである。 ○体部中央に２条の沈線を有する。	○底部外面は回転ヘラ削り調整。 ○底部内面３分の２にナデを施す。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：やや不良 焼成：不良（変形） 色調：淡黒灰色 ロクロ：右方向
		85	口　径：15.0 高台径：10.7 器　高：4.5	○ほぼ平坦な底部面から直接体部へ至り、口縁端部は比較的丸く収まる。 ○底部端に八の字形に開く高台を貼付し、外端で接地する	○底部外面は回転ヘラ削り調整。 ○底部内面は丁寧な回転ナデ調整。 ○高台外側の体部への補足は粗い回転ナデを施す。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：やや不良（変形） 色調：黒灰色 ロクロ：左方向
		86	口　径：15.8 高台径：10.0 器　高：4.0	○平坦な底部面から丸味をおびて体部に至る。口縁部はわずかに外反し、端部は丸く収まる。底部端に丸味をおびた直立気味の高台を貼付し、高台底部は凹状を成す。接地面はほぼ平らである。	○底部外面は回転ヘラ削り調整。 ○底部内面はナデを施す。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：やや不良 色調：黄灰色 ロクロ：右方向

調査区	器形	図版番号	法量（cm）	形態の特徴	成形の特徴	備考
第一灰原	（第5層）	87	口　径：16.0 高台径：10.0 器　高：4.2	○平坦な底部面から直接体部へ至り、口縁部でわずかに外反する。口縁端部はやや尖り気味に収まる。底部端にわずかに八の字形の高台が貼付され、内端面に接地する。	○底部外面は回転ヘラ削り調整。 ○底部内面はヘラ削りを施す。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：良好 色調：淡黒灰色 ロクロ：右方向
		88	口　径：16.6 高台径：10.4 器　高：3.7	○平らな底部面から体部へ直接至り、口縁部で小さく外上方へのびる。端部は丸く収められている。底部端に直立気味の高台を貼付し、内端面で接地する。	○底部外面は回転ヘラ削り調整。 ○底部内面の一部にナデを残す。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：不良（変形） 色調：黒灰色 ロクロ：左方向
		89	口　径：17.0 高台径：12.8 器　高：4.4	○平らな底部面からややふくらみを有して直接体部に至り口縁端部は丸く収まる。底部端に八の字形に開く高台を貼付し、内端面で接地する。	○底部外面は回転ヘラ削り調整。 ○底部内面中央に一定方向のナデが残る。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：不良 焼成：良好（変形） 色調：淡黒灰色 ロクロ：右方向
		90	高台径：9.3	○ほぼ平らな底部から直接体部に至る。口縁部は現存しておらず、不詳。底部端に八の字形に開く高台を貼付し、高台底部は凹状を成す。外端面で接地する。	○底部外面は回転ヘラ削り調整。 ○底部内面はナデ調整。 ○他は回転ナデ調整であるが、高台外側の補足の回転ナデは雑である。	胎土：良好 焼成：良好 色調：暗黄灰色 ロクロ：左方向
		91	高台径：11.9	○平坦な底部面からなだらかに立ち上がる。体部及び口縁部は現存しておらず不詳。底部端に直立気味の高台を貼付し接地面は平らである。	○底部外面は回転ヘラ削り調整。 ○底部内面3分の2はナデ調整。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：生焼 色調：黄灰色 ロクロ：左方向
	甕 （第4層）	92	口径：36.8	○口頸部が外上方へ直線的にのびる。肩部はなだらかに下がる。	○肩部・体部外面は平行叩きの後、スリケシ調整。	胎土：やや不良 焼成：良好 色調：淡黄灰色
		93	口径：30.3	○口頸部は短く外上方にのびる。肩部・体部はなだらかに下がる。	○肩部及び体部外面は平行叩きをカキ目により調整。 ○体部内面は同心円文痕が残る。	胎土：やや不良 焼成：良好 色調：淡黄灰色
		94	口径：35.0	○口頸部は短く外上方にのび、口縁部で小さく屈曲させて肥厚にする。肩部はなだらかに下がり、体部に至る。	○不詳	胎土：やや不良 焼成：良好 色調：灰褐色
		95	口径：27.7	○口頸部は短く外上方にのび、口縁部はわずかに外反気味。肩・体部はなだらかに下がる。	○体部外面は平行叩きの後、スリケシ調整。 ○体部内面は同心円文痕の後、半スリケシ調整。	胎土：良好 焼成：良好 色調：黄灰色

調査区	器形	図版番号	法量（cm）	形態の特徴	成形の特徴	備考
第一灰原	甕（第4層）	96	口径：23.5 体部最大径：34.0	○口頸部はやや長く外上方にのび、口縁部で小さく外反する。肩部からなだらかに下がって体部に至り、やや長い球体をなす。	○肩部・体部外面は平行叩きで一部スリケシ調整。 ○肩部・体部内面は同心円文痕の後、半スリケシ調整。	胎土：良好 焼成：不良（変形） 色調：外、灰褐色 内、黒灰色
		97	口径：26.2	○口頸部は直立気味にのび、口縁部で小さく外上方へのびる。	○不詳	胎土：良好 焼成：良好 色調：黒灰色
	（第5層）	98	口径：23.8	○口頸部はやや長く外上方にのび、口縁部で小さく外反する。肩部はなだらかに下がる。	○肩部外面は平行叩きで半スリケシ調整。 ○肩部内面は円弧円文痕を残す。	胎土：やや不良 焼成：良好 色調：淡黒灰色
		99	口径：26.2	○口頸部はやや長く外上方にのび、口縁部で小さく外反する。肩部はなだらかに下がる。	○肩部外面は平行叩きでスリケシ調整。 ○肩部内面は円弧痕を残す。	胎土：良好 焼成：良好 色調：淡黒灰色
		100	口径：22.0	○口頸部は上方へ立ち上がったのち、屈曲して外上方へのびる。屈曲する点で稜をなす。口縁部はわずかに外反する。肩部はなだらかに下がり体部に至る。	○体部外面は平行叩き痕を残す。 ○体部内面は同心円文痕を残す。	胎土：良好 焼成：良好 色調：黒灰色
		101	口径：26.0	○口頸部は比較的長く、外上方にのびる。肩部から体部にかけてはゆるやかに下がる。	○体部外面は平行叩き痕を残す。 ○体部内面は同心円文痕を残す。	胎土：やや不良 焼成：良好 色調：外、茶灰色 内、灰色
		102	口径：23.0 体部最大径：32.0	○口頸部は比較的短く外上方にのび、口縁部で小さく外反する。肩部はなだらかに下方にのび体部に至り、球体をなす。	○体部外面は平行叩きで上方で半スリケシ調整 ○体部内面は円弧叩きを施す。	胎土：良好 焼成：良好 色調：黒灰色
		103	口径：46.0	○口頸部は比較的短く外上方へのびる。肩部はなだらかに下がり、体部に至る。	○肩・体部外面は平行叩きの後スリケシ調整。	胎土：良好 焼成：良好 色調：暗黄灰色
		104	口径：41.0 体部最大径：22.4 現存高：（28.0）	○口頸部は短く外上方にのびる。やや肩が張っているが、球形に近く、丸底と思われる。片方は現存していないが体部に把手を付している。	○体部外面は平行叩きで、半スリケシ調整。 ○体部内面は同心円文痕を残す。	胎土：良好 焼成：やや不良 色調：外、淡黒灰色 内、茶灰色

調査区	器形	図版番号	法量（cm）	形態の特徴	成形の特徴	備考
第一灰原	長頸壺 （第5層）	105	口　径：11.0 基部径：　6.0 体部最大径：16.5 高台径：10.2 器　高：22.9	○八の字形に開く貼付高台を有した平坦な底部から外上方へ直線的にのびて体部を形成する。肩部はやや張り気味で下方に一条の沈線を施す。口頸基部は細く、外反する口縁部を有する。端部口径が頸基部径より大きくなる。頸部中央やや下方に2条の沈線を施す。口頸部表面の剝離がひどい。高台は内端面で接地する。	○体部下方3分の2は回転ヘラ削り調整。 ○口頸部・高台は回転ナデ調整。	胎土：やや不良 焼成：やや不良 色調：淡黒黄灰色
		106	口　径：　9.5 基部径：　6.2 体部最大径：17.1 高台径：10.0 器　高：22.5	○内端面で接地する八の字形の貼付高台をもち、底部から外上方に直線的にのびて体部を形成する。体部と肩部の屈折は丸みをおびている。肩部はやや張り気味である。口頸部は内湾気味にのびる。端部口径が頸基部径より大きくなる。口頸部中央と下方に一条ずつの沈線を施す。	○体部外面、底部外面に回転ヘラ削り調整。 ○口頸部外面は回転ナデ調整であるが、中央沈線上方は粗い。	胎土：やや不良 焼成：やや不良（変形） 色調：淡黒灰色
	短頸丸胴壺 （第4層）	107	口径：　7.9 体部最大径：11.2	○底部及び体部下方は現存していないので、不詳であるがなだらかに立ち上がる体部からゆるやかに内傾して肩部に至る。口頸部は短く細くわずかに外上方へのびる。端部は尖り気味に収まる。 ○全体的に自然釉が残る。	○回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：不良 色調：外、黒灰色 内、淡黒灰色
	（第5層）	108	口径：13.7 体部最大径：20.0	○底部は現存していないので不詳であるが、底部からなだらかに外上方にのびて体部を形成する。肩部はやや張り気味で、体部との屈折は丸味をおびている。口頸部は短く外上方へのび、端部は丸く収まる。 ○体部内面に櫛描文を施す。	○回転ナデ調整。 （口頸基部に回転ナデを施す前にヘラ削りを施している。）	胎土：良好 焼成：良好 色調：黒褐色
	壺（高台） （第5層）	109	高台径：12.0 高台高：　2.0	○高台のみ現存しており、他は不明。この高台は体部に貼付されており、体部から大きく外下方へのびた後、強く屈折して内傾する。その下方に八の字に開く短く細い台を有する。	○内外面ともに回転ナデを施す。	胎土：やや不良 焼成：やや不良 色調：暗黄灰色
		110	高台径：10.4 高台高：　1.3	○ 109に近似しており、高台内面に2条（一部3条）の尖帯文がある。	○内外面ともに回転ナデを施す。	胎土：やや不良 焼成：やや不良 色調：暗黄灰色
		111	高台径：10.1 高台高：　2.1	○109、110 に類似しているが、台の最下方がやや内傾している。 ○体部内底部に粘土塊が残る。	○高台内面2分の1に一定方向のナデが残る。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：やや不良 焼成：不良 色調：淡黒灰色

調査区	器形	図版番号	法量（cm）	形態の特徴	成形の特徴	備考
第一灰原		112	高台径：15.4 高台高： 3.0	○高台は体部に貼付されており、体部から外反気味に外下方へのびた後、強く屈折して内傾する。	○内面２分の１に不定方向のナデを施す。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：やや不良 焼成：不良 色調：淡黒灰色
	鉢 （第４層）	113	口径：28.4 体部最大径：27.8	○胴部はなだらかに立ち上がり、内湾気味に頸部に至る。 ○頸部はゆるやかに外上方へのび、口縁端部はほぼ平らに収まる。	○内外面ともに回転ナデ調整を基調としているが、胴部内面に部分的にナデを施す。	胎土：やや不良 焼成：良好 色調：明灰褐色
	深鉢 （第５層）	114	口径：29.5 残存高：（20.1）	○胴部及び口縁部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁端部は丸味をおびて収まる。	○内外面上方２分の１は回転ナデ調整。 ○外面下方２分の１は平行叩きの後、スリケシを施す。 ○内面下方２分の１は粗雑なナデを施す。	胎土：良好 焼成：やや不良 色調：淡黒灰色
	台付皿 （第５層）	115	口径：19.0 脚部径： 9.7 脚部高： 2.1 器高： 4.9	○杯部は平坦な底部面からなだらかに立ち上がり、短い口縁部を有する。端部は短く収まる。 ○脚部は下方で輪状帯を有し、その中央部はつまみ出した様に凸状を呈している。そしてこの輪状帯からなだらかに立ち上がり杯部に至る。	○杯底部外面２分の１は回転ヘラ削り調整。 ○杯部内面３分の２は丁寧なナデを施す。 ○脚底部外面の一部分でヘラ切り痕を認める。	胎土：やや不良 焼成：良好 色調：淡黒灰色
	皿 （第５層）	116	口径：18.0 器高： 5.1	○ほぼ平坦な底部面から丸味をおびて立ち上がり、口縁部は内湾気味である。端部は比較的丸く収まる。 ○底部外面に ☒ 状のヘラ記号が残る。	○底部外面はヘラ切り未調整。（部分的にナデを施す） ○底部内面はナデ調整。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：やや不良 色調：淡茶灰色
	平瓶 （第４層）	117	口径：11.7 頸部高： 6.6 体部最大径：19.1 器高：13.9	○中心から偏した口頸部は基部からやや内湾気味にのび、大きくラッパ状に開く。口頸部中央上方に一条の沈線を施す。口縁端部は尖り気味に収まる。肩部はやや張っている。底部は平坦である。	○底部及び体部下方２分の１・外面は回転ヘラ削り調整。	胎土：良好 焼成：良好 色調：淡黒灰色
	環状提瓶 （第４層）	118	体部最大径：16.0 体部最大幅： 4.0 残存高：（14.0）	○底部にあたる部分は平坦な面をなし、環状をなして口頸部に至る。各々の面は平らで、ほとんどふくらみを呈しない。４枚の板状の粘土を接合しているのではないかと思われる。	○内面接合部はカキ目調整。 ○外面は回転ヘラ削り調整。（部分的にハケ目ナデを施す）	胎土：良好 焼成：良好 色調：黄灰色 ロクロ：右方向
	鉢 （第５層）	119	口径：19.7 器高：18.5 底径：12.0	○底部に不安定な台状のものを伴い、器高は比較的高く、口縁部でラッパ状に開く。端部はやや尖り気味に収まる。体部径より口径の方がはるかに大きくなる。底部に何かで刺突したような、小孔が多数みられる。（３cm四方に14個）	○内外面ともに回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：やや不良 色調：黒灰色

調査区	器形	図版番号	法量（cm）	形態の特徴	成形の特徴	備考
第一灰原		120	底　径：11.3 残存高：（15.0）	○上記119に類似しているが、底部は平坦で安定している。 ○底部に小孔が多数みられる。（3㎝四方に11個）	○内外面ともに回転ナデ調整。 ○底部外面の一部にナデとヘラ削り痕が残る。	胎土：良好 焼成：良好 色調：淡黒灰色
		121	口径：26.3	○頸部はなだらかに外上方へのび、中央部で段をなして稜を有する。 ○口縁部は内方へ折曲する。	○回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：良好 色調：外、黒灰色 内、淡黒灰色
	杯身熔着品（第4層）	122	口径：12.2⑥最下位	○杯身の熔着品で6個体のつみ重ねである。	○最下位⑥の底部外面は回転ヘラ切り未調整。 ○最上位①の底部内面中央部にナデを施す。	胎土：不良 焼成：やや不良 色調：暗灰色
	（第5層）	123	口径：11.2③最下位	○杯身の熔着品で3個体のつみ重ねである。	○最下位③の底部外面はヘラ切り未調整。 ○最上位①の底部内面2分の1は一定方向のナデを施す。	胎土：良好 焼成：やや不良 色調：淡黒灰色
第二灰原	壺蓋	124	口径：11.4 器高：4.3	○やや偏平な擬宝珠様つまみを有し、ほぼ平坦な天井部から垂直気味に下方におちる。口縁部はわずかに丸味をおびて収まる。天井部端に稜をもつ。	○天井部外面は回転ヘラ削り調整。 ○天井部内面は丁寧なナデを施す。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：不良（変形） 色調：淡黄灰色 ロクロ：右方向
		125	口径：9.8 残存高：（3.2）	○ほぼ平坦な天井部より丸味をおびて体部に至り、一度内湾したのち小さく外反する。内端面で接着する。外面に自然釉が残る。	○天井部外面は回転ヘラ削り調整。 ○天井部内面はナデ調整。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：良好 色調：淡黄灰色 ロクロ：左方向
	杯蓋	126	口径：14.0 残存高：（3.7）	○天井部は丸味を有し、なだらかに外下方へのびる。口縁端部はやや尖り気味に収まる。	○天井部外面2分の1は回転ヘラ削り調整。 ○天井部内面はナデ調整。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：やや不良 色調：暗黄灰色 ロクロ：右方向
		127	口径：16.0 残存高：（3.1）	○なだらかに下る天井部から小さな段をなし、口縁部で内傾する。端部は尖って収まる。	○天井部外面2分の1は回転ヘラ削り調整。 ○天井部内面3分の2はナデ調整。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：良好 色調：淡黄灰色 ロクロ：右方向

調査区	器形	図版番号	法量（cm）	形態の特徴	成形の特徴	備考
第二灰原	杯蓋	128	口径：16.2 器高： 3.2	○天井中央に偏平で比較的大型の擬宝珠様つまみを貼付、中央部からゆるやかに外下方へのびる。天井部端で稜をなし、口縁部はわずかに凹状をなして内傾する。	○天井部外面３分の１は回転ヘラ削り調整。 ○天井部内面２分の１はナデ調整。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：やや不良 焼成：良好 色調；淡黒灰色 ロクロ：右方向
		129	口径：16.4 器高： 4.0	○天井部中央にわずかに中央部が突出した擬宝珠様つまみを貼付、平坦面からなだらかに外下方へのびる。口縁部は凹状をなして内傾する。	○天井部外面３分の２は回転ヘラ削り調整。 ○天井部内面中央部に一定方向のナデを残す。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：やや不良 焼成：不良（変形） 色調：淡黄灰色 ロクロ：右方向
		130	口径：16.6 器高： 4.4	○天井部中央に擬宝珠様つまみを貼付、天井部平坦面からなだらかに外下方にのびる。口縁部はわずかに凹状をなし、内傾する。	○天井部外面３分の１は回転ヘラ削り調整。 ○天井部内面３分の２はナデ調整。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：良好 色調：淡黄灰色 ロクロ：右方向
		131	口径：16.6 器高： 4.3	○130に酷似。口縁部の凹状部分で稜をなす。	○天井部外面３分の２は回転ヘラ削り調整。 ○天井部内面２分の１はナデ調整。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：やや不良 焼成：良好 色調：淡黒灰色 ロクロ：左方向
		132	口径：18.2 器高： 3.3	○偏平な擬宝珠様つまみを貼付し、天井部平坦面からゆるやかに外下方にのびる。口縁部は内傾する。	○天井部外面３分の２は回転ヘラ削り調整。 ○天井部内面２分の１は丁寧なナデを施す。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：生焼 色調：淡茶白色 ロクロ：左方向
		133	口径：16.0 器高： 2.6	○天井部中央に偏平な擬宝珠様つまみを貼付、天井部平坦面からなだらかに外下方へのびる。口縁部は凹状をなし内傾する。	○天井部外面３分の２は回転ヘラ削り調整。 ○天井部内面２分の１はナデ調整。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：不良 色調：淡黒灰色 ロクロ：右方向
		134	口径：16.0 器高： 2.8	○偏平な擬宝珠様つまみを貼付、天井部平坦面からなだらかに外下方にのびる。口縁部は内傾気味。	○天井部外面３分の２は回転ヘラ削り調整。 ○天井部内面３分の２はナデ調整。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：良好 色調：淡黄灰色 ロクロ：右方向
		135	口径：16.0 器高： 2.7	○偏平な擬宝珠様つまみを貼付、天井部平坦面からゆるやかに外下方にのびる。天井部端で稜をなす。口縁部は凹状をなし、内傾気味。	○天井部外面２分の１は回転ヘラ削り調整。 ○天井部内面３分の２はナデ調整。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：良好 色調：淡黄灰色 ロクロ：左方向

調査区	器形	図版番号	法量（cm）	形態の特徴	成形の特徴	備考
第二灰原	杯蓋	136	口径：16.0 器高： 3.2	○偏平な擬宝珠様つまみを貼付、天井部平坦面からなだらかに外下方にのびる。この境で強い稜をなす。口縁部はほぼ垂直におちる。	○天井部外面２分の１は回転ヘラ削り調整。 ○天井部内面２分の１はナデ調整。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：良好 色調：淡黒灰色 ロクロ：左方向
		137	口径：16.4 器高： 3.5	○天井部中央にやや偏平な擬宝珠様つまみを貼付、天井部平坦面からなだらかに段をなしながら外下方にのびる。口縁部はわずかに凹状をなし、垂直におちる。	○天井部外面３分の２は回転ヘラ削り調整。 ○天井部内面中央部に一定方向のナデを残す。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：不良（変形） 色調：淡黒灰色 ロクロ：右方向
		138	口径：16.4 器高： 3.5	○天井部中央にやや偏平な擬宝珠様つまみを貼付、天井部平担面からなだらかに外下方にのびる。口縁部は凹状を成し内傾する。	○天井部外面３分の２は回転ヘラ削り調整。 ○天井部内面３分の２はナデ調整。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：生焼 色調：淡茶灰色 ロクロ：左方向
		139	口径：18.0 器高： 3.5	○偏平な擬宝珠様つまみを貼付、天井部平坦面からなだらかに外下方にのびる。口縁部は内傾する。	○天井部外面２分の１は回転ナデ調整。 ○天井部内面２分の１は丁寧なみがきを施す。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：やや不良 色調：淡黄灰色 ロクロ：右方向
		140	口径：18.0 器高： 3.7	○偏平な擬宝珠様つまみを貼付し、天井部平坦面からゆるやかに外下方へのびる。口縁部は凹状をなし内傾する。 ○外面に自然釉が残る。	○天井部外面２分の１は回転ヘラ削り調整。 ○天井部内面３分の２は丁寧なナデ調整。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：やや不良 色調：淡黄灰色 ロクロ：右方向
		141	口径：18.2 器高： 3.3	○天井部中央に偏平な擬宝珠様つまみを貼付し、平坦面からなだらかに下がる。口縁部は内傾する。 ○天井部外面に重ね焼き痕があり、その部分以外で自然釉が残る。	○天井部外面２分の１は回転ヘラ削り調整。 ○天井部内面３分の２は丁寧なナデが施されている。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：生焼 色調：淡茶白色 ロクロ：左方向
		142	口径：17.0 器高： 2.4	○天井部中央に不整形なつまみを貼付、天井部平坦面から段をなして、口縁部に至る。口縁部はやや内傾する。	○天井部外面３分の２は回転ヘラ削り調整。 ○天井部内面３分の２は丁寧なナデ調整。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：やや不良 色調：淡黄灰色 ロクロ：右方向
		143	口径：16.2 器高： 2.8	○偏平な擬宝珠様つまみを貼付、天井部平坦部からなだらかに外下方へのびる。口縁部はやや丸味をおびるが垂直におちる。	○天井部外面２分の１は回転ヘラ削り調整。 ○天井部内面中央部に一定方向のナデが残る。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：良好 色調：淡黒灰色 ロクロ：右方向

調査区	器形	図版番号	法量（cm）	形態の特徴	成形の特徴	備考
第二灰原	杯蓋	144	口径：17.0 器高：4.0	○天井部中央に偏平なつまみを貼付。天井部は全体的に丸味をもち、口縁部はやや内湾気味におちる。	○天井部外面3分の2は回転ヘラ削り調整。 ○天井部内面2分の1はナデ調整。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：良好 色調：淡黒灰色 ロクロ：左方向
	杯身	145	口径：10.6 器高：3.3	○やや内側に入りこんだ形の底部面から立ち上がり、体部から口縁部にかけて内湾する。口縁端部は比較的丸く収まる。	○底部外面は回転ヘラ切り未調整。 ○底部内面中央に一定方向のナデが残る。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：不良（変形） 色調：外、黒灰色 内、淡黄灰色 ロクロ：左方向
		146	口径：10.8 器高：3.4	○平坦な底部面から立ち上がり、体部・口縁部は内湾気味になる。口縁端部は尖り気味に収まる。	○底部外面は回転ヘラ切り未調整。 ○底部内面中央に一定方向のナデを残す。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：良好 色調：淡黒灰色 ロクロ：左方向
		147	口径：11.0 器高：4.2	○平坦な底部面から丸味をおびて立ち上がり、口縁部はわずかに内湾気味となる。体部中央に帯状文を認める。口縁端部は尖り気味に収まる。 ○底部外面に∈のヘラ記号の様なものを認める。	○底部外面は回転ヘラ切り未調整。 ○底部内面は丁寧なみがきを施す。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：やや不良 色調：淡黄灰色 ロクロ：右方向
		148	口径：12.6 器高：3.7	○やや不安定な底部面から、わずかに丸味をおびて立ち上がる。口縁部は内湾気味で、端部は比較的尖り気味に収まる。	○底部外面はヘラ切り未調整。 ○底部内面中央部に一定方向のナデを施す。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：良好 色調：淡黄灰色 ロクロ：左方向
		149	口径：10.6 器高：3.2	○平坦な底部面から直接体部に立ち上がる。体部中央で小さく屈曲し口縁部に至る。口縁端部はやや尖り気味に収まる。	○底部外面は回転ヘラ切り未調整で、粘土紐痕を残す。 ○底部内面中央部にナデを施す。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：やや不良 色調：淡黒灰色 ロクロ：右方向
		150	口径：11.4 器高：3.6	○ほぼ平坦な底部面から直接体部へ至る。口縁端部はやや尖り気味に収まる。	○底部外面は回転ヘラ切り未調整。 ○底部内面中央部に一定方向のナデを施す。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：やや不良 色調：淡黄灰色 ロクロ：左方向

調査区	器形	図版番号	法量（cm）	形態の特徴	成形の特徴	備考
第二灰原	杯身	151	口径：12.0 器高： 3.5	○平らな底部面から直接体部へ至る。口縁部はやや内湾気味で端部は比較的丸く収まる。	○底部外面は回転ヘラ切り未調整。 ○底部内面中央に一定方向のナデを施す。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：やや不良 色調：淡黄灰色 ロクロ：左方向
		152	口径：12.0 器高： 3.3	○平坦な底部面から直接体部へ至る。口縁端部は尖って収まる。	○底部外面は回転ヘラ切り未調整。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：良好 色調：黄灰色 ロクロ：左方向
		153	口径：10.4 器高： 3.0	○平坦な底部面から丸味をおびて立ち上がる。口縁端部は比較的丸く収められている。	○底部外面は回転ヘラ切り未調整。 ○底部内面は一定方向のナデ調整。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：良好 色調：淡黄灰色 ロクロ：右方向
		154	口径：11.0 器高： 3.4	○平坦な底部面より丸味をおびて立ち上がる。口縁部はわずかに内湾気味で、端部はやや尖り気味に収まる。	○底部外面は回転ヘラ切り未調整。 ○底部内面中央に一定方向のナデを施す。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：やや不良 色調：淡黒灰色 ロクロ：右方向
		155	口径：11.2 器高： 3.5	○やや不安定な底部面から丸味をおびて立ち上がる。口縁端部は尖り気味に収まる。	○底部外面はヘラ切り未調整で、粘土紐痕を残す。 ○底部内面は一定方向のナデ調整。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：やや不良 色調：淡黄灰色 ロクロ：左方向
		156	口径：12.0 器高： 3.2	○平坦な底部面から丸味をおびて外上方へ立ちあがる。口縁端部は比較的丸く収まる。	○底部外面は回転ヘラ切り未調整。 ○底部内面はみがきが施されている。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：やや不良 焼成：良好 色調：淡黄灰色 ロクロ：右方向
		157	口径：12.2 器高： 3.1	○平坦な底部面から丸味をおびて立ち上がり、口縁部で小さく外反する。口縁端部は丸く収まる。	○底部外面はヘラ切り未調整。 ○底部内面中央に一定方向のナデが残る。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：やや不良 色調：淡黄灰色 ロクロ：左方向
		158	口径：12.4 器高： 3.4	○ほぼ平坦な底部面から、やや屈曲して外上方へ立ち上がる。口縁端部はやや尖り気味に収まる。	○底部外面は回転ヘラ切り未調整。 ○底部内面中央に一定方向のナデが残る。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：やや不良 色調：淡黄灰色 ロクロ：右方向

調査区	器形	図版番号	法量（cm）	形態の特徴	成形の特徴	備考
第二灰原	杯身	159	口径：11.2 器高：3.5	○全体的に丸味をおびており、平坦な底部面から丸味をおびて立ち上がり、体部はやや内湾気味で、口縁部は小さく外反する。口縁端部は尖り気味に収まる。	○底部外面は回転ヘラ切りで、中央部以外は丁寧にみがかれている。 ○底部内面中央はヘラ削り調整で、その外周にカキ目を施す。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：やや不良 色調：暗灰色 ロクロ：左方向
		160	口径：11.6 器高：3.5	○平坦な底部面から外上方へやや内湾気味に立ち上がり、口縁部で小さく外反する。口縁端部はやや尖り気味に収まる。	○底部外面はヘラ切り未調整。 ○底部内面中央に一定方向のナデが残る。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：やや不良（変形） 色調：淡黒灰色
		161	口径：12.2 器高：2.6	○ほぼ平坦な底部面から丸味をおびて立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。口縁端部は比較的丸く収まる。	○底部外面は回転ヘラ切り未調整。 ○底部内面中央に一定方向のナデが残る。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：良好 色調：黒灰色 ロクロ：右方向
		162	口径：12.2 器高：3.6	○ほぼ平坦な底部面から丸味をおびて立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。口縁端部は丸く収まる。	○底部外面は回転ヘラ切り未調整。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：不良（変形） 色調：淡黄灰色 ロクロ：右方向
		163	口径：12.7 器高：3.3	○ほぼ平坦な底部面から丸味をおびて立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。	○底部外面は回転ヘラ切り未調整で、粘土板の輪郭を部分的に残す。 ○底部内面中央に一定方向のナデを施す。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：やや不良 色調：黄灰色 ロクロ：右方向
		164	口径：13.0 器高：3.2	○ほぼ平坦な底部面から、ややふくらみをおびて立ち上がり、口縁部で外反する。口縁端部はわずかに尖り気味に収まる。	○底部外面は回転ヘラ切り未調整で、粘土紐痕を残す。 ○底部内面中央に一定方向のナデを施す。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：良好 色調：淡黒灰色 ロクロ：左方向
		165	口径：11.8 器高：2.9	○ほぼ平坦な底部面から丸味をおびて外上方へのびる。口縁端部は比較的丸く収まる。 ○内底部端でややおちこみ、溝状を呈して立ち上がる。 ○粘土板痕を明瞭に残す。	○底部外面は回転ヘラ切り未調整。 ○底部内面中央部に一定方向のナデを施す。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：不良（変形） 色調：淡黄灰色 ロクロ：左方向

調査区	器形	図版番号	法量（cm）	形態の特徴	成形の特徴	備考
第二灰原	杯身	166	口径：11.0 器高：4.0	○平坦な底部面から、わずかに段をなして、外上方へのびる。口縁端部はやや尖り気味に収まる。	○底部外面は回転ヘラ切り未調整で、粘土板痕を残す。 ○底部内面中央に一定方向のナデを施す。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：不良（変形） 色調：淡黄灰色 ロクロ：左方向
		167	口径：12.0 器高：4.3	○ほぼ平坦な底部面から丸味をおびて、外上方へのびる。口縁端部はやや尖り気味に収まる。	○底部外面は回転ヘラ切り未調整。 ○底部内面中央部に一定方向のナデを施す。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：不良（変形） 色調：黄灰色 ロクロ：右方向
		168	口径：13.0 器高：3.8	○ほぼ平坦な底部面から丸味をおびて、外上方へのびる。口縁端部はやや尖り気味に収まる。	○底部外面は回転ヘラ切り未調整。 ○底部内面中央に一定方向のナデを施す。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：やや不良 焼成：不良（変形） 色調：淡黒灰色 ロクロ：右方向
	有台杯身	169	口径：15.0 高台径：10.3 器高：4.5	○ほぼ平らな底部面から丸味をおびて立ち上がる。口縁端部は尖り気味に収まる。底部やや内側に八の字形に開く高台を貼付し、内端面で接地する。	○底部外面は回転ヘラ削り調整。 ○底部内面はナデを施す。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：やや不良 焼成：やや不良 色調：淡黄灰色 ロクロ：左方向
		170	口径：15.0 高台径：11.0 器高：4.4	○中央部がおちこむ底部面から立ち上がり、口縁部はやや内湾気味。口縁端部はやや尖り気味に収まる。底部やや内側に内湾気味の高台が貼付され接地面は平らである。	○底部外面は回転ヘラ削り調整。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：良好 色調：淡黒灰色 ロクロ：左方向
		171	口径：16.0 高台径：12.5 器高：3.8	○ほぼ平坦な底部面から直接体部に至る。口縁端部は尖り気味に収まる。底部端やや内側にやや八の字形に開く高台を貼付し、外端面で接地する。	○底部外面は回転ヘラ削り調整。 ○底部内面はナデを施す。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：生焼 色調：淡黄灰色 ロクロ：左方向
		172	口径：16.5 高台径：11.5 器高：3.5	○平らな底部面から小さな段を有しながら立ち上がり、口縁部で小さく外反する。口縁端部はやや尖り気味に収まる。底部やや内側に凹状を成した八の字形の高台を貼付し、内端面で接地する。	○底部外面はヘラ切り未調整。 ○底部内面はナデ調整。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：やや不良 焼成：やや不良（変形） 色調：淡黒灰色 ロクロ：左方向
		173	口径：14.0 高台径：11.2 器高：4.4	○平坦な底部面から丸味をおびて立ち上がり、口縁部はやや内湾気味。口縁端部はやや尖り気味に収まる。高台は底部端に貼付され、ハの字形に開く。接地面は平らである。	○底部外面は回転ヘラ削り調整。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：生焼 色調：淡黄灰色 ロクロ：右方向

調査区	器形	図版番号	法量（cm）	形態の特徴	成形の特徴	備考
第二灰原	有台杯身	174	口径：14.5 高台径：10.8 器高：3.8	○平坦な底部面から丸味をもって立ち上がる。口縁端部は尖り気味に収まる。底部端にハの字形に開く高台を貼付し、内端面で接地する。	○底部外面は回転ヘラ削り調整。 ○底部内面にナデを施す。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：良好 色調：淡黄灰色 ロクロ：左方向
		175	口径：15.4 高台径：11.0 器高：4.5	○平坦な底部面から外上方へのびる。口縁端部は尖って収まる。底部端にハの字形に開く高台を貼付し、内端面で接地する。	○底部外面はヘラ切り未調整。 ○他は回転ナデを施す。	胎土：良好 焼成：不良 色調：淡黄灰色 ロクロ：左方向
		176	口径：15.5 高台径：11.2 器高：4.0	○平坦な底部面から丸味をおびて立ち上がる。口縁端部はやや尖り気味に収まる。底部端にややハの字形に開く高台を貼付し、接地面は平らである。	○底部外面は回転ヘラ削り調整。 ○底部内面はナデを施す。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：やや不良 色調：淡黒灰色 ロクロ：左方向
		177	口径：15.8 高台径：11.1 器高：4.5	○ほぼ平坦な底部面から丸味をおびて立ち上がる。口縁端部は尖って収まる。底部端にハの字形に開く高台を貼付し、高台底部は凹状を成す。内端面で接地する。	○底部外面は回転ヘラ切り未調整。 ○底部内面は一定方向のナデ調整。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：やや不良 焼成：やや不良 色調：淡黄灰色 ロクロ：右方向
		178	口径：16.4 高台径：12.3 器高：4.1	○平坦な底部面から、やや段を有しながら体部に至る。口縁部は尖り気味に収まる。底部端にハの字形に開く高台を貼付し、高台底部は凹状を成す。接地面は平らである	○底部外面はヘラ切り未調整で、粘土紐痕を明瞭に残す。 ○底部内面は丁寧なみがきを施す。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：不良（変形） 色調：淡黄灰色 ロクロ：左方向
		179	口径：16.5 高台径：11.3 器高：4.0	○平坦な底部面から丸味をおびて立ち上がる。口縁端部はやや尖り気味に収まる。底部端にハの字形に開く高台を貼付し、内端面で接地する。	○底部外面はヘラ切り未調整で粘土紐痕を明瞭に残す。 ○底部内面はナデを施す。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：不良（変形） 色調：淡黄灰色 ロクロ：左方向
		180	口径：17.2 高台径：13.4 器高：4.4	○ほぼ平坦な底部面から丸味をおびて立ち上がる。口縁端部はやや尖り気味に収まる。底部端にハの字形に開く高台を貼付し、接地面は平らである。	○底部外面は回転ヘラ削り調整。 ○底部内面はナデを施す。 ○他は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：良好 色調：黒灰色 ロクロ：左方向
	甕	181	口径：38.0	○口頸部はやや長めで外上方へのび、口縁部でやや内湾気味となり、肥厚である。肩部はなだらかに外下方に下がる。	○肩部外面は平行叩きで、一部半スリケシを施す。 ○肩部内面は同心円文痕が残る。	胎土：良好 焼成：良好 色調：淡灰色

調査区	器形	図版番号	法量（cm）	形態の特徴	成、形の特徴	備考
第二灰原	長頸壺	182	口径：12.0 基部径： 6.8 頸部高：11.5	○口頸基部は比較的細く、口縁部で大きくラッパ状に開く。端部は比較的丸く収まる。端部口径が頸基部径より大きくなる。頸部中央に2条の沈線を施す。 ○口頸部内面及び外面の一部に自然釉が残る。	○口頸部内外面ともに回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：良好 色調：淡緑灰色
	短頸壺	183	口径： 8.2 体部最大径：14.6	○口頸部はやや内傾気味で、口縁端部は比較的丸く収まる。肩部はなだらかに下り、中央に重ね焼き痕が残り、それ以下は釉がかかる。 ○口頸部中央に一条の沈線を認める。	○内外面ともに回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：良好 色調：淡黄灰色 ロクロ：右方向
		184	口径：13.2	○口頸部は短く、わずかに外上方にのびる。口縁端部は、ほぼ平らに収まる。肩部は大きく外下方に下り、なだらかである。肩部外面に把手痕らしきものを認める。	○内外面ともに回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：良好 色調：淡黄灰色 ロクロ：右方向
		185	口径：13.5	○口頸部は外上方へまっすぐのびる。肩部外面上方に一条の鈍い沈線を呈しなだらかにおりて、体部に至る。	○内外面ともに回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：良好 色調：淡黄灰色 ロクロ：左方向
		186	口径：17.5	○口頸部は外上方へのび、口縁部でわずかに外反気味になる。肩はほとんど張らずになだらかに下がる。	○内外面ともに回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：良好 色調：淡黒灰色 ロクロ：右方向
		187	口径：27.0	○体部より直線的に外上方へのびる。口縁端部は凹状を成して内傾する。 ○口縁部に一条の沈線を施す。	○内外面ともに回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：やや不良 色調：淡黄灰色
		188	高台径：10.6	○台部上方から比較的なだらかに外下方へおりた後、やや平坦面をなして、ほぼ垂直に短くおちる。	○内外面ともに回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：良好 色調：淡黄灰色
試掘	杯身熔着品	189	口径：11.1① 11.3② 11.5③ 器高： 4.0③	○杯身の熔着品で3個体の積み重ねである。 ○ほぼ平坦な底部面から立ち上がり、口縁部で内湾気味となる。口縁端部は丸く収まる。（最下位の杯身③）	○底部内面中央にナデを施す。（最上位の杯身①） ○体部内外面は回転ナデ調整。	胎土：良好 焼成：不良 色調：淡黄灰色

調査区	器形	図版番号	法量（cm）	形態の特徴	成形の特徴	備考
試掘	杯身熔着品	190	口径：13.8③ 12.2④ 11.5⑤ 器高： 4.1⑤	○杯身の熔着品で、5個体の積み重ねである。 ○口縁端部は丸く収まる。	○最下位⑤の外面は回転ナデ調整。	胎土：やや不良 焼成：不良 色調：淡黒灰色
	蓋・有台杯身熔着品	191	口径：17.2①（蓋） 17.5②（身） 16.5③（蓋） 16.0④（身） 器高： 3.9④ 高台径：11.9② 11.0④	○蓋と有台杯身の熔着品で、4個体で2組の積み重ねである。有台杯身の上に蓋を裏返しにして置いている。 ○蓋と杯身の間に擬宝珠様つまみと思われるものをはさんでいる。	○最下位④の底部外面はヘラ切り未調整。	胎土：良好 焼成：良好 色調：淡黒灰色

表　菅江窯跡、西谷窯跡出土須恵器の蛍光X線分析試料の観察表とデータ

	報告番号	種別	型式	色調	焼成		備考	K	Ca	Fe	Rb	Sr
菅江窯跡（菅江）	1	須恵器	杯蓋	青灰色	堅緻	●		0.511	0.090	2.21	0.745	0.319
	2	〃	〃	〃	〃	●	試料は表面採取。	0.505	0.150	2.28	0.759	0.345
	3	〃	〃	青灰色（褐色）	あまい	◑	生焼け	0.498	0.107	2.78	0.682	0.309
	4	〃	〃	青灰色	堅緻	●		0.479	0.074	2.95	0.637	0.275
	5	〃	杯身	〃	〃	●		0.367	0.046	4.71	0.459	0.162
	6	〃	壺	〃	〃	●		0.490	0.073	2.33	0.716	0.278
	7	〃	〃	〃	〃	●		0.551	0.073	2.27	0.842	0.308
	8	〃	〃	〃	〃	●		0.543	0.088	2.15	0.790	0.285
	9	〃	〃	〃	〃	●		0.501	0.104	3.61	0.651	0.248
	10	〃	甕	青灰色（橙色）	〃	◑		0.513	0.116	1.91	0.741	0.326
	11	〃	〃	〃（〃）	〃	◑		0.471	0.095	2.71	0.661	0.261
	12	〃？	？	赤褐色	あまい	◑	一部分灰黒色に焼ける 生焼け	0.358	0.101	5.06	0.363	0.154
西谷窯跡（烏脇）	1	須恵器	杯蓋	青灰色	堅緻	●	生焼け状 試料は表面採取。	0.641	0.155	1.84	0.828	0.313
	2	〃	〃	〃	〃	●		0.635	0.120	3.44	0.768	0.215
	3	〃	杯身	灰褐色	ややあまい	◑		0.603	0.124	2.14	0.828	0.265
	4	〃	〃	青灰色	堅緻	●		0.683	0.117	3.06	0.771	0.239
	5	〃	〃	青灰色（橙色）	〃	◑		0.700	0.143	2.83	0.785	0.250
	6	〃	〃	青灰色	〃	●		0.718	0.130	3.15	0.810	0.269
	7	〃	壺	〃	〃	●		0.766	0.186	1.67	0.959	0.323
	8	〃	〃	青灰色（橙色）	〃	◑		0.688	0.124	3.32	0.805	0.232
	9	〃	甕	〃	〃	◑		0.693	0.152	3.33	0.830	0.246
	10	〃	〃	青灰色	〃	●		0.672	0.131	3.28	0.763	0.240
	11	窯壁	—	〃	（よく焼きしまる）	●		0.568	0.718	3.21	0.531	0.562

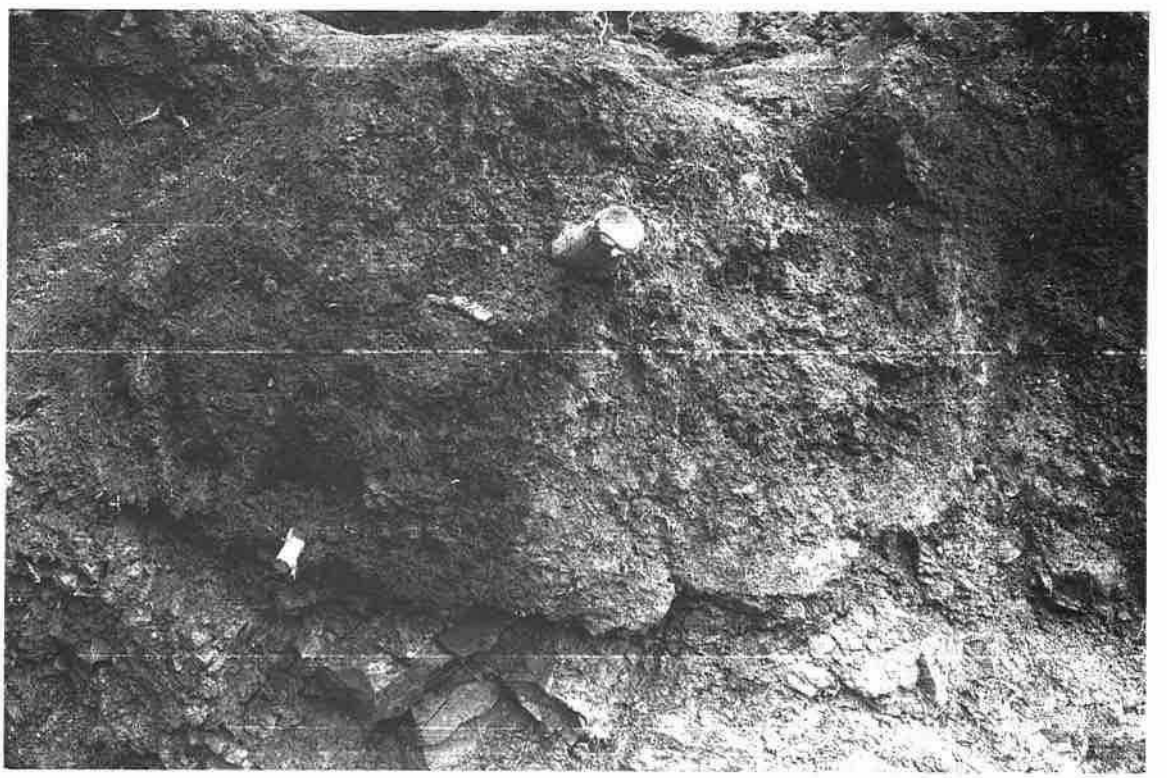
奈良教育大学　三辻利一氏　　金沢大学　北村圭弘氏 提供。

註）・北村が試料の選択、観察をおこない、三辻が分析をおこなった。
・焼成の○は酸化、●は還元、◑は同一個体に両方あるもの、もしくは中間色。
・色調の（　　）内は断面色。

調査前風景（西から）

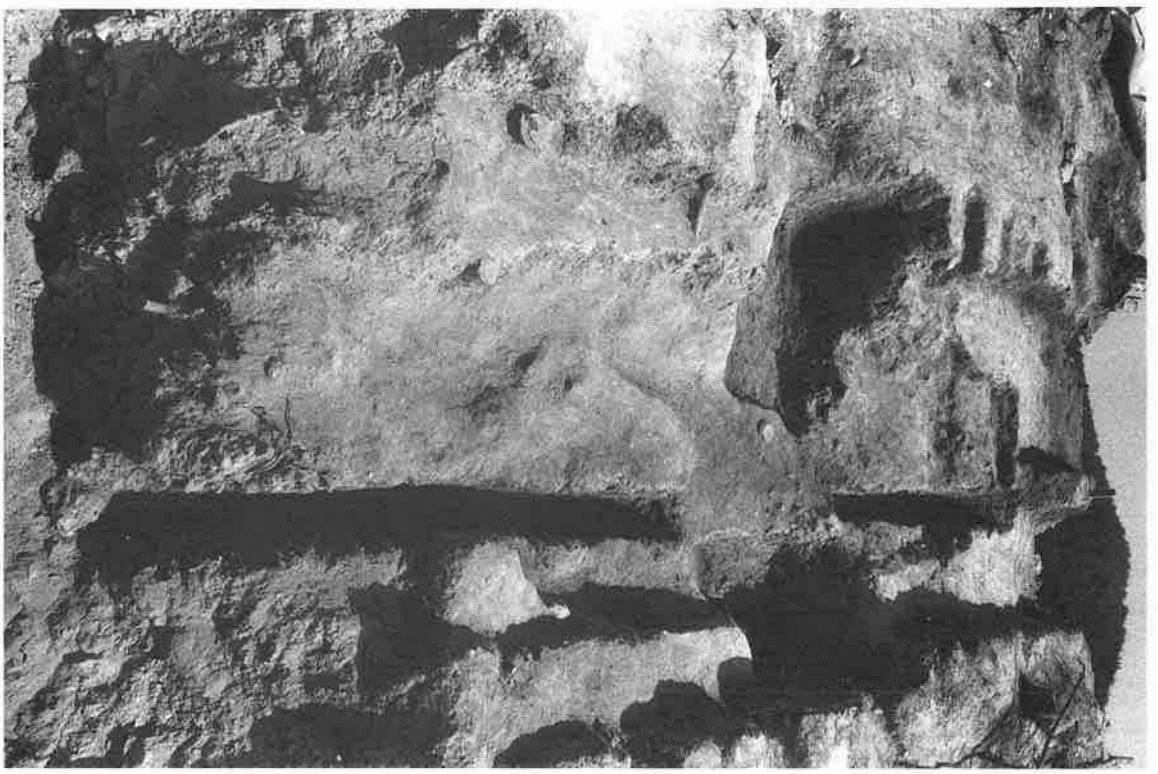
調査前風景（東から）

1号窯露出部（調査前）



1号窯断面（B－B′）

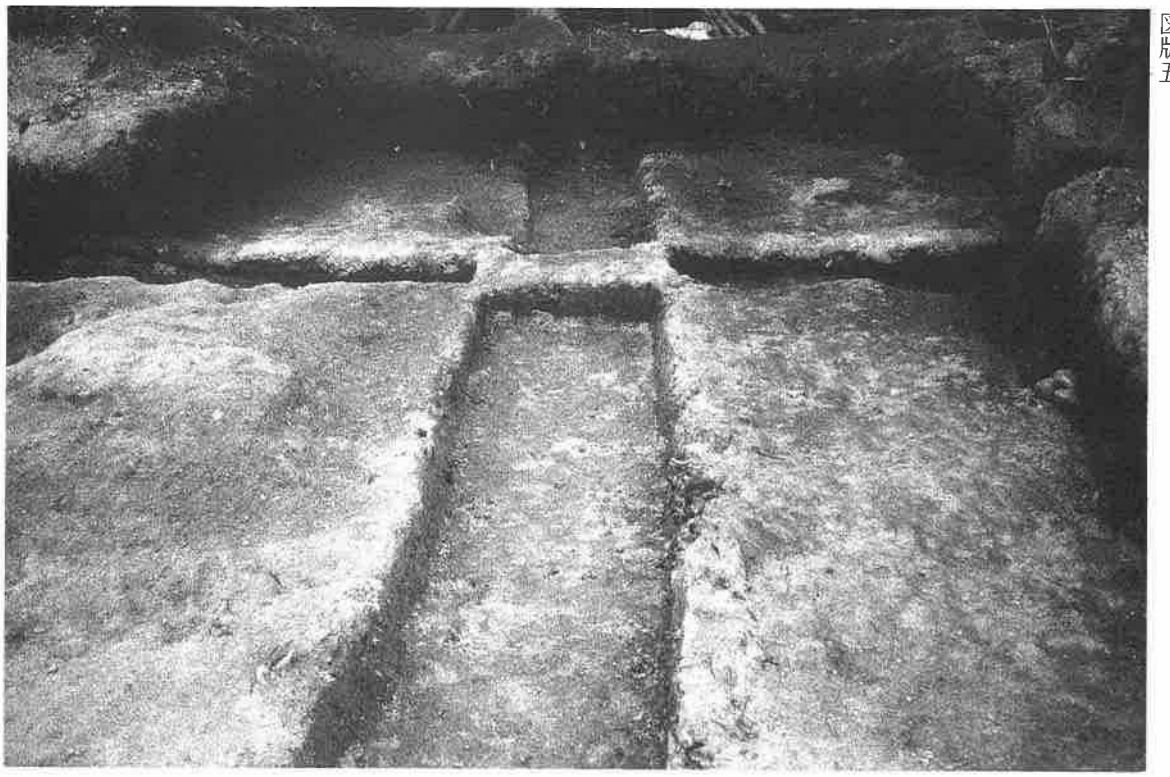
1号窯第3次層（上層）検出状況



1号窯第2次層（中層）検出状況

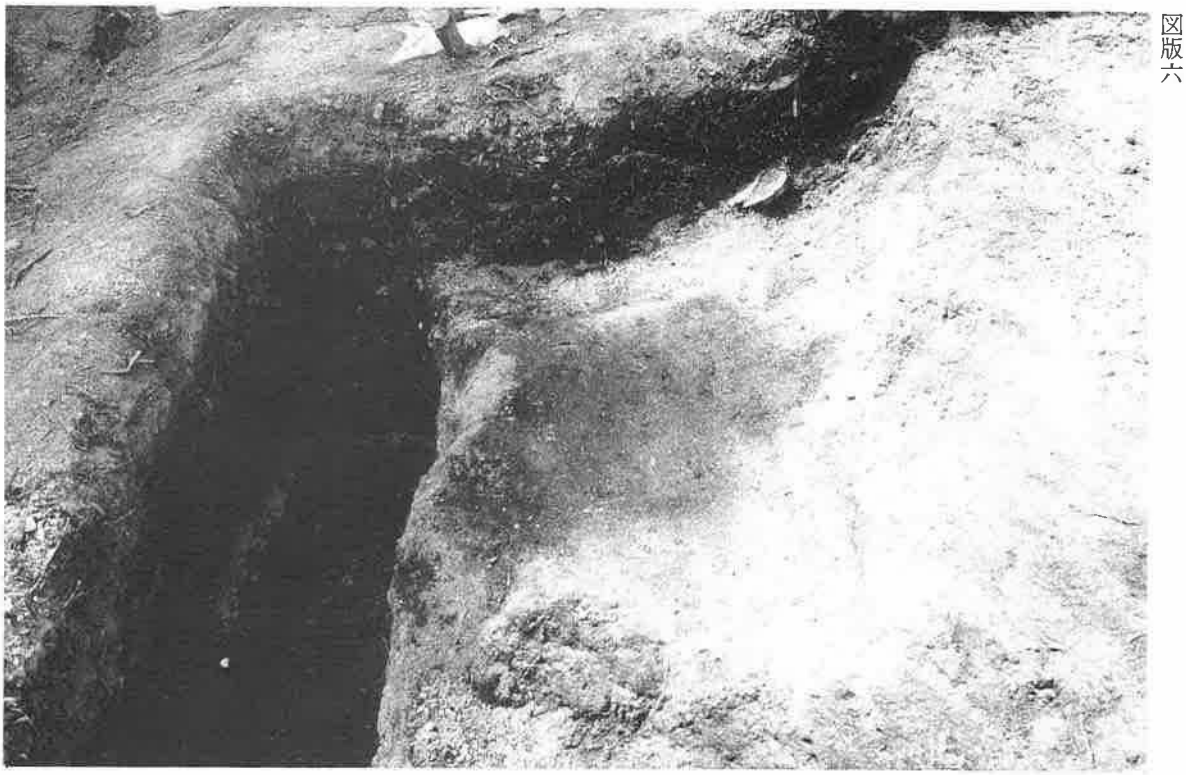
1号窯第1次層（下層）検出状況

1号窯遺物出土状況

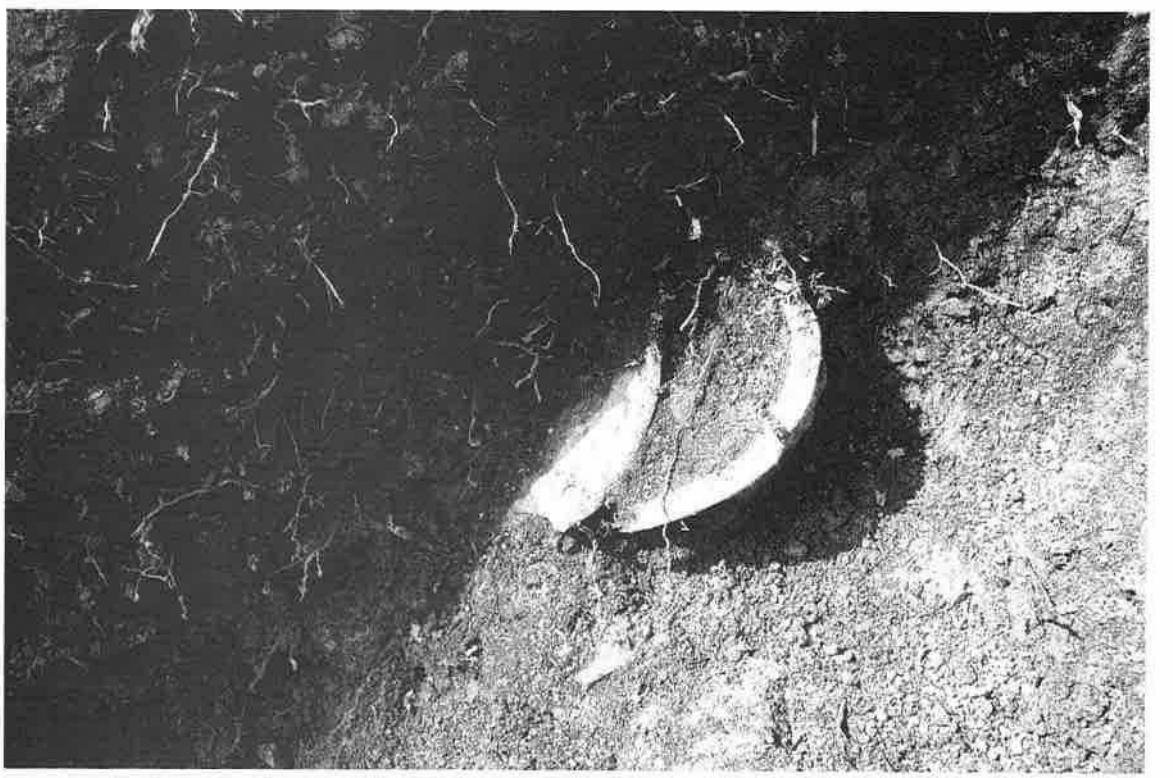


第一灰原検出状況（北から）

第二灰原全景（西から）



第二灰原検出状況



第二灰原遺物出土状況

5

19

9

20

10

21

13

22

16

25

第一灰原出土遺物

26

31

27

32

28

37

29

38

30

40

第一灰原出土遺物

42

53

43

54

46

55

47

56

50

61

第一灰原出土遺物

64

77

65

78

69

79

70

84

72

85

第一灰原出土遺物

96

101

102

104

105

106

第一灰原出土遺物

108

111

115

114

116

119a

（下から）

119b

第一灰原出土遺物

117

118

122

123

第一灰原出土遺物

124

147

133

149

141

151

145

156

146

158

第二灰原出土遺物

159

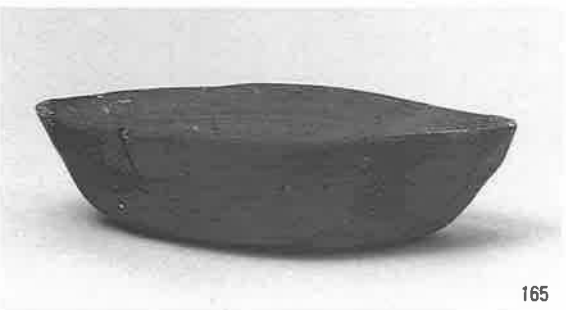
167

162

168

164

169


165

178

166

180

第二灰原出土遺物

181

182

188

189

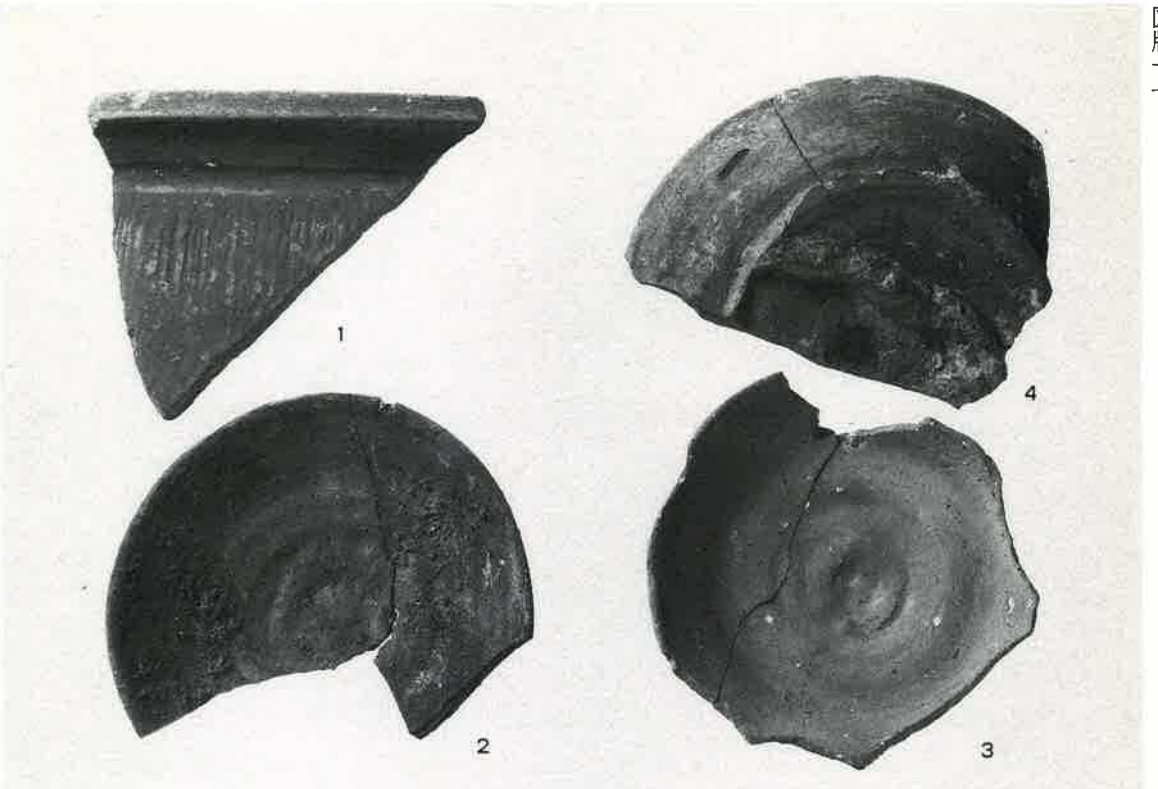
190

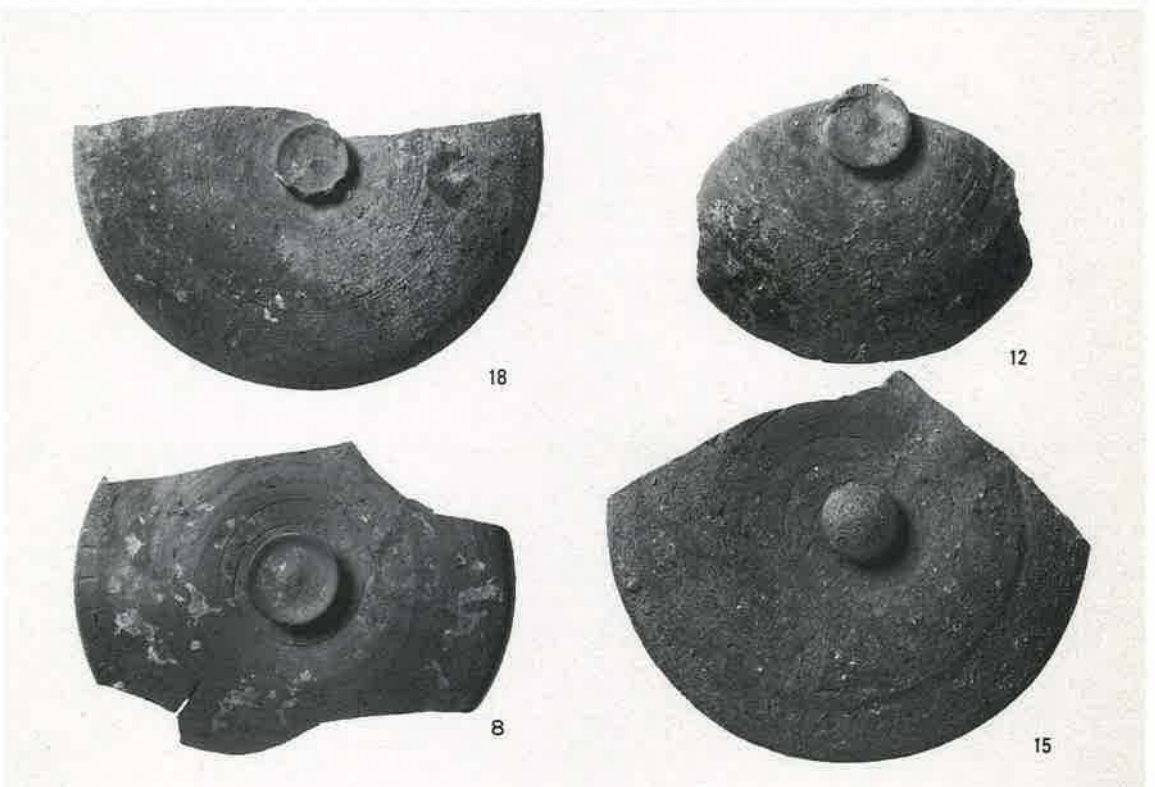
191 a

（上から）

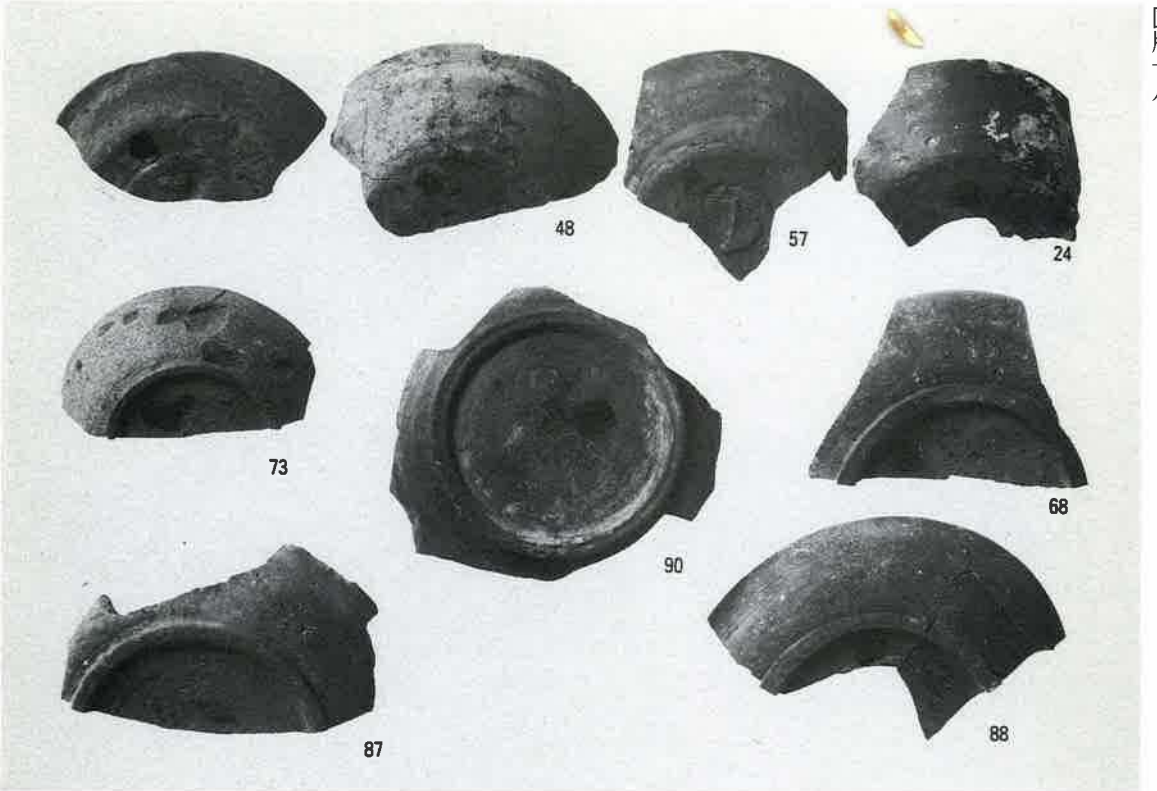
191 b

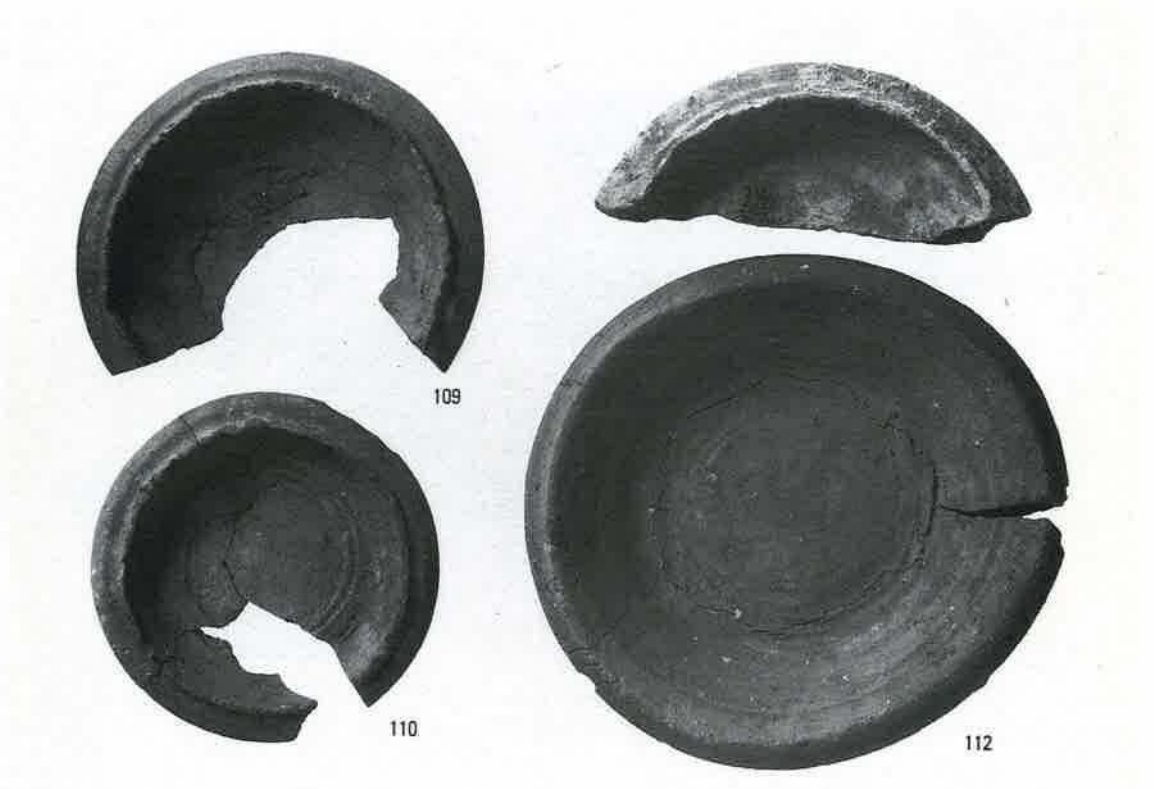
第二灰原、試掘出土遺物



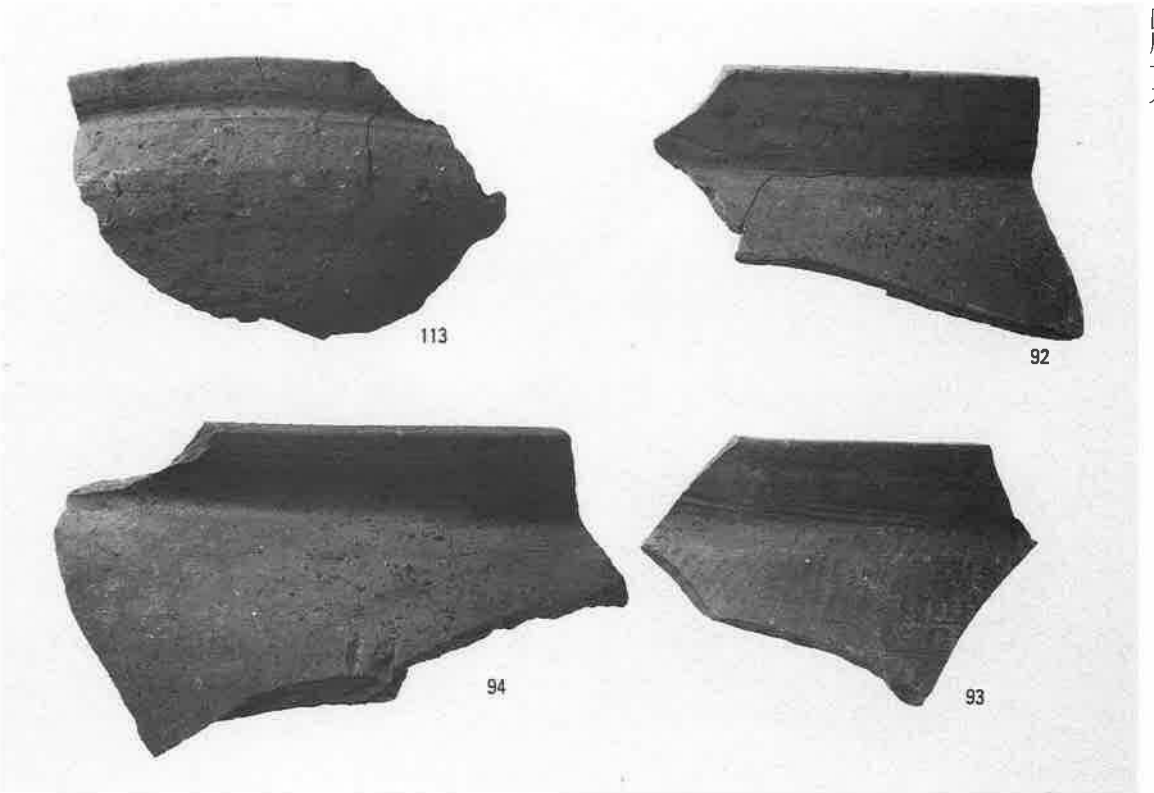


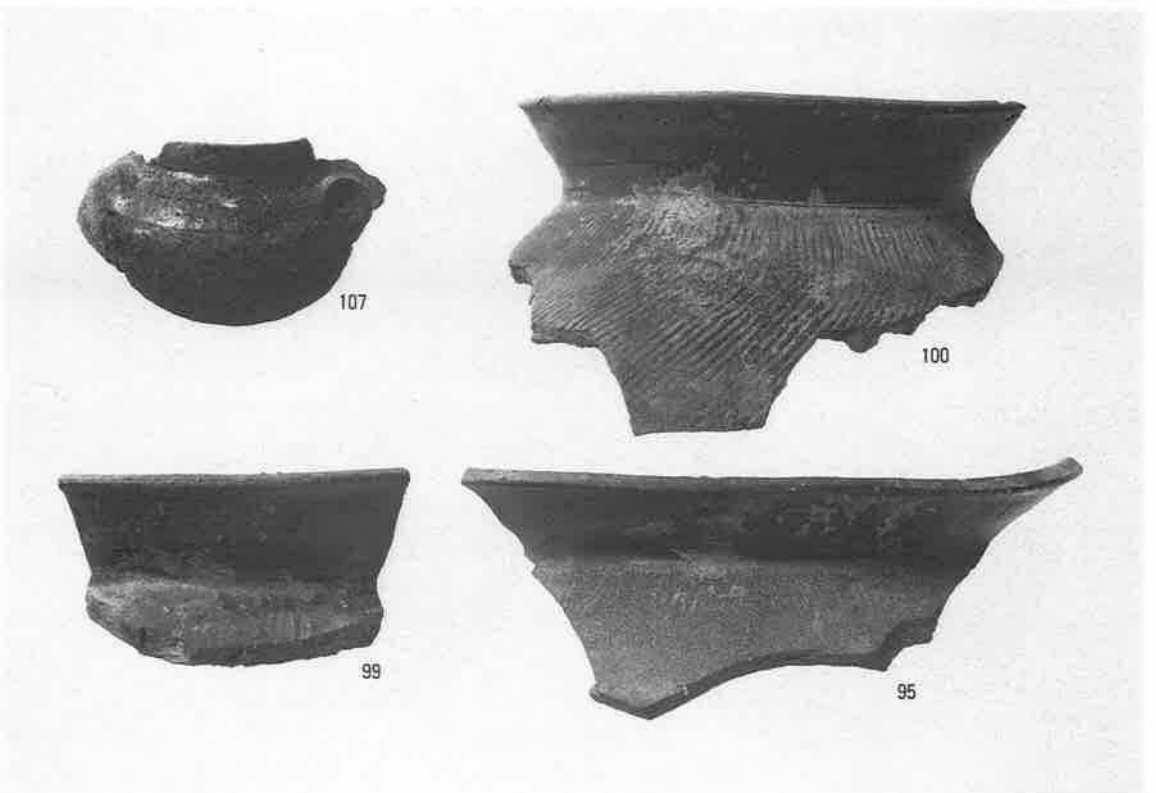
1号窯（1～4）第一灰原（8、12、15、18）出土遺物



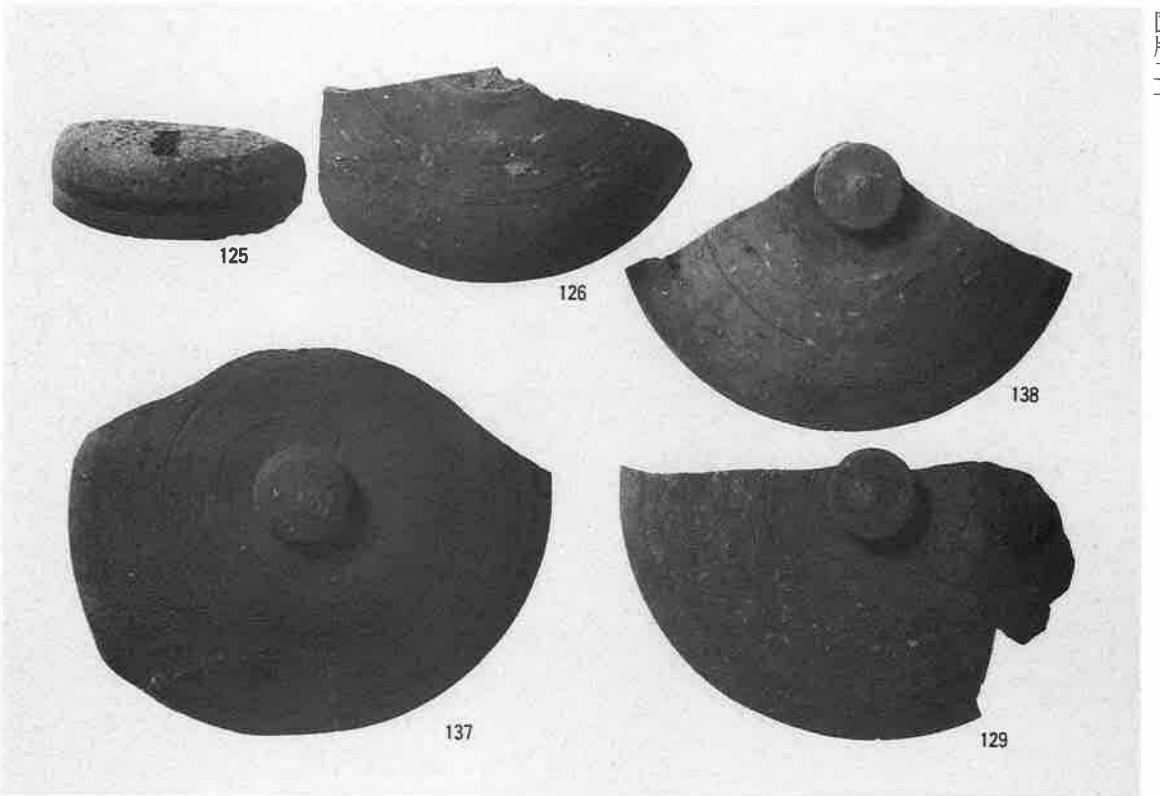


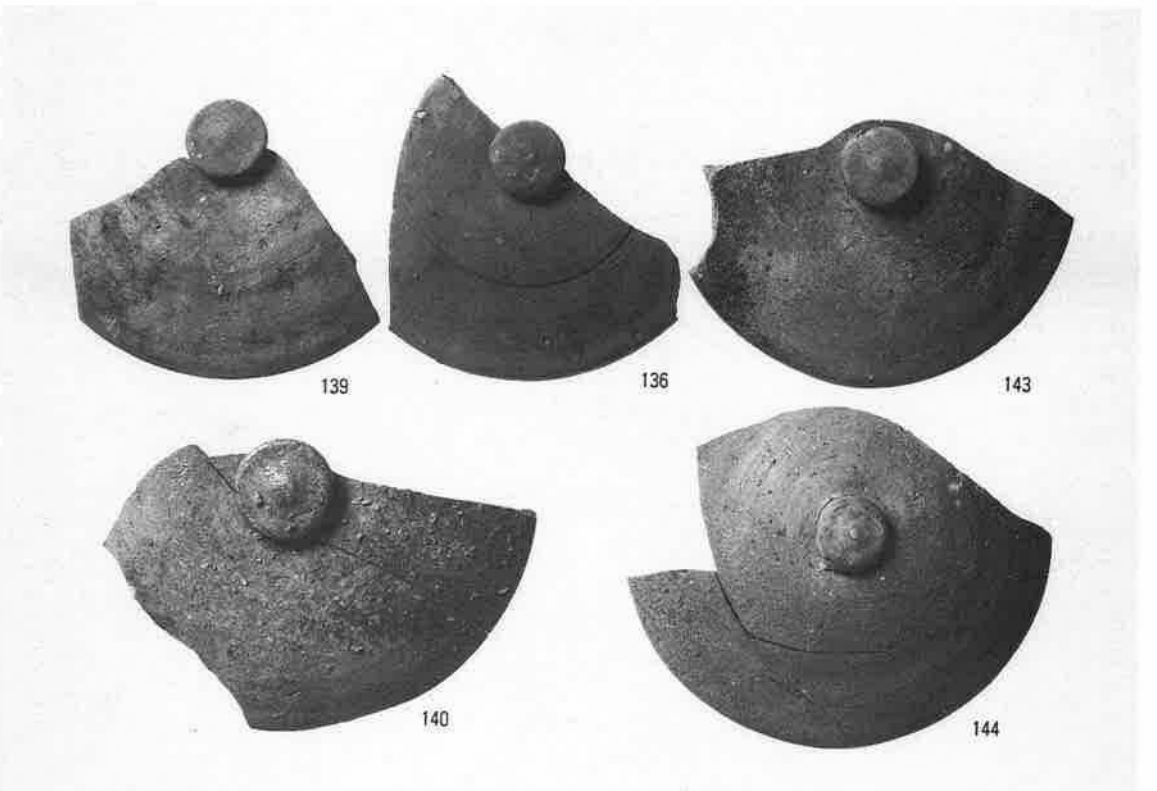
第一灰原出土遺物





第一灰原出土遺物





第二灰原出土遺物

第二灰原出土遺物

菅江遺跡発掘調査報告書

昭和62年3月

発　行

山東町教育委員会

滋賀県坂田郡山東町長岡1206

TEL　(0749) 55-2040

印　刷

立木印刷

滋賀県坂田郡米原町醒井478-1

TEL　(0749) 54-2662